21世紀フォーラム

第17号

特集 バベルの塔 PART II

表紙／クロイワ・カズ

●目次／21世紀フォーラム第17号●

21世紀コラム	斎藤志郎	マラッカ史断章	2
	米山俊直	祇園祭の再調査	3
	橋口　收	酒！　酒！　酒！	4
	林　雄二郎	日本語に誇りを持て	5
	市川真紀夫	油田地帯の将来	6
	富舘孝夫	これからの石油の見通し	8
	座談会■東北開発の新展開 若林 彊／伊藤善市／有岡恭助／笠井章弘		10
	座談会■高齢化社会のソフト〈21世紀へのソフトシリーズ2〉 松下 寛／袖井孝子／吉田寿三郎		14
	政策科学研究所	アメリカＣＡＴＶ事業の展開	19
		21世紀の目	20

●特集／バベルの塔PART II

	対談■我々は何を創ろうとしているのか 色川大吉／伊東俊太郎		24
	伏見康治	科学について	29
	三木　卓	楫とりの下で	30
	五代利矢子	家庭の混乱	33
	村上陽一郎	学問における拡大と集中	34
	川喜田二郎	個と全体	37
	対談■人間はそれにどれだけ適応できるか 奈良本辰也／河合雅雄		38
	木田　宏	教育の塔	43
	中井久夫	精神＝身体と「バベルの塔」── 解体か分裂か	44
フォーラムズ・フォーラム	2001年文庫	『ポツダム会談』	47
	おじゃまします	中村　元さん	48
	私の近況	木元教子／本間長世／R・J・バロン	50
	追悼東畑精一先生 松本重治／茅誠司／有澤廣巳／向坊隆／大来佐武郎／村上兵衛／三枝佐枝子／武原はん／加藤秀俊／笠井章弘		52
	●21世紀フォーラム部会メンバー		60

21世紀コラム

マラッカ史断章

斎藤志郎

日本経済新聞社論説委員＝茅誠司部会

マラッカ市郊外スプリング・ガーデンに住むポルトガル人の歴史家M・J・ピンタド氏を訪ねたのは、冬季モンスーンが明けて暑さも一段と厳しくなった一月初めのことだった。前年の四月、クアラルンプールで偶然知り合ったポルトガル系ユーレシアンの名門出身で元外交官のJ・D・C氏から、十五、六世紀のむかしマラッカ王国華やかなりし頃、この国で「日本のサムライ」が活躍していた史実がある、という耳寄りな話を聞き、その史実に詳しいというピンタド氏を訪ねる気になったのであった。

〝埋もれた郷土史家〟といった感じのピンタド氏は、はじめ宣教師としてこの地に渡り、ポルトガル語で書かれた史料を蒐集しているうちに、貴重な一次史料を編纂し学会に発表するなど、いつの間にか歴史家の道を歩むことになった。マラッカ在住すでに三十年を越えるという。

ピンタド氏が八〇年に発刊した『古代マラッカ漫歩』と題する小冊子によると、西洋はベニスから東洋は中国までの交易ルート最大の中継港として栄えた十五世紀からのマラッカでは、そのユニークな〝国際都市〟としての機能を反映して、土着のマレー語のほか八十四の外語がグジャラート人、クリン人、ペルシャ人、中国人その他多数の異人種グループの間で話されていたという。その中には、「レキオス」あるいは「グオレス」と呼ばれる不思議な人種が混じっていた。

ポルトガル商館の仲買人トメ・ピレス（一五一二～一五年マラッカ滞在）の残した旅行記によれば、「レキオス」は処女を生け贄に供する異教徒であり、白人と同じほど色白で、中国人より立派な身形をして、威厳があった。彼らは、金、銅、武器・甲冑のほか紙、絹、オニオンなどの野菜を大量に売りさばき、現金より信用、掛け売りが普通だった。貸倒れのおそれのあるときは、刀を手に持って集金して歩いた、という。中国人やポルトガル人と違って、彼らは女と奴隷は買わなかった。彼らは正直な人間たちであった。

ここで、ピンタド氏が付け加えた注釈だと、刀を持って集金に歩いたことなどから、彼らは古代インド社会の武士の身分をあらわす「クシャトリア」のイメージにそっくりで、今日のマレー人がフィルムで見る「サムライ」が十五、六世紀のマラッカの町を闊歩していたことになる。

もっとも、「レキオス」とか「グオレス」とか呼ばれる人種が日本人であるという確かな記録は見当らない。むしろ「レキオス（Lequios）」は「Liu-chiu」ないし「Ryukyu」つまり琉球人をあらわし、「グオレス（Guores）」も一四六二年と一四八九年のマレー・アラブ航海条約に出てくる「Ghur」ないし「Al-Ghur」の島つまり琉球に相当する名称であることが確認されている。

だが、問題は「レキオス」がマラッカ

にもたらした金や武器類は当時の琉球ではつくれたはずはないということである。それらは日本から出たものに違いない。また、ポルトガル人の見た「グオレス」の好戦的性格は温和でやさしい琉球人の性格とはまるで反対だ。あらゆる兆候から見て、この謎の人種は鎌倉、室町時代に南シナ海一円を荒らし回った倭冠としか考えられないのだが、彼らが日本人(Jampon)として名を残さなかったのは何故か。

その謎を解くカギの一つは、中国の明王朝の法令を無視して、ポルトガル人の冒険家や福建人の密貿易商と手を組んで海賊行為を働く倭冠にしてみれば、身元をかくすのは自然の成り行きだったと考えられることである。また、日本自身そして中国の記録にも、南海における倭冠の所業にふれたものはほとんどない。当時の中国史家にしても、外領マラッカの海賊たちの悪業には、あえてこれを歴史にとどめる価値なきものとして、無関心を装ったのかもしれない。

その空白を埋めるポルトガル人のマラッカ史断章は、古くから南洋に係わり合った日本人の「サムライ」の威信と「海賊」の異名の二面性を伝えていて興味深い。

祇園祭の再調査

京都大学教養学部教授＝加藤秀俊部会

米山俊直

五月三十日午後四時三十分から、京都西陣の料理屋万重の大広間で、祇園祭山鉾連合会の総会が開かれた。田中常雄会長以下、三十一の山町・鉾町の代表が一堂に会して、昨年度の決算を承認し、今年の予算を審議したうえ、会食して散会した。いよいよ今年の祇園祭にむけて、町衆の本格的始動である。これから何度かの協議があり、六月二十日に府・市・警察・消防・交通機関などもふくめた総合打合せ会となり、七月一日から一ヵ月にわたるこの大規模な祭礼の幕があがる。

私がこの祭礼の調査を思い立ったのが一九七三年。ちょうど十年前になる。その年の成果を、『祇園祭――都市人類学ことはじめ』にまとめた（一九七四年中公新書）。十年目なので、改めて調査をしたいと希望し、町の方たちにも折にふれてお願いしてきた。

今年の文化人類学実習の受講学生は二十四人で、私はその人たちと祇園祭の調査をやることにきめた。五月十八日、私は学生たちをつれて、田中連合会長のお宅へ挨拶に行った。四条西洞院のお宅は、その二階一室に全員を収容してしまったのにはびっくりした。そのとき、三十日の総会のことをきき、私は三人の学生とともにその席をかりて、正式に調査協力を依頼してきたのである。これから七月いっぱい、私の暑くて長い夏のフィールドワークがはじまる。

七三年から三年間、祇園祭の調査をやったのち、七六年は生駒山周辺の民間信仰の調査にすごし、つづく七七年からの三年間は大阪の天神祭を調査した。祇園祭とは別の大都市の祭礼である。ついで八〇―八一年は神戸まつり調査、京都が千年、大阪が三百年の伝統を伝えるのに対して、これはわずか十二年の行政主導イベントである。しかし二万人の参加者と百万人の見物を動員するところは、ほぼ京阪のそれに比肩する。

『祇園祭』につづいて『天神祭――大阪の祭礼』も中公新書になった。『神戸まつり』が書ければ三部作というところだが、そうはいかない。八二年の春はカナダにいたので調査はできず、おまけに病気になって帰京。祇園祭も天神祭も病院のテレビで見ることになった。

でも、八一年の神戸まつりの報告書は、八二年三月、学生たちの努力で印刷になった。八一年は、神戸大学の橋本峰雄教授を団長とする六大学合同調査団を組織し、阪大、神戸大、関学、甲南、神戸女学院に京大を加えた六校が加わって調査をおこなった。青木保、池井望、大島襄二、梶原景昭、宮坂敬造、森田三郎の諸先生の応援もえた。ちょうどこの年、神戸市はポートピア'81の博覧会の開催中で、神戸まつりもそのメインの行事を会場の中でやったのである。

三都それぞれの祭礼をひとわたり調査してきて、十年ぶりで私は祇園祭に帰ってきた。その間も、地元なのでテレビ中継を手伝ったりなどしたが、本格的にとりくむのは久し振りである。十年の間に、綾傘鉾と蟷螂山が復活するなど、まつりは一層さかんになった一面もあるが、他方都心には夜間人口ゼロの町内があらわれるなどの変化がある。まつりがさかん

21世紀コラム FORUM'S FORUM

になるのは、そのニーズがあるからだけれども、その持続性を支えているのは、祭礼がはっきりした構造と、その進行をすすめる動因があるからにちがいない。〝さわらぬ神にたたりなし〟とか、〝仏さんホットケ、神さんカマウナ〟といって宗教は敬遠がちの日本人。日本人の六五%は〝無宗教〟と回答する（NHK世論調査）。ではなぜ人口の七五%にあたる人が正月に初詣に出かけるか、この矛盾は説明される必要があろう。

今年もまた、夏の調査がやってくる。ひょっとすると、これが私のライフワークのひとつになるかもしれない。年ごろになっていたのだろう。それからは、どちらかといえば日本酒党といわれて今日にいたっている。

臆面もなく、日本酒メーカーの勉強不足をなじるような文章を書いたこともあるし、日本酒の衰退を嘆いたことも一再ではない。

しかしそのうちに風向きが変わってきた。いわゆる地酒ブームがおこってきたのである。わたくしもご他聞に洩れず、地酒ブームの恩恵に浴すことになった。なんとたくさん、なんとおいしい酒のあることか。しかも、それぞれの個性をもって……。おどろきと発見の連続であった。大メーカーの勉強もはじまってきた。行きつけの飲屋にたのんで酒を変えてもらったこともあるし、少なくとも銘柄二つぐらいはおくべきだ、と説いて併用にしてもらった料亭もある。

酒と多様性——これについて書きだせばきりがない。焼酎といっても千差万別だ。これほど違うのか、と思うほどの違いがある。そして、なんとおいしい焼酎のあることか。

ウィスキー、ブランデーだってそうだ。それぞれの銘柄ごとに個性がある。

しかしなんといっても、多様性となれば葡萄酒にトドメを刺すのではないか。葡萄酒について語るのは、おこの沙汰である。まだまだ、知識と経験不足を自覚している。

酒！酒！酒！

橋口　收
全国銀行協会連合会特別顧問＝茅誠司部会

大酒飲みばかりといわれた兄弟のなかに、たったひとり、まったく酒をうけつけない男がいた。その夫の妻は、夫の兄弟の生きかたと若死のさまを目のあたり見て、自分の子供たちに酒を禁止した。その禁止は、あまり効果がなかったらしい。三人兄弟の子供のうち二人は、やはり酒を飲んで、四十歳の声を聞くか聞かぬうちに他界した。生きていた母は、悲しみながら間もなく世を去った。

たったひとり、母親の禁を破りながら悪運つよく生きつづけ、還暦もこえ父親の死んだ歳に近づきつつある男がいる。〝ソレガ私デス〟。

なんていやらしい書き出しだろうと思われるかもしれないが、酒について書くとなると、どうしてもこのことが頭を離れない。母親が死んでから、間もなく四十年がたつ。もうこうなると、いいもわるいもない。親不孝をしたという自意識はいつしか消えて、高度成長の時代には、時代にふさわしく体力の赴くまま大いに飲んだこと、そして時代や年齢の変化とともに、酒についての趣味にもなにがしかの変化が生じてきたことなどを、平然と回顧するようになってきた。

若いころはアルコールであればなんでもよかった。ずいぶん怪しげな酒も飲んだし、あたまの割れそうな二日酔をおこして無理に出勤したこともあった。しかし、そのころは、だいたい日本酒（ときには「地酒」という名の密造酒）か、金のないときは梅割りかブドー割りの焼酎であった。「旦那、きょうは梅割りにしますか、ブドー割りでいきますか」という飲屋のオヤジの声がなつかしい。

そのうちに、いつしかウィスキーの水割りが中心になっていった。いわゆる高度成長のまっただなかのころである。しかし、ウィスキーの飲みすぎは、奇妙なことに翌日にものすごい脱力感をともなうものであった。この肉体的消耗を避けるには洋風の食べものが必要なことはまもなくわかったが、日本料理との付き合いをなかなか避けることができなかったのだ。

昭和四十四、五年、高度成長の残映のはえるころだ。鳩山威一郎氏（参議院議員）が、大蔵省主計局長で米の過剰問題に頭を悩ましておられた。「主計局の人間は日本酒を飲めよ。少しでも過剰米の処理に役立つから」ということで、次第に日本酒に親しむようになってきた。わたしの年齢も、ちょうど日本酒にむかう

ただ、日本料理にいちばん調和しない酒――それは、おそらく葡萄酒（赤）の高級品だろう。それだからこそ助かるともいえる。最高級の料亭で、最上級の日本料理に芸者さん、それに最高級の赤葡萄酒ときたら、それこそ目から火が出るようなことになるだろう。

ああ、よかった。そんなことがなくて……。美食の神の下された天の配剤にこそ、感謝すべきではないか。

日本語に誇りを持て

林　雄二郎

(財)未来工学研究所副理事長／(財)トヨタ財団専務理事＝大来佐武郎部会

これは慶応大学言語文化研究所の鈴木孝夫教授からのうけうりだが、教授は日本語を国連の公用語にするための運動をすべしというのが年来の主張だそうである。それには立派な理由がある。日本は、国連の分担金の割には出向職員が少ないとかねてからいわれているが、それは、国連の職員となるには少なくとも公用語を二つマスターしていることが条件となることが大きな理由だそうな。英・仏でも、英・西でも何でもいいわけだが、とにかくこれは日本人にはハンデである。もし日本語が公用語となったら、日・英でいいことになり、そうなれば適格者はそれこそワッとふえる。普通の会議に出席する人も一挙に幅がひろがる。国際化という国の方針にも副うことになる。だが、そんなうまい話を誰がきいてくれるだろうかという疑問が残る。ところが鈴木教授によると、それは日本人が自らコンプレックスにとらわれて、はなからそういう運動をしようとしないからだという。アラビア語が今度国連の公用語となったそうだが、教授の言によると、アラビア語をしゃべる人は世界中で六千万人――あるいは八千万だったかも知れないが、何れにしても数千万の単位だった――しかいないのに、彼等は公用語とすることに成功した。日本語は一億二千万人もがしゃべっている。十分に公用語とする資格がある。ところが肝心の日本人が、そんなことはとんでもないと思い込んでしまっているのだから話にならない。この日本人の考えをなおすことが必要だと教授は力説する。

日本語を公用語にすることの是非はともかくとして、たしかに日本人が、日本語というものに対して妙なコンプレックスを持っていることは事実である。この間、飛行機の中で偶然隣りあわせたタイ国のチュラロンコン大学の有名な知日派の先生が言っていた。「この間、日本の政府がタイ・日間の文化交流についてのセミナーをバンコクで開いたのですが、終始一貫英語一辺倒でした。これはおかしいと思いませんか。いいですか、タイと日本との間の文化交流が主題なんですよ。他の国は関係ないんですよ。それなら、何故タイ語と日本語とでやらないのでしょうか」「そりゃ先生、無理でしょう。日本語もタイ語もむずかしいですからね、これを両方とも自由にあやつれる人なんてそうはいないでしょうよ」と言ったところ、直ちに反撃された。「そういう物理的な問題じゃないんですよ。日本の政府の方たちははじめからそういうマインドが全くありません。英語でやるのが当り前ということで、それ以外のことは考えようともしません。そこが問題だと思うんです」

なるほど言われてみて、私自身も大いに反省させられたのだが、そういえば、前にもこんなことがあった。それは前述の鈴木教授と、たまたまトヨタ財団の研究助成のあり方について雑談を交わしていた時のことである。トヨタ財団は研究助成の対象を毎年公募しているのだが、申請者の資格として、国籍その他一切の資格は問いません。但し申請書は日本語で書いていただきます、となっている。日本語で申請してくれたら、どこの国の人でも構わないのである。「どうも日本語で申請書を書くことを条件にしているんじゃ、本当に国際化とはいえないかも知れないんですけどね」と言ったら、「何をおっしゃるんですか、それは当然のことです。日本の財団なんですから日本語で申請させるのは当然です」と、これは教授の弁。なるほど、そういえば、私のところにもアメリカやヨーロッパをはじめいろいろの国からいろいろの方が助成の打診に訪ねてこられるが、その時に申請の条件を説明し、日本語で申請して下さいと言うのだが、今までそのことについていぶかしそうにされた外国人は一人もいなかった。鈴木教授の言われるように、トヨタ財団が日本の財団である限りそれは当り前のことなのであろう。それを当り前と思わない人がいるとすれば、それは間違いなく日本人に違いない。

21世紀コラム　FORUM'S FORUM

油田地帯の将来

評論家 市川真紀夫

「石油を掘り尽したあとクウェート人は何をするんだろうね」。私は世界第二の巨大油田ブルガン油田を前にして、友人のナセル・アル・サレムにたずねた。

「またベドウィンに戻るのさ」。色は浅黒いがひきしまった顔立ちのクウェート人は、夕日が砂漠を朱に染める光景を眺めながらつぶやいた。

「砂漠で生きるベドウィンは最も勇気ある人々なのだ」。OPECのなかで急進的な石油政策を展開してきたクウェート。そのクウェート国営石油会社(KNPC)にあって販売部門の最高責任者の地位にあったナセルは真顔で話しつづけた。

「われわれのように都市へ移り住んだグループは、すっかり堕落してしまった。ごらんの通りクウェートは欧米流の技術をとり入れ、欧米と変わらぬ生活様式だ。だがベドウィンは違う。彼らは自然の民だ。厳しい自然の中で、誰にも支配されず自分の力だけを頼りに生きている。羊を追い、神に祈りを捧げる毎日だ」

「君の親類はまだ砂漠に居るのかい?」

「ああ居るとも。我々アラブ人はどこにいようと皆兄弟親戚なのだから。しかし私がベドウィンの群へ加わるのは無理だろうな。何しろこの腹ではね!」と言ってナセルは白いガウンの上から丸くとび出したたいこ腹をさすり、ニャッと笑った。

都市生活をはじめてからというもの、アラブ人は総じて肥満体型になった。ことに六〇年代以降石油収入がどっと流入してから子供までもが親と同じ体型になった。クーラーのよくきいた豪邸に住むかぎり、過食と運動不足はクウェート人にとって避けがたいことだった。

政府は医療費を無料化したうえロンドンの大病院と契約して、重病のクウェート人に限ってはここでの治療費も政府もちとした。

しかし循環器系の病気で若死にする傾向はむしろ増えている。豊かさがかえって国民の平均寿命を縮めるという皮肉な例だ。

この点確かにベドウィンは違う。腹のでたベドウィンなど聞いたことがないし、年老いてなおかくしゃくたるベドウィンの姿をみる機会も少なくない。彼らは部族の長老として尊敬される。

彼らの特質の一つに、年老いても記憶力が衰えないという点がある。

ベドウィンの記憶力のよさについては世界的に知られているが、実際何ひとつ標識のない広大無辺なルブ・アル・ハリ砂漠を迷うことなく往き来している姿には驚くほかない。無数の大砂丘は風の影響を受け常に形や位置を変えるのだが、彼らはその間をぬい、オアシスからオアシスへ数百キロの移動を平気で行う。風と砂丘の関係、そして夜空の星の動き、これらについて文字をもたない彼らがどのように体系だった理解をしているのか、興味深い大きな謎である。

長老は部族の歴史を空んじており、そればかりか、争いの調停者として部族内に生じた過去のもめごとの仲裁についても残らず記憶しているという。

サレムはベドウィンの記憶力をずい分ほめたことがあったが、私などはサレムの記憶力にも驚かされた。あるとき四年前の会議が話題になったが、彼はその会議に出席した日本人十人の名前をすべて記憶していたし、着席順まで覚えていた。

クウェート人は二月から三月にかけて砂漠に小さな草花が咲く頃、皆一様に砂漠地帯に出掛け、ベドウィンと一緒にテント生活を楽しむ。一族郎党が米国製の大型ランドローバーを連ね食糧を満載して砂漠へ向かう光景は、まるで民族の大移動とでもいった観がある。

丸々と太った一群はベドウィンと一、二週間生活を共にする。やはり彼らにとってベドウィンの生活は、すべての出発点であり捨て去り難い原点なのだろうと思う。

アラブのこうした特質は、それ自体をとり出してみると賞賛に値するものなのだが、近代化・工業化という彼らの政府が目指す方向と調和するかどうかについては、いくつかの疑問が生じる。

まず組織の一員として歯車のように働くということに抵抗を感じるようだ。も

ともと神以外の権威を認めない習慣の彼らであれば、社長や部長・課長といった企業組織の権威に従順たりえないのは当然であろう。

日本のような企業への忠誠心とか滅私奉公という観念のあろうはずもなく、上司に対しては所得を得るために必要な最小限の善意を示すだけでよいのである。

また他人の支配を嫌う独立心の強さは、優秀な人材のスピンアウトを一般的なものとする。

国営石油会社でも例外でない。そこは知識を身につけ人脈を得るためのステップにすぎず、三十代半ばまでに独立するものが一人前のアラブ人と目される。

また独立自尊のアラブ人は自らが直接生産に携わることを嫌う。工業生産に必要な技術知識が不足していることも理由の一つだが、もう一つには英国やフランス等旧宗主国の過去の悪弊を見習っているためと思われる。いきおい商業・仲介業が中心となる。英国人やフランス人は直接仕事をしなかった。クラークを雇いサーバントに下働きをさせた。同じように独立したアラブ人達もパレスチナ人、インド・パキスタン人を使って仕事をする。アラブ世界で実務知識を備えた民族はパレスチナ人とエジプト人だ。彼らは知識によって給料以上の金をアラブ人からかすめとっているが、アラブ人も半ばこれを黙認している

サウジアラビアでは世界最大の石油積出港ラス・タヌラの北にあるジュベイルをはじめ、全国土にわたって大規模な工業開発を進めている。そのために必要な労働力を近隣諸国からかき集めた。北イエーメンからは実に百万人の労働者が入っている。エジプトからは四十万人、韓国からも二十万人という具合だ。サウジの労働力人口は百十万人というから、いかに外国人労働者の数が多いかがわかろう。

サウジの場合はクウェートよりもアラブの悪い面がより強く出ている。政府は外国企業にサウジ人の採用、それも経営幹部としての採用を義務づけているが、企業にとっては知識をもたぬ人間などまったく不要な存在である。

多くの企業ではマネージャーにダブル・シフト制を採用している。マネージャーの席が二つあり、一方の席ではエジプト人かパレスチナ人が忙しく応対しているが、一方の席ではサウジ人が日がな一日新聞を読みお茶をすすり友人と世間話をして過ごす。

もし彼らが隣の席の仕事を手伝うとか実務を独習するとかすれば、この制度もサウジ人にとってメリットがあろう。しかしそれは無理なのだ。誇り高い彼らが、衆人環視のもとパレスチナ人やエジプト人に教えを乞うなど、まずあり得ないことだからである。

やがてアル・ジュベイルに出現するはずの大化学工業地帯で、おそらく大部分のサウジ人は同じように新聞とお茶とおしゃべりの毎日を過ごすだろう。

コンピューターによる自動制御機構を大幅にとり入れた工場群の出現によって、果してサウジ人はついに工業化を実現したと思うだろうか。

理解不可能のブラックボックスをただ眺めるだけで、それを動かすのは以前と同じように外国人であろう。

地道な努力をせずとも豊かな生活が約束された状況、しかも世俗的組織に反発する固有の行動様式、こうした点を考え合わせると、大産油国の未来にいま彼らが行っている実験の成果をそのまま重ね合せるわけにはいかない。近い将来、彼らは工業化実験の反省期へ入るだろう。イラン革命の影はアラビア半島でも蜃気楼のように浮んでいるのである。

これからの石油の見通し

（財）日本エネルギー経済研究所研究部長＝茅誠司部会　富舘孝夫

原油価格はOPECが三月に一バレル当り五ドル値下げしたのち、しばらく小康状態が続いている。値下げ後の二九ドル体系で、ことしの石油市場が安定するのかどうか、ということがさしあたって注目されている。しかし六月に入っても、スポット価格（単発買い）が値下げ後の政府販売価格（長期契約）と比べわずかに低い水準でおさまっているので、「市況は意外と底固い」との見方が広がり始めてきた。

そして不思議なことに、マスコミや評論家、あるいは石油業界の専門家のあいだでさえ、現在のような小康状態は今後かなりの期間続き、二九ドル体系は一九八五年末まで続くだろう。という観測が急に有力になった。なぜ不思議かといえば、ことしの二月から三月の時点では、これらの人々は大部分が「原油価格はスパイラル的に低下し、二五ドルあるいは二〇ドルにまで下がるだろう」と予想していたし、五ドル値下げ決定後もしばらくは「再値下げは時間の問題」という見方が圧倒的であったからである。

当時わたしは、OPECが、①基準原油価格三四ドルを二八―三〇ドルへ下げる、②合計一七五〇万バレル／日の国別生産割当て協定を結ぶ、の二点で合意が成立すれば、それ以上のスパイラル値下げに歯止めがかかる可能性が強いと見ていた。事態はまさに、そのように進んでいるわけだが、いったいなぜ歯止めがかかると見たのか、あるいは更に暴落すると予想したのか、という点を吟味しておく必要があるだろう。そうでなければ、石油情勢がこれからどうなるかを見通すことができないはずである。

まず暴落説は、①石油需要の減少は今後も続く。②二九ドルではまだ高すぎるので、他の代替エネルギー（例えば石炭）と競合可能な価格（二五―二〇ドル）まで下落が続く。③OPECの生産・価格協定はすぐ破られ、安売り、増産をする国が続出する（OPECはすでに崩壊同然だから）――という主な理由にもとづいていた。

これに対して、わたしが歯止めがかかると見たのは、①石油需要の減少は年央で底をつき、秋から来年にかけて、ゆるやかに回復へ向う。というのは、世界経済がことし後半から若干なりとも回復し始めること、ことしはドル独歩高が是正されたのと今回の値下げとがあいまって、価格効果が少しずつ出てくる。②代替エネルギーについては、すでに短期的に転換可能なものは昨年に終っている。残りは計画ベースで時間と資金をかけながら進められるが、今回の値下げでスピードがスローダウンする。また、当面、短期間で転換できる代替エネは石炭だが、石炭の需要そのものが不況で低迷し、昨年から供給過剰で値下がりを見せ、ことしも更に二〇％ほど下がった。つまり、これ以上大幅値下げをしても需要がすぐ増加するわけでないし、そうしなければ石炭にどんどん転換してしまうわけでもないから、値下げは引き合わない。

そして③、産油国は二五ドルあるいはそれ以下まで値下がりすると、大部分が破産し、現政権の倒壊が続出する危機に見舞われる。したがって、OPEC各国は、がけふちに追いつめられ、ぎりぎりの結束をはかるだろうと予想できたのである。こうした点では非OPEC産油国（メキシコ、イギリスなど）も同様の立場であり、今回の値下劇ではOPECと非OPEC産油国の公式・非公式接触の進展という興味ある一幕も演じられたのであった。

しかし、五ドル値下げ後にすぐ再値下げという二番底が到来する可能性も残されていた。それは、①メジャーズが大量の在庫はきだしを続け、値下げ圧力をかけるのをやめない、②北海原油が更に一ドル以上値下げする、③新価格・生産協定を破るOPEC加盟国が現われる――という状況になった場合であったが、メジャーズは新価格を受け入れ、値下げ圧力を弱めたし、北海原油の再値上げは五〇―七五セントと小幅であったし、また協定破りの最右翼と目されたイラン、リビアも今迄のところ秩序ある行動に従っている。

さて、それでは石油情勢は今後どうなるだろうか。いまの小康状態がそのまま二―三年間の安定期へとつながると見てよいか――答えはノーである。

この六―七月は不需要期であり、在庫取崩しも下火になったとはいえ、続いている。それゆえ、場合によっては再びスポット価格が一ドル前後ほど政府販売価格を下回るだろうし、七月一八日のOPEC総会（ヘルシンキ）へむけて再値下げの観測が飛びかう可能性は小さくない。しかし、昨年七月臨時総会のような決裂には至らないだろう。

というのは、ことしに入ってから、サウジ政府の権力構造にかなり大きな変化が見られているからである。それは進歩派・親米派のファハド国王の地位が低下し、保守派・ナショナリストのアブドラ皇太子の力が強まり、ヤマニ石油相は従来ならファハド国王に直接指示を仰いで総会を切りもりできたのに、三月臨時総会からはアブドラ皇太子の承認を取る必要も出て来た。今回の値下げ劇も、当初ヤマニ石油相はファハド国王から二八ドルまで値下げしてよいといわれていたが、アブドラはあくまで三〇ドルでとどめることに固執し、結局二九ドルで妥協したわけだが、そのために異例のマラソン総会になったといわれている。

注目すべきは、アブドラ皇太子―サウド外相ら保守派は、サウジがいくら減産してもよいから値崩れを最小にすべきだという考え方をもっていることである。（従来の工業化路線に対する批判から生まれている考え方）。そして、このことがイラン、リビアにも伝えられて、今回の新価格・生産協定の合意と、その後の遵守がもたらされている、という分析もある。

したがって、前述のような先き行きの若干の明るさもあり、第三・四半期（七～九月）には生産が割当て上限の一七五〇万バレルに到達するだろうから、七月総会は、OPEC結束の成功と市場環境好転とを確認するものになる可能性のほうが大きい。むしろ、問題は秋から来春にかけての時期に発生する。

なぜなら、一〇―一二月期には、①季節的需要期入り、②値下げの価格効果が少しずつあらわれる、③世界経済の回復が確かになる、④在庫取崩しが七月ごろ終了し、一部に積増しが始まる――等の結果、OPEC生産は一九〇〇万―二〇〇〇万バレルに達するので、増産をめぐって再びOPECの内紛が激化するだろうからである。

異常な在庫取崩しは昨年春から開始し、昨秋には従来の通常在庫にも手がつけられ、ことし春には極度に投機的なはき出しが突出した。その結果、現在はすでにかなり低い在庫水準になっているが、三年半続いた石油需要の減少が底を打ち、秋からゆるやかながらも回復に向うと、その直前から在庫取崩しはなくなって積増しに移る。これがOPEC生産のかなりの回復を可能にするわけである。

それゆえ、増産の見込みが出ると、財政難打開のため、われ先に協定無視の増産に走る国が続出することが予想され、スポット価格の低落、値引き販売の増大という状況が再現されよう。そして、世界経済が予想ほど回復せず、新しい生産協定の合意が年末までに成立しなければ、来年三月に、不需要期入りをひかえて再び強力な値下げ圧力にさらされ、二―三ドルの値下げという事態に至る可能性はけして小さくない。

しかし、秋または年末に、需要変動に対応する柔軟な生産協定の枠組が成立し、それが大枠において守られれば、現行二九ドル体系はなんとか維持されるだろう。加えて、もし、世界経済の回復が予想通り堅調であれば、意外に早く、値上げの声が強硬派から出され、来年後半にはインフレ調整の値上げが実施されるかもしれない。石油情勢はいぜんとして波乱ぶくみであり、いまの小康状態は文字通り短い小康なのである。

座談会

東北開発の新展開

若林　彊

若林　彊
東北電力㈱取締役社長

伊藤善市
東京女子大学教授

有岡恭助
国土庁官房審議官

司会
笠井章弘
㈶政策科学研究所理事長
21世紀フォーラム事務局長

様々な波及効果をみせる東北新幹線

笠井　まず有岡さんから、国土審議会報告の審議の概要についてお話しいただきましょうか。

有岡　一全総、新全総を踏まえ、三全総の定住構想のなかで、定住拡大の場として東北地方の重要性が位置づけられました。そこで、五十二年夏、総理からその開発整備を積極的に進めるための対策が国土審議会に求められ、それに応えて東北地方開発特別委員会（若林彊委員長）の企画部会（伊藤善市部会長）から昨年三月に報告をいただきました。この報告では、東北地方は自律的発展の軌道に乗ってテイクオフする時期にあるという認識に立ち、福祉化、国際化、産業構造転換、行財政改革といった最近の環境を踏まえて、交通、産業、都市機能、定住圏といった四項目につき開発の基本方向をのべた上、それぞれの重要なプロジェクトを、①現在実施中のもの、②六十年頃までに着手するもの、③今世紀中に具体化または研究するもの、の三つに分類し、さらにソフトな制度改善なども提言されています。また、今後は国に対する依存よりも、地方公共団体をはじめとする地元各界各層の協力、自主的な活動が開発の主体になると結んでいます。この報告は各省調整ずみで、政府はこれを尊重し、毎年実施状況をフォローアップすることになっています。

伊藤　「及ばざるは過ぎたるに勝れり」と家康は言いますが、その伝でいくと東北地方は未だ大きな可能性を持っているわけです。東北の場合、一全総の拠点開発は不完全ながらもかなり進んだ。しかし新全総の交通通信ネットワーク構想になると、東北・上越新幹線、東北縦貫道はほぼ出来上がったものの、それ以外はほとんど手もついていないのが実情です。その上に三全総の定住構想を実現するためには、よその地域の二倍も三倍も働かねばならない。そのために自助努力を強調し、また交通体系の整備を部会員全員が非常に強調したわけです。また産業については農工商、サービス、建設などそれぞれ振興すべきは勿論ですが、我々がY字型構想として強調するように、四号、十三号線が分かれ、奥羽、東北本線が分かれる福島付近から北に向かって技術先端産業などいくつかの産業がはりつき始めている。条件さえ揃えれば東北はかなりいけることを示したものだと思うんです。都市機能の問題については仙台、新潟の東北二大都市に国際的な機能を持たせ、あとは各県の主都及びそれに準ずるいくつかの都市の機能を高めていく。仙台、新潟の国際化は他の都市にもいい刺激を与えるんじゃないでしょうか。

それにしても東北新幹線の利用率は国鉄が

伊藤善市

有岡恭助

笠井章弘

考えた以上に高いですね。それだけのポテンシャルがあったんです。元々、東京―名古屋よりも東京―仙台のほうが近い。山形だって新潟だって近いんです。それが実際に実現して東北の人たちが自信を持った。これは大変な副産物だ。しかし、新幹線、高速道路のこれ以上の整備が早急にはむずかしいとなると、東北内部での東西格差はますます開いてしまう。これを埋めるための小空港のネットワーク作りというのが私の個人的な意見でもあるんです。

官、学、民一体で盛り上がる開発気運

若林　五十五年九月に当時の鈴木総理大臣から国土審議会に対して、定住構想を推進するにあたり、特に東北地方の開発・整備を積極的に進めるための方策について諮問されたわけですが、首相の諮問によって、東北地方開発の諸問題が審議されるのは、東北興業(現在の東北開発株式会社の前身)、東北振興電力設立の契機となった諮問以来、実に半世紀ぶりのことです。諮問を受けた国土審議会は、東北地方開発特別委員会を開き、答申案作成に精力的に活動しましたし、東北地方も開発、発展の足場を築く最後のチャンスと意気込み、東北経済連合会を中心に、審議の過程で積極的に意見を具申したわけです。わが国は産業構造を大きく変換すべき時期に直面しており、東北地方は二十一世紀に向けて定住構想を実現すべき地域と期待されているわけです。一方、昨年東北・上越両新幹線が開通し、また高速自動車道、空港など、高速交通網の整備が進み、首都圏との時間距離が大幅に短縮され、中央との人と物の流れが活発化しており

ますし、東北七県をはじめ、東北の産業経済界など地元の官、学、民が一体となって東北の総意を結集して自助努力をすることにより、国土審議会報告の具体化を図ろうとする気運が盛り上っております。

笠井　Y字型をはじめとする背骨の部分の条件整備のみが進むと東西格差がまた広がる可能性がある。北海道の場合など人口が増えているのは地場産業としての家具を育てた旭川、三次産業の多い札幌だけで、函館、室蘭、苫小牧など全部人口が減少しています。東北にも地場産業なり、新しい先端産業が定着する条件づくりといったものがないと、計画がペーパープランになってしまいかねない。

東北情報ネットワークの整備が鍵？

若林　運輸交通関係の整備が進んできますと、企業立地も活発になってまいりますし、やはりいわゆる生産性の高い、そして今後輸出産業として伸びる可能性の強いものを選択して、一方では地場産業の振興をはかり、一方では先端技術産業を中心とした新しい企業の誘致を考えなければならないと思います。わが国は輸出産業で生きる国であり、その中で東北地方は輸出というものを十二分に勘案しながら産業開発を考える必要がありますが、東北地方におきましては、金属科学、通信科学、弱電関係の技術が進歩しておりますから、そういう意味でも弱電にすればＬＳＩとかＩＣなど、水も沢山いる、電気も沢山いる、そして生産性もまた高い産業が定着するような地域、例えばシリコンロードとして東北地方を考えてもよいのではないかと思います。実際ＩＣ関係の企業が東北にはかなりきているわけです。九州地方にはシリコンアイランドという言葉がありますが、これは世界的に知られており、アメリカでもそう呼ばれているようです。一番初めがカリフォルニア州サンタクララのシリコンバレーで、第二番がダラスのシリコンプレーン、第三番が九州のシリコンアイランド、そして東北のシリコンロードと続くわけです。場所としては、福島県の白河から仙台を北上して盛岡と福島から秋田に至る国道沿いです。東北地方は労働力が豊かで、水資源も豊富なわけですから、今後もＩＣ産業だけに限らず、他の多くの先端産業が立地するのに非常によい条件がそろっていると考えます。

伊藤　具体的に何産業ということまで我々は言ってないんです。それは地域の選択ですね。ただ技術先端産業でも部品だけではなく加工組立てまでこなしうるような、関連する中小企業への技術のトランスファーシステムが重要になる。これは東海道沿線各都市に比べればまだ劣っているかもしれないが、こなし得る条件はあると思います。ただテクノポリスの場合でも産、学、住、が三本柱ですが、産は企業が頑張るとして、住はわが東北は大丈夫だと思う。問題は学。近代的な先端産業をこなす技術者、専門家は東京・大阪に五、六割、ものによっては七割が集中している。今回、全国に十九個所のテクノポリスを作るにしてもネックは学でしょうね。そういうことで東北の場合、戦略的な部門の一つを情報に置き、そのネットワーキング、相乗効果をもたらすシステムを非常に重視しているわけです。大学の学部学科の増設その他を含む情報社会への対応の手を強調している。

有岡　人口増加の緩慢化、産業構造の急変など、三全総そのものが見直しの時期に入っている。しかし新しく作られる四全総においても、定住構想を基本にせよというのが東北地方の強い要求です。最近の工業立地をみるとフットルースな内陸型立地が七割を占めるようになった。九州ではシリコンアイランド化が相当の牽引力となって人口や所得が増えたが、ここ二、三年の工業立地動向をみると、東北地方が増えて件数、面積とも毎年全国の二割を占めている。技術先端型産業に限れば四割にもなる。しかし移出型の高付加価値性の産業はまだまだ弱い。五十年代の地方の時代に、特に新潟をはじめ東北地方などに公共事業費が傾斜し、建設、サービス産業の雇用を促進して県民所得を上げた。このため昨年の国民生活白書や経済白書に見られるように、これからは地方よりも大都市を志向すべきだとの議論も出てきた。これは非常に問題がある。伊藤さんが言われた一全総、二全総のやり残しというのは、東北地方にはストックが無いということです。産業構造も移出型はまだ非常に弱い。それに全国の二割を占める広大な東北地方の治山治水、交通網の整備など投下された公共投資によって受益したのは地元民だけではない。いろんな意味で全国民が恩恵を受けてきた。

開発の拠点となる先鋭モデル作りを

笠井　基本的に全体をレベルアップするというのもいいんですが、すばらしいモデルなりコアなりを冒険的に一つ作り上げて見せるというのはどうでしょうね。伊藤さんが述べられた教育に関していえば、長岡にあるような先端産業の技術者養成の専門学校みたいなものを作り、新たに立地した先端産業に就職させていくことで地元のマンパワーを養成していくとか……。そうしたポイントをいくつかつなげることでネットワークが生まれていくんじゃないでしょうか。

伊藤　おっしゃる通りです。現にやっているわけなんです。農業社会というのは言っただけでは駄目だ。やって見せて、さわらせて、教えて、やらせて評価するようなシステムがないと、安全第一主義でやらない。もう体に染みついている。東北はだいたい二番手型の文化なんですよ。それじゃいけないんで、やはりチャレンジする精神もなくてはいけませんね。

若林　東北地方はこれまでとかく引っ込み思案で他力本願的なところがあったが、現在では東北住民が一体化し、自主的に自力で開発を進めようという意欲に燃えております。気候のいい所に人が集まり住むということがあると思いますが、その後は地元の人の意欲いかんによって大きく差がつくと思います。過去の話になりますが、開発の問題に対して民間産業人が、一本にまとまりその意見を集約して、提言なり要望する機関がないのはおかしいということで、東北六県に新潟を含め東北を一体とした民間経済団体をつくるべきだと提案し、今日の東北経済連合会になったわけです。そこで活動の指針として「東北開発の基本構想」を発表しましたが、その中で新しい東北の役割、開発努力の最終目標として東北の一割経済の実現を提案したわけです。今後、全国で最も開発が期待される地域でありますから、地方に住むわれわれ自身が主体的に創造していくことが必要であり、地方の時代を単なるフレーズに終わらせないために、今こそ地域から新しい発想と自主開発への努力が求められると思います。

開発リーダーたり得る民間の人材は

笠井　定住するには、そこで食えるような魅力ある職業なり産業がないと、なかなか実現しないんじゃなかろうか。産業サイドから考えてみますと、将来日本で食えるような産業の中からフィージビリティの高いものを取り出してテスト的にやってみるといった冒険をする覚悟があれば相当違ってくるし、定着したがために交通をつけざるを得なくなってくる。つまり基盤整備を先にやって上物があとからくるという本道の発想とは逆のことをやってみることもいいんじゃないでしょうかね。

有岡　定住構想は自然、生活、生産の環境を三位一体で整備しようというわけですが、最近の地方では、まず就業や仕事のための生産の場をという声が強く、思い切った企業誘致条例が全国的にできつつある。やはり地場産業だけでは限界があるのではないでしょう

か。また進出企業も地元と調和するようないろいろな配慮をするようになってきている。ただ問題は中枢管理機能がどの程度地方にいくかですね。テクノポリス構想で考えられている研究開発機能まではいくと思いますが、フアッションとか全く中枢的なノウハウを作り出す機能は、やはり国際的情報の中心地を離れ難いのでは……。

笠井　実際に立地をして実際に現場が栄えていくためには、井深さんが九州でやられたように何かパイオニアが民間のバイタリティでもって、理想的なことを一つやるといい。日本というのはいいとなるとワーッといきますからね。東北の場合、そうしたリーダーシップをとって、これだけはやろうという民間の人はいるんでしょうか。

伊藤　腕のある人の舞台はこれまでは東京、大阪であったわけですから少ないでしょうね。ま、地元の人がやってくれれば一番望ましいんですが、あまり純粋培養型の自己完結でやる必要は一つもないと思う。ジョイント・ベンチャーでやっても、米国から経営者をつれて来てもいい。

望ましい「東北シンクタンク」の設立

若林　わが国が二十一世紀を目指して飛躍していくためには、いろいろ課題をかかえておりますが、私はその最も重要なものの一つとして、独自の技術開発だと思います。特に東北地方が変革の激しい経済社会の中で、後発の利益を求めて発展していくためには、どうしても東北の特性を生かした付加価値の高い産業を育成する必要があります。それが国際化時代の中で東北が栄えるみちであり、その目標を達成するためには、東北独自の技術開発が鍵になると思います。東北地方の開発・整備を進めるに当って、心しなければならない点は産学協同ということです。

この点については全国に誇りうる素晴しい実績を持っておりますが、それは県、大学、産業界が協力し、東北産業技術開発協会を宮城県に昭和四十一年に設立し、その事業の一つとして東北大学工学部に隣接して技術開発研究会館を建設し、この研究施設を利用して産学協同による大きな研究成果をあげています。

笠井　ところで、仙台が中心になり東北各県に一つずつシンクタンクを置くといった構想などもあるようですが。

伊藤　良いシンクタンクを東北にも作りたいというのを、僕など少し強調しすぎたかもしれない。しかし地域格差というのは結局、情報格差と努力格差であり、努力格差も情報格差に依存する。東北には情報プラス人材の集積が最も必要なんです。専門違いであれ、民間公共であれ、互いの枠を越えた情報のネットワークが大切だというのでシンクタンクを作りたかったのです。ですからその形もかっちりしたものではなく、東北の各県に散在してしまっている大学人、研究者、県の企画スタッフ、民間の電力とか建築事務所の連中を、絶えず交流させるといったものでいいのではないかという希望があるのですよ。なにも東北モンロー主義みたいな発想を僕はとらない。

有岡　北陸、九州などでは地域の経済研究機関がかなり整備されていますが、それに比べると東北はまだ弱い。伊藤さんの言われたとおり、東北に足を据えて各県と交流できるシンクタンクが必要だという発想なんですね。

過保護サービスよりも情報の流れを

笠井　ここで一つ伺いたいのは産業なら産業でもいいし、方法論でもいいんですが、一歩前進するために、東北には何が一番必要だとお考えでしょうか。

伊藤　今のところ東北の中からプロダクト・イノベーションというのは出にくい。プロセス・イノベーションなら出来ると思う。昔からの東北地場産業でもマーケティング、マーチャンダイジングを見直せばものになる。あきらめないでやってみようという精神が必要です。貧乏を売りものにせず発展の可能性を求めようという気運は起こっている。政府のほうも過保護のサービスじゃなく、インフォメーション・サービスをもっと大事にしてほしいわけです。そうでなければ農業と同じになってしまう。民間はそれを警戒しているんです。

若林　東北に何が一番必要かということではないかという希望があるのですよ。なにも東北モンロー主義みたいな発想を僕はとらない。

有岡　北陸、九州などでは地域の経済研究機関がかなり整備されていますが、それに比べると東北はまだ弱い。伊藤さんの言われたとおり、東北に足を据えて各県と交流できるシンクタンクが必要だという発想なんですね。

すが、緊急でかつ、開発に対するインパクトが大きく、早期に実現を図るべきことは、域内高速交通網の整備、産業経済力の強化、中枢管理拠点の整備だろうと思います。先ほどのお話に出ました中核的シンクタンクの形成及びシンクタンクネットワーク体制の確立についてでありますが、東北には未だネットワークは整備されておりません。国土庁が所管している財団法人東北経済開発センターというのがありますが、私が会長をつとめております。これから東北七県が一体となって各県はそれぞれシンクタンクをつくり、さらにシンクタンクのネットワーク体制をつくり、機能させることによってはじめて、国の方向性の源になるわけです。従ってこの問題については官、学、民が一体となって推進しなければならないと考えております。

（五月二十四日・IPSにて）

座談会

松下　寛　野村総合研究所専務取締役
袖井孝子　お茶の水女子大学家政学部助教授
吉田寿三郎　日本ウェル・エージング協会会長

高齢化社会のソフト

21世紀へのソフト・シリーズ2

老人パワーを社会の中に位置づける

吉田　現在の工業社会は高齢人口を増加させる一方、極端な未熟児まで生かしてしまうといった、あらゆる個のエージングにおいて前とは違った現象を起こさせている。ですから高齢化社会の問題解決には高齢というある限られたステージだけではなく、全体的な社会の展望が必要になりますね。また日本の場合、高齢化事情の世代の差が激しくなってくる。率直にいって、わが国の老人を含めた現在の熟年以上の世代は世界一恵まれていると思います。ですから、この恵まれた世代にはその踏み台となっている三十代前後の世代の、ことに将来のことを考えてもらう必要がある。未曽有の高齢化など自分とは関係がないという態度は許されないはずです。また甘やかされ、あまり役に立ちそうにないそれ以下の世代を、どう育て上げるかは大きな問題で、これにも熟年以上の世代には大きな責任を感じてもらいたい。自然の一員である人間が、欧米でもせいぜい二百年、日本は五十年、人工的に環境が激変する中で生活している。この変化は人間の適応力の範囲を超えているとも考えられますね。以前訪欧して、六十五歳以上の約三人に一人は精神障害を持つという事実にがく然とした事があります。私の見る限り、老年人口係数一五%前後になると欧米での高齢化対策は全部失敗している。ところが私たち日本人は二〇%を超える高齢化社会に対処していかねばならないのですから、現代工業で物力をもつことは欧米に追随していましたが、その物力が内外、ことにエージング過程に及ぼす問題の対応では日本人の創造性が非常に問われてくるのではないでしょうか。

袖井　私も二十一世紀の最大の問題は世代間の統合だと思います。単純計算ですと労働者三人で一人の老人を扶養することになり、負担が非常に大きい。そこで一番怖いのが、扶養する世代と扶養される世代の間にコンフリクトが現わになることです。現在でもそうした声は非常にある。やはり団塊の世代以降の若い人たちに、もう年寄りを見るのは嫌だ、自分たちは勝手にやるという声が多い。公的年金に対する不信感も非常に強く、公的年金に加入しないで個人年金に入るとか……。その考え方というのは非常に短期的な視野での損得の観念です。エゴイスティックになっている。これは高齢化社会は大変だ大変だと煽り立てているマスコミにも原因があるという気もするんです。こうしたことが社会をバラバラに個別化していく大きなインパクトになるんじゃないかと怖いですね。前回の座談会で松下さんが「ソフトは情報化だ」とおっしゃってましたが、まさにそうですね。若い世代のそうした考えは情報が不足しているからです。第一、新聞では六十五歳以上は何人だ

松下　寛

から何人で養わなければというが、実際のところ六十五歳以上の男性の半数は働いている。ニセ情報ですね。二十一世紀になったら七十とか七十五までも働くと思う。ですから年寄りが全部ディペンダントになるといった恐怖心が煽るのをやめないと、二十一世紀の高齢化社会が本当に敵意に満ちたトゲトゲしいものになってしまう。

松下　これは僕の独断かもしれないが、現在いわれている高齢化問題というのは、お二人がいわれたようにトータルに考えずに、部分を抜き出して、その拡大がトータルであるかのように問題を進めているところに何か不整合のにおいがあるのではないか。また高齢化社会の影のようなものに強く刺激されて、そこに議論の重心を移している。何が問題なのかを全体的に見るためのスタンスが必要なのではないかと思われます。それにやや悪乗りしていえば、たしかに介護を必要とする寝たきり老人も増えるだろうが、と同時に、何か出来る老人、若い者に出来ないことをやれる老人も沢山出てくる。つまり、見方を変えれば、非常に困った問題だから対策を立てるだけではなく、あるところでは大変いい条件が出てきたのだから、もっとそれを活用して、社会の中なり他の世代間との絡みでそういう老人パワーを位置づけ役割づけてゆくことも出来るのではないでしょうか。

日本の精神風土がプラスに働くか？

吉田　三十年ほど前、いずれは日本も老人国になるからと、丈夫で長生きという青い鳥を求めてスウェーデンに出かけたんですが、一般病院の病床も大半老人が占めており、慢性病院、ナーシング・ホーム、ことに精神病院は寝たきりとかボケの老人で一杯でした。こんな福祉地獄は駄目と思いましたね。ただ弱ったものを死なさないと言うだけの長生きの形態なんです。私は将来を大変暗くみて帰国したわけですよ。日本にも虚像ではなくその実像が現われ始めてますね。ただ寝たきりとか心身障害で人に依存する老人は約一〇%、これらのものを残りの九〇%の老人が人間らしくケアすることが極めて重要なことだ。しかし、気持だけではケア出来ませんから、元気な老人にその技術と知識を持たせる学習の場を与えなければいけない。ところが今の老人福祉センターとか老人クラブは単なる娯楽の場で、桃色遊戯までやってる（笑い）。このような様は西欧福祉でもみられる。それでいて本当の弱者には手が届かない。生物界には優勝劣敗の法則がありますから、弱者が惨めであることは当然で、それを超えられるだけの人間性を高揚することは非常に難しい。しかし日本は、いかにしてそれを成し遂げるかの問題を実践しなければなりません。

松下　僕は割と単純に考えてしまうのですが、これまでの日本は先進欧米のいき方を上手に導入消化し日本に移植してきた。これは日本人の能力の一つだと思うんです。自動車などがその好例ですね。アメリカの車をモデルに志向しながら、わが国に合った小型車を作り出し、遂には世界一の自動車生産国になった。福祉にしても欧米型そのままのあり方が日本にとって好ましいファイナルモデルであるのかとの反省が出ているのではないか。高齢化社会なり老人福祉を考える時、非常に単純な切り方ですが、もう一つやはり狩猟民族と農耕民族の違いみたいなものがあり、その違いがむしろ我国には有利に生きてこないだろうかという考えはどうだろうか。ご承知のように農耕民族は、ある集団なり組織の中で合意のルールなり仕組みによって皆が力を合わせる。これが、話は飛びますがひいては日本型企業経営の中にも生きているといわれるわけで。一方、狩猟民族は生きるための手段としては自分独りの力しか頼れないから、最後までそれでいって結局その先は吉田さんが言われた惨めさが待っていることになる。非常に単純な前提なんですが、この日本的生きざま、そして風土の上に立つ日本型の高齢化社会に向っての問題解決は考えられませんかね。

女性の犠牲でなりたつ制度は続かぬ

袖井　私はその考え方は危険だと思うんですよ。日本が巧くやって来たといっても、一周遅れでトップを走っているようなもので、欧米のように積極的に問題を解決していったのではない。何もしないうちに潮流が変わってきただけです。自動車にしても、たまたま石油ショックが来ただけで、何もちゃんとした見通しを立てていたわけではない。それから、特に女性としてぜひ言っておきたいのは、日本型福祉を支える同居扶養は、やはり日本の女性の家制度的な自己犠牲によって支えられてきている。でもこれからは無理でしょう。私の周囲の女性をみても、今の熟年から上の世代とその下とでは完全に別人種ですよ。今の若い人は自己の欲求を追求したい。非常にエゴイスティックです。将来に期待出来ませんから、やはり別の方策を講じないと……。

袖井孝子

松下　先見性とは言わないが、結果においてなし崩しにやってよかったということはあると思う。

袖井　それは歴史的にみても、ずっと昔からそうですね。

吉田　なんにせよ、支える層が少なくなって、厳しい老後があることははっきり意識しないと……。以前はわずかの老人が数年の老後を送っていたし、日本ではうまく隠居出来ても生産とはなかなか離れられなかった。現在は多数の人が二十年の老後を送る。しかも、その大部分を生産から遠ざけて居食いさせるわけです。これをスウェーデンは最良の条件で実験しましたが居食は結局出来なかった(笑い)。社会保障の神様のように言われるベバリッジ卿にしても、無為と孤独という二つの点を見落した。ましてや金も無く医療費もままならない格好で「お前を仕事から解放してやる。好きなように楽しめ」と突き放したら、その老後はいかに素晴しい女性でもうまくいかない(笑い)。男はもっとまずいかもしれないが、幸いにして早く死ぬ(笑い)。

袖井　そうですね。日本人は遊び下手とか言いますが、遊び下手でよかったと、私はよく言うんです。西欧的な考え方では労働は苦役なわけで、働いた後の遊ぶことにものすごく価値を見出す。日本人は昔から労働の中に生きがいを持っている。そうした日本人の倫理観みたいなものは、若い世代にずっと伝えていきたいですね。この点は高齢化社会を生き抜く上で、日本人の一つの強みだと思います。高齢労働力の市場価値は別にして、ともかく高齢者にも働く意思があるのはいいことです。

考えられる半農半工社会の生活設計

松下　先ほど、世代が違うとまるで別の生物だというお話がありましたが、私は日本人なりの生きざまとかルールといったものが試行錯誤を込めて様々に繰り返されながらも結局安定的なところへ接近していくような気がする。この世代問題はどれだけ大変な事として捕えておけばいいのでしょうかね。全くの素人考えですが、この問題に対しての一つの考え方は、人は生物として親から子へと遺伝情報が伝えられることと、昔の情の世界で持っていた人と人とのつながりと重ね合わせて考えてもいいのではないかと思います。

吉田　普通の生物は自分の体を変えて環境に適応していくわけですが、人間は道具を作り環境の方を変えていく。それが嵩じたものが現在の非常に細分化され、トータルにものを見れない専門科学なんです。その結果、工業化社会は非常に非自然的な環境に多数の人間を集め、いろいろな異常現象が起こっている。もう少し自然に順応した生き方を考えねばならない。トータルなものの考え方が必要なんです。第三次の産業革命に入りエレクトロニクスが精神労働も肉体労働も代行してやってくれるこれからは、人間が自然に帰る一つのチャンスでもある。つまり、やり方さえうまければ余暇時間はどんどん増えてくると思うんですね。その余暇を農業社会への復帰に活用していくんです。現にそうした動きはある。たとえば東北出身の若者が親元へ帰って農業なり林業なりの手伝いをするための長期休暇を欲しがるとか。また企業側もそれに応えて地方に工場を作り職住の接近をはかるとか……。これからは、こうした工業社会と農業社会の合をつくった社会が大切ではないでしょうか。個人的に言えば、半年は工業化社会、半年は農業化社会で送る半農半工という生活設計が実現できるかどうか。このような実験段階に入ってきたのではないかと考えるわけです。これがどうすれば成立するかいろいろと見直すべき問題は多いわけです。たとえば大量生産大量消費の工業化社会が作り出した、母親までも家庭からひき出して子供は保育所に入れればよいといった形での男女同権とか、キリスト教暗黒時代が生んだ西欧の個人主義、自由主義、いずれも、日本みたいに同族が少々相い喰むような歴史しかもたない、和を尊しとする風土とは合わない。

再確認したい自由、平等、平和の理念

袖井　しかし、日本人は戦後三十何年、個人主義とか、男女平等、自由平和の理念のもとに教育されてきてますね。世代差というものがかなりあるんじゃないでしょうか。それをもう一度ひっくり返すというのは大変無謀なことだと思うんです。だから是々非々主義になるかもしれませんが、日本人本来が持っていた良いものは伝えていかなければなりませんが、こうした理念で育てられてきた人間にもう一度ひっくり返るというか、欧米型のものを求めるのは間違っていると言われても、実際困るわけです。

吉田　困るといわれても、私たちが生存していく条件はもっと厳しくなっていく。なにも米国によって一時変えられたものを大切に守る必要はない。私は憲法を否定しているの

ではない。あれは理想です。理想は理想で結構ですが、日本人が考えているような全くの自由、全くの平等など欧米でも実現していませんよ。こんな自由や平等を主張したら、世の中は実際には成り立たない。なにも元へ返れと言うのではないが、日本のいろんな生存条件が変わっていった中で、我々は全体としても個としても滅びるわけにはいかない。与えられた厳しい条件の中を、将来に向かって現実に歩まなければいけないわけです。

神井　でも、生きていくための重荷は全部が平等に背負うべきものじゃないかと思うんですよ。

吉田　平等平等とおっしゃいますが、世の中に平等で生まれた者なんか一人もいないんです。

神井　しかし、それはある程度、近似値までいくべきだと思いますけど。

吉田寿三郎

吉田　残念ながら、生れたときからすでに平等ではない。にも拘らず自由を叫んだら、強者は弱者をものすごく虐げることが出来る。そこでこの不利を緩和するのは何かといったら、科学ではなくて、もっと人間性を向上することだと思うんです。それには農耕民族のほうがより良いものを持っているかもしれない。だから私は、今の工業社会みたいに、人間同士がいろいろ噛み合ってやる社会よりも、農業社会へ返って一本の木でも育てたらより自然の秘める秩序というか理というかを心得ることになると思う。都会で人間のみにいいような勝手なことを言っていてもそうならないのではないか。

神井　……。

工業化社会の奔流にも自省の動きが

松下　吉田さんは工業化社会についてかなり手厳しい考えを持っておられる。私は別に工業化社会の代弁人ではありませんが、技術という工業化社会を支える一つの柱にかかわっているものの実感として、この工業化社会の奔流の中にも自省といった流れを感じます。たとえば先ほど吉田さんはエレクトロニクスのいい部分を言われました。しかし我々から見ると、あれはすべて至善のものばかりではありません。エレクトロニクスの製品あるいは技術の誕生は、やはり大きくは資本の論理から発しています。とにかく欲しがりそうなものを作って売っていることがその殆んどであることは、間違いありません。しかし、もう一つ醒めた目でそれを見ると、かなり考えなければならないところもあります。たとえばコンピューター。これは道具ですから使い方、あるいは使う人のコンピューターに対する自分なりの理解にもよりますが、あれがもっと深く人間の知的活動に入りこんでいった場合、知的活動の幅と深さに与える悪い影響が出てこないだろうか。というのは、人間は本来その思索そのものは自由奔放なもので、ときには非理の世界にまで入りこんで動いている。ところがコンピューター的思考の基本というのは完全な合理性です。あいまいさは無い。たとえばアポロ宇宙船は、そのプログラムの中でハイフン一つ落したために月に到着出来なかった。もし若い世代が、これだけがウェイ・オブ・シンキングだとコンピューターの世界にのめり込んでいったら、彼らは人間の本来自由奔放である発想を極端に狭いコンピューター的合理の世界に押し込んでしまう危険がありはしないか。たしかに現在の技術がすべてうまく動いているとは申しませんが、少なくともこうしたことへの反省が無いわけではありません。もう一つある例を申し上げますと、ある大手不動産会社の話ですが、最近、垂直な堤防の無い地域開発をした。居住地域からなだらかな斜面が水辺まで続いている形です。この計画の考え方は、人間は水と共存すべきで対立してはいけない。水に生まれ長い間、水と共に育ってきた人間が堤防という対立型の技術障壁によって水と分けられてしまっているのが今までの形であった。これはわびしい。で、治水には技術的に十分配慮した上、水と親しめる形にしたのだそうです。ささやかな事例ですが、技術はこうしたかたちで少しずつですが人間にとってより好ましい方向に変わりつつある。

単に生かされるより死ぬ自由もある

吉田　私は別に農本主義ではありませんが、現状でいったら日本の農村は壊滅してしまう。それをなんとか調整するためにも、工業をよりよく利用し、しかも農業を成立させ、一年の半分くらいは自然に親しめる社会がつくれないだろうかといっているのです。現在ではまだちょっと飛んでいる話しと思う方が多いでしょうが。

神井　吉田さんは農業をすごくロマンチサイズされていますが、現在の農業は非常に技術化されていて、とてもロマンチックには見えませんね。コンピューターを使い、薬を使って、土無しでトマトなどを作っている。

吉田　ですから、そうした農業を否定する

ために、皆さんのこれから処理に当惑される余暇を使おうということなんです。私も、こんなに工業化された農業は危険ですらあると思いますよ。

松下　問題はかなり難しいのですが、高齢化社会の大きな問題の一つに生かされている老人という問題がありますね。たとえば昨年十二月の科学技術庁のライフサイエンス分野の技術予測では、二〇〇七年には老化制御が可能になるとしていますが、自分の意思ではなく、ただ技術によって生かされているというかたちが出てくる怖れもありますね。

吉田　おっしゃる通りで、だいたい自然にもう少し素直に任せておけば、人間にはそうした面での負担はないのですが、西洋医学では一秒でも生かすことが医者の使命だといわれたんです。しかし、それは人間として生きているということでしょうね。だから私は自殺は反対ではない。が、また逆に、生まれて来た時は目も見えず、耳も聞こえず、大威張りで大便も小便もたれ流しで生まれたのだから、死ぬ時だって、いつの間にか死の恐怖の境は過ぎ、ボケて屎尿のたれ流しで大いに迷惑をかけて死んでもいい。難しい問題ですが、成行きが解決していくと思います。世代の交代というのは大きな目で見れば一種の新陳代謝なんですからね。

松下　ということは、死ぬ自由もあるということですか。

吉田　あると思います。ただし、自分で自分を殺すことは生物本能に逆らってますからね。理想をいわれても、歳を取って精神力が弱まると生きていこうという本能がものすごく強くなる。若い人が自殺しそこなって、もう助からない状態になってからの、生きようという本能むき出しのケースなど扱っていると、人間集団はそう簡単には滅びないというのが我々の実感として強いですね。

高齢化は社会をより人間的にする！

袖井　今日は問題ばかり出てきて、なかなかソフトにまでは行かなかったような気もしますが（笑い）。二〇二五、二〇三〇年あたりを考えた場合、やはり今の老人とはだいぶ違っているでしょうね。私は非常に危いとは思いつつも、わりに人間はうまくやるんじゃないかとの楽観論もあって、かなりいい加減なところがあるんです。たとえば今の小学生たちはマイコンなど巧く使いこなしていて、老人になってもコンピューター社会に適応できるんじゃなかろうかとか……。高齢化社会については暗黒からバラ色まで、いろいろなシナリオが書けると思うんです。多分、本当の答えはその中間ぐらいなんでしょうが、危険だとかバラ色だとか一方に片寄ってしまってはいけない。私たちが今、一番やるべきことは、いくつかのシナリオを書いてみることではないでしょうか。

松下　そうですね。ただ問題としてはショートランかつローカルかもしれませんが、このように高齢化社会のマイナス要因が指摘される一面、高齢化でなければ可能でないような仕事を探索することも大切ではないか。たとえば一つの考え方として、何歳以上でなければこの仕事はやらせないという逆定年制のような仕組みとか……。現在の特定化され単体化された技術開発は、やはり若くてタフで指向性の強いシャープな感覚を持った人間にしか出来ませんが、これからは単体の技術よりも、それをシステムとして大きな社会問題に対応してゆくことのウェイトが大きくなってゆくことが考えられる。それをマネージしたりコーディネートすることのできるのは、逆にいろいろな開発の経験を経て、ある年配を越した人でなければならないと思います。

吉田　必ずしも欧米の行き方に追随する必要は無い、もっと日本的背景でものを考えて生かしていったらどうだろうかと思っているんです。そして、これまで工業社会が一方的に吸収していた優秀な人たちが、将来は農業社会にも多数入って優れた業績を上げてもらえるのではないか、その中で農工の長所を生かしたバランスのとれた社会が生まれるのではないかと思っています。また、年寄りが増えることについてのマイナス面ばかりが強調されすぎてますね。たしかに肉体は三十ぐらいから弱っていき、これを訂正するのは医学的にも非常に難しいと思います。しかし、精神面では、構え方によっては八十近くまでかなり高い精神的なものを持っていける。肉体的な要求よりも精神的な問題を生かしていったら、年寄りが増えることは、よほど人間的な社会が出来るということになるんじゃないでしょうか。

アメリカCATV事業の展開

㈶政策科学研究所■

日本全体が、通信衛星と光ファイバー・ケーブルによって結ばれ、地域では双方向CATVがネットワークを形成する。こんな高度情報化社会がいまや実現しようとしている。

今回視察したアメリカCATV事業の現場は、まさにこの工業化社会から情報化社会へ転換していく足音をきかせてくれるものであった。アメリカの場合も、CATV事業は難視聴対策から出発した。しかし、その規模はふくれあがり、一九八三年四月現在、全米TV所有世帯の約三八%、三千百万世帯になっており、毎月四十一万世帯ずつ新規加入者が増えている。

難視聴を解消することが目的であったローカルなCATVが全米にこれほどまでに普及してきたのは、一九七五年に番組提供会社であるHBOが通信衛星を用いて映画番組を中心に有料テレビサービスを開始したのがきっかけとなっている。さらに一九八〇年には、CNNが二十四時間ケーブル・ニュース・ネットワークを開始した。今回の視察でも最も鮮烈な印象を受けたのはこのCNNの現場である。

CNN——24時間ニュースの現場

CNNとは一九八〇年六月、プロ野球アトランタ・ブレーブスのオーナーであるテッド・ターナーが興した新規事業で、二十四時間ぶっ通しでニュースを送るという画期的なものであった。CNNの現場は活気にあふれていた。そこでは世界の通信社からたえずニュースが送りこまれ、それを編集、出稿、チェック、編成、あるいはグラフィックな加工と、あたかもそこは、雑誌か新聞の締切り前の現場のような感じであった。そこでは、いかにおもしろくニュースを報道するか、視聴者をひきつけるものにするかに、懸命な努力が傾けられていた。

「日本ではきまった時間にニュースが報道され、それを見るとその後はそれほど内容はかわらないのでほとんど見ない。なぜアメリカでは二十四時間ものニュース番組に対するニーズがあるのか理解ができない」という質問に対し、彼らは、「アメリカでもビジネスマンは忙しい。ニュースを見る時間は短い。しかし、忙しいからこそ、いつでも好きな時に最新のニュースをチャンネルをひねれば見られるのは意味があるのです」と昂然と言い放つ自信の中に、高度情報化社会のすごさを感じた。

双方向画像サービス実用化への模索

今回の視察の目的は、アメリカにおける高度情報化社会の波にふれるのと同時に、双方向画像サービスがどのように展開しているかを知ることであった。ただ、この点についてはアメリカといえどもまだ全くの模索の段階であるということができる。今回視察した中ではワーナー・コミュニケーション社がQUBEという双方向サービスを実用化していたが、その内容は、ゲーム、世論調査などであり、それほど視聴者をひきつけるものにはまだなっていないようであった。しかし、どこの有線テレビ会社もこれからは双方向サービスの展開がキーポイントになるということでは一致しており、いくつかの実験を始めていた。

日本における事業化の条件とは

最後に、今回の視察の体験から、我が国における事業化の条件について考えてみる。その場合、最も障害となる要因としては、①アメリカのように十分な番組提供会社がないこと、②電波は公共的なものであるという意識が強く、料金を払って見るという風土がないこと、があげられる。つまり、現時点でCATV事業を行うには、送るべき必要な情報を開発し、需要を開拓しながら進めていかなくてはならない。そして、電波メディアとも、活字メディアとも異る、新しい文化を創り出していかなくてはならないだろう。私鉄はケーブルが引き易いというようなハードウエア感覚では、この事業は絶対に成功しないであろう。

膨大な先行投資が必要とされる装置産業としての慎重さときめ細かいニーズを創造していく感性とが、この事業を成功に導く条件となろう。

（山田　嗣）

コメと魚

近ごろとみに海外で株をあげているのが「日本型食生活」。バランスのとれた健康食として評判が高く、かの牛トンもダイエット食扱いというのだから面白い。戦後間もなく、諸悪の根源はコメにあり、日本人の頭が悪いのもコメのせい、と高名な医師までがのたまい、その著書はベストセラーにもなった。食生活の改善とばかり、農村の隅々までパン食普及のための指導車が走り回ったものだ。さて、そのコメ退治の成果とあってか、三十七年度、一人当たり一一八・二キロをピークに、米の消費量は減りつづけ、五十六年度は七七・八キロにまで落ち込んでしまった。これではならじと、食生活懇談会がまとめた提言が、「望ましい食生活」八項目。コメを基本食料に、動物性脂肪を摂りすぎず、緑黄色野菜や海草を心がけて食べ、カロリーの摂り過ぎを防いで適正な体重を維持しよう、というのがその呼びかけ。てんぷん食の割合が五〇パーセントと高い日本食は優れている、とコメの効用を評価し、日本人に不足がちなカルシウムは牛乳で補えば理想的だという。つまり、コメによると、国内で流通しているデータベースは四百五十六種、そのうち百二十二種が日本でつくられ、残り三百三十四種が欧米産だ。海外のデータベース輸入を扱っている大手は丸善、紀伊国屋といった本屋さん。端末機をオンラインで結ぶサービスの実現で競争に拍車がかかり、企業・大学から個人へと客層拡大をはかっている。

＝魚型食生活のすすめだが、厚生省の食生活状況調査でも、家庭料理のトップは焼き魚、続いて野菜いため、天ぷら、玉子焼と和風が洋食を押えている結果がでて、形勢は有利。食卓のことにまで政府が口を出すのはおせっかいという向きもあるが、農林省はこの提言を受けて米食キャンペーンに乗りだすとのことだ。

データベース

情報は多くの分野で無限にふえていく。しかしこれを上手に使いこなすのは至難の技。統計や文献などを、目的や用途別に分類してコンピューターに記憶させておくデータベースも情報の収集や整理、その引き出し方の技術一つで、膨大な蓄積が生かされもすれば、死蔵もされる。技術同友会が、このほど提案した「情報政策のあり方」も、この点を強調している。米ソ両国が、国防上の必要から情報戦略に力を入れているのは周知の事実だが、遅れをとっているばかりでなく、両国から狙い撃ちされている日本の現状に警告、散逸している情報を体系的に集中することを望んでいる。また、高度情報通信システムに乗せることによって技術情報の効率的な流通を促すよう求めてもいる。ところで、郵政省は、データベースを相互に結ぶネットワーク化をめざしており、異った企業間のデータベースを中継コンピューターによって接続する実験、法体系の整備を急いでいる。一方、通産省は、国内で流通している商用のデータベースの台帳を作成して一般への閲覧をはじめた。これなどの所有地であるため各デベロッパーの手で開発し、施設用地として提供する分散型開発の方式をとることになるのが、一括開発の筑波式とは異なるところになりそうだ。東京から六〇キロの筑波に比べ、京都・大阪から三〇キロの好立地も武器になる。三府県の産・官・学界による推進協議会が発足。与党内にも小委員会が出来、建設省の近畿圏総合整備推進計画も、大阪を中心とする学術・研究都市群の育成の中心として京阪奈丘陵を位置づけている。難航した関西新空港も、ようやく着工のメドがついたいま、二十一世紀を視野に入れた大型計画は、現実のものとなろうとしている。関西復権、国土の複眼構造化をめざして、関西各界の団結と協力が見ものだ。

関西文化学術研究都市

東のツクバが、先端技術研究の一方の中心として国際的にも脚光をあびているのに負けてはならじと、関西にも学術都市をつくる構想が日の目を見そうだ。古都京都と奈良の中間、大阪・京都・奈良にまたがる京阪奈丘陵の二五〇〇ヘクタールを伐り拓いて一大研究基地を設けるのがその計画。第二国立国会図書館、国立総合芸術センター、アジア分子生物学研究機構など官立の施設に加え、民間の研究所や大学を誘致する。官庁の研究機関を集中した筑波に対し、民間を最初から組み入れ、「科学技術」だけでなく、「文化」も広くとり入れようとしているのが関西の特徴。それに開発予定地の大部分が、公団・私鉄・生保

ロフト文化

倉庫の広い空間を利用して芸術活動―。ひと昔前、ニューヨークやロンドンの若手芸術家たちがはじめた流行が、いま東京・竹芝にたどりついた。ゴツゴツしたコンクリートの肌の倉庫群、近くに伊豆航路の桟橋がある殺風景な海岸地帯。ファッションデザイナーの本拠ができたのを皮切りに画廊、アトリエ、写真スタジオなどが次々と入居してきた。また、展覧会場としても目をつけられ、若い女性たちで、時ならぬ賑わいも見せる。倉庫だけに天井が高い。五メートルもあるから、最近流行の超大型作品も、すっぽりおさまる。搬入にも、撮影にも、広々した空間は好都合だ。コンクリートにペンキを塗っただけの壁面にさりげない照明器具、そこに、手が入っていないよさを見、自分だけの空間を感じとれるのが、若い人の当世風の心をとらえる。中に入る作品の邪魔をしない空間こそ、芸術作品にとって望ましいのだ。また、都心のビルに一室を構えるのに比べ、お値段も半分以下というから悪くない。不況に泣く倉庫業者にとってもまたとない顧客とあって、まずはロフト文化バンザイというところ。ニューヨークのソーホーでは、芸術家たちが、殺風景な空間を個性豊かな住居兼仕事場に改造して住みつき、芸術家村をつくりあげた。その点、窓のない既設の倉庫では、住み込むことはむずかしい。ともあれ、タケシバが、新しい芸術の代名詞になるかどうか、いま少し時間をかさねばなるまい。

資源植物学

普通の稲に比べ二〇～三〇パーセントも収穫量の多い種子の生産技術を、アメリカの企業が日本に売り込んできた。交配によって生まれ、その子供に限って多収穫だが、孫の代になると普通以下の品質に下ってしまうハイブリッド（雑種強勢）種子がその商品。従って、農家は毎年、種子会社から種モミを買わなければならなくなり、稲作は完全に種子会社に支配されてしまう。「タネを制するものは世界を制す」、誠に恐しい話になるのだが、さすがアメリカはこの資源植物学の先進国で、もっとも研究が進んでいる。一方、日本はご多分にもれずその重要性への認識が足りなくて一向に動こうとしない、と心ある人々をやきもきさせている。しかし、アジアの緑を守るために日米が中心になって資源植物学を育成しようとする基金計画が動き出し、その募金も好調と伝えられているから、やや風向きが変わったのか、いずれにせよ喜ばしい。長い年月をかけて進化し、自然淘汰によって生き残ってきた植物の遺伝子は、かけがえのない資源だ。まして、それが失われれば、再び作り出すことは不可能なだけになおさらである。アジアでは、年間平均二千ヘクタールの森林が燃料やパルプ材のために伐り出されている。遺伝子の宝庫といわれるこの地域の熱帯降雨林の破壊が進めば、将来有用な植物も失われる。科学技術の発達で、これを利用しようというときに、ホゾをかむことになっては大変だ。

CCV 運動能力向上機

敵のミサイルに襲われたとする。この戦闘機は、機体の姿勢を変えないまま、一秒間に上下一五メートルの移動でかわすことができる。同様に左右方向なら一八メートルの水平移動をやってのける。また、機首を上下二・四度、左右なら四・三度ふったままで水平飛行できる。防衛庁が発表したのはT2型練習機を改造したCCV実験機。主翼前方に二枚の水平カナード翼（補助翼の一種）、胴体中部下面に一枚の垂直カナード翼をとりつけ、小型電算機によって電機式操縦装置をあやつり、飛行に最適な状態を瞬時に判断、指示して実施できる仕組み。最適な飛行状態で飛ぶわけだから、省エネ向きでもある。より鳥に近い飛行機ともいえる。アメリカは現に試作機を飛ばし、西独、仏、英、スウェーデンなども手をつけている。しかし、関係者は、どの国にも負けないCCVと自信満々の様子。これて、次期戦闘機は純国産でとの悲願は達成できる、とする向きもある。だが、日本の航空機工業の実力は、欧米と比べ月とスッポン、と断ずる声はいぜん強い。アメリカの航空機産業のカサの下に甘んじさせられている現状からいえば、当然かもしれない。その一方で、日本の航空機産業はやがて世界の檜舞台に躍り出ると、欧米の関係者が警戒しているのも事実。やる気になったらやれる日本の実力を証明するものとして、CCVはやはり期待の一番星たる地位を失わないのではないか。

第二首相官邸

大地震に襲われたならたちまち無政府状態、となってはたいへんと、立川市に広域防災基地を建設、そこに第二首相官邸を設ける構想がうちだされた。首相官邸や諸官庁の機能が、大災害とともに停止した際には、首相がヘリコプターで移動し、すぐさま指揮をとり続けることになる。従って通信施設は、首相官邸と同じ能力を持つものを常備する。防災基地は、元陸軍飛行場―米軍基地跡の一部、一一五ヘクタールに、自衛隊の飛行基地、食糧備蓄倉庫、医療施設、要員宿舎、消防・警察・海難救助関係の施設を完備する。隣接している昭和記念公園は、住民の避難地域、救援物資の集積場とされる予定なので、この一帯が生き残りのトリデになるわけだ。中曽根首相自身が積極的だとも、また、テント張りになっても永田町を動きたくないといった、とも伝えられている。権力者がまず安全地帯へ逃げ込む、という図式は、いまの〝平等社会〟日本では、はやらない話ではある。だが、指揮者を失った集団は破滅しかねないのも事実だ。欧米では、このあたり割りきったもので、地下やトンネルに、非常時の中枢施設が準備されている。アメリカの場合は、大統領の空中指揮用ジェット機が待機している。ともあれ、工費一千億円の大工事は、来年度から動きだしそうだ。まさか、キナ臭い有事のための〝大本営〟のつもりでは、との声もきかれる。結局、無用の長物だった、ということになって欲しいものだ。

生命倫理

科学や技術の発達につれて、ただやみくもに研究を進めることを、よしとするわけにはいかなくなった。例えば物理学と原子爆弾。医学の分野もその例外ではなく、遺伝子操作、臓器移植、体外受精、脳死の判定、終末治療、安楽死と、生と死の接点、神と人とのかかわりに関する難問に直面している。欧米諸国や開発途上国約三十カ国では、生命倫理にもとづく法の枠を設けており、研究所を持っている国も多い。ところが日本は誠にお寒いのが現状。このなかでようやく、北里大学に「医学概論研究部門」が設けられ、医学と社会科学などをふまえて総合的に生命倫理をとらえ直す研究が進められようとしている。一方、「医学概論は二単位で十分」とする文部省の方針にもかかわらず、産業医科大学は、六年間に二十二単位の必修を課すことになった。悩み・考えて、生命に対する医師を育てる教育をするというのだ、研究の進展とともに専門領域が細分化され、狭い世界に閉じこもることになって、人間を全体としてのまとまりをもった生命とみる姿勢が失われることの恐しさ、一部の専門家に生や死についての最終判断をまかせることのこわさは、ことに指摘されている。一方では、患者の苦痛をよそに、ただわずかばかりの延命を図ることの無意味さ、非人間性も云々されている。「正解はないが避けて通れない問題」に医師のタマゴならずとも、真面目に取り組むことを時代が要請しているといえよう。

ボロ着ファッション

穴があき、ほつれ、つぎはぎ、汚れ…ボロとも、プアー（貧乏）ともいわれるファッションが流行している。新品の、穴のあいたTシャツが売られる一方では、ハサミでジョキジョキ切って着るのがナウい、ともてはやされる。裏返しのトレーナーや、ジャケットのすそからシャツがはみだしているのを、思わず注意してしまう大人にとっては、理解しかねる感覚ではある。もっとも、プアーなのは形のうえで、使っているのはなかなか凝った高級な材料だったりする。最高にイマい人は新品には目もくれず、古着屋をあさる。六本木、青山といった町の表通りに、古着屋が店をはっているのも故なしとしない。そこまで若くなれない人でも、シワシワの麻なら手を出せる。従来、夏ものだった麻が、今年は春から売れている。これらの衣料に共通しているのは、大量生産品ではないということ。量産のきかない天然素材の麻は、全繊維のうち一パーセントを占める量でしかない。作る側もこのことは心得ている。ボロ着ファッションを売り出したデザイナー山本耀司氏は「大好きか大嫌いか分れるのが理想」といっている。万人受けを狙っているのではないのだ。このファッション、いまパリでも大受けとか。本場西洋で日本人デザイナーが活躍、というのではなく、日本でつくられたモードが海外に持ちだされて評価されている点に、日本のファッション界の新しい波を感じさせる。

日本人の法意識

幼児の水死事故をめぐる隣人訴訟で、原告・被告双方へのいやがらせの電話・投書が相次ぎ、ついに訴訟は取り下げられるという始末になった。顔を見せずにイヤミを伝える、まことに陰湿な全国的な村八分がはびこるうっとうしさはともかくとして、裁判への相も変らぬ拒否反応は、日本人の法意識の実態を、まざまざと見せつけてくれた。「あなたの弁護士はどなた」と聞かれ、「そんな人はいません」と答えたら、「それならだれがあなたに代って考えてくれるのですか」と問い返されたという笑い話。貸家のサクを子供が壊したのをみつけた大家さんがたちまち訴訟。しかし、その後も店子といつに変わらぬ愛想よいつき合いを続けたという話。「落ちこぼれたのは親の無責任のせい」と親を訴えた高校生。法律万能のアメリカでは、この種の話題にことかかない。しかし、ムラ社会の日本人は別の世界の住人。フランスの民法をもってきて翻案するということをやったから、暮らしと法律の実体はずれてもいる。勢い、タテマエとホンネは違う、ムラのもめごとを駐在

結合発電

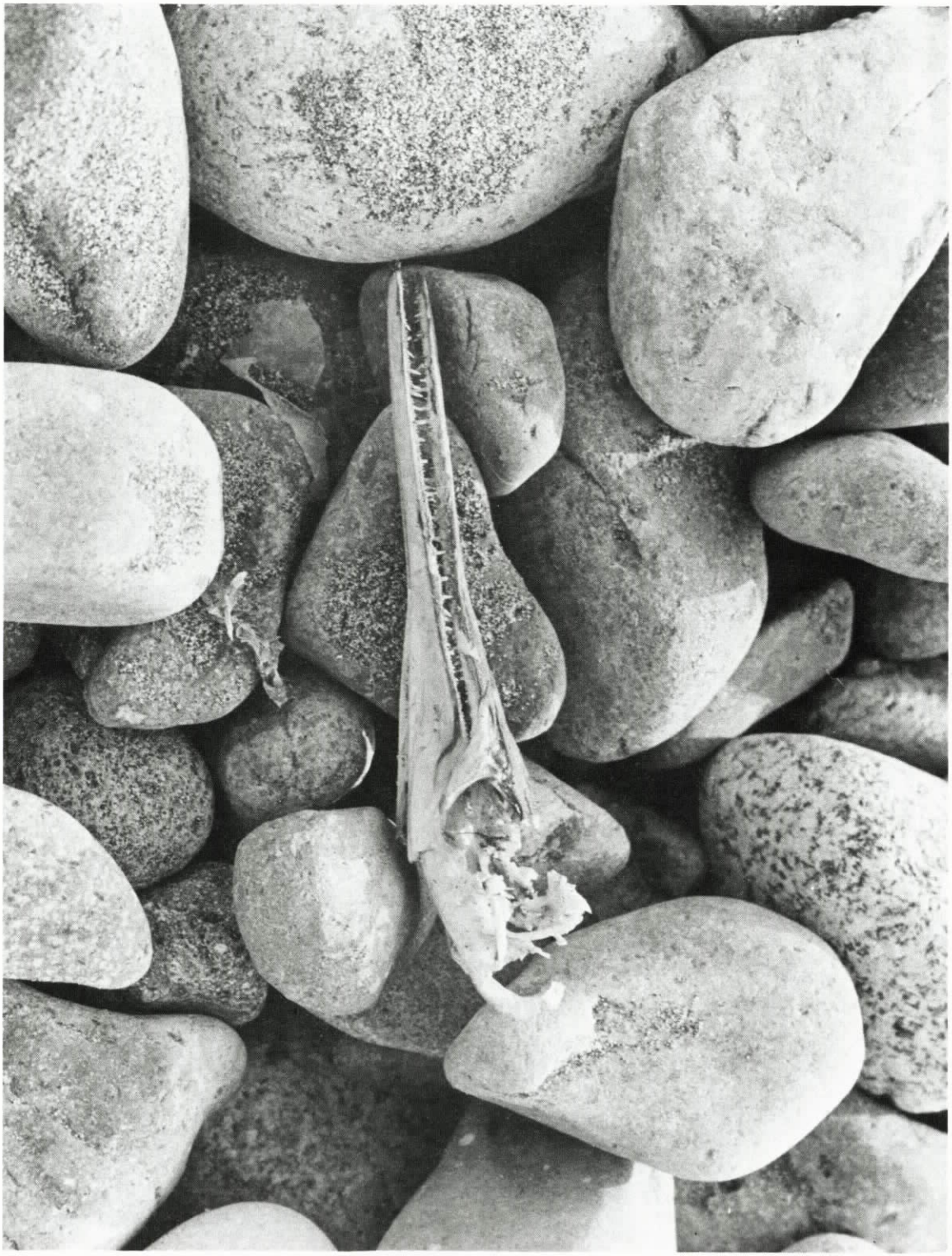
都市生活のやっかいもの―ゴミの処理に省資源を結びつけるアイデアが、資源調査会から提案された。ゴミの焼却による熱を、隣接する石炭火力発電所と結んで、単なるゴミ焼却による発電より、効率をあげるという考え方だ。七年後の六十五年度には、東京で二万六千トン、大阪で一万八千トン、名古屋で九千トンものゴミが発生すると予測されている。これを処理するため、例えば東京湾では、二〇〇キロ地点に、三千トンのゴミ焼却場を、二百万キロワットの石炭火力に併設する。焼却場からの熱は、発電機の高圧タービンを回した蒸気を再加熱するのに使用する。ゴミ焼却場の単独発電に比べ、熱効率は一四パーセントから二六パーセントへと二倍近く上昇する。五〇〇トン積みのゴミ運搬用ハシケの製造・運用費を加えても、一トン当たりの費用は、単独発電の二万四千五百円に比べ一万三千三百円と安くなる計算だ。六十五年度に三大都市圏がはき出すゴミを全て結合発電にまわすと、百三十八万キロワットの電力を生み出すことになる。一方、ゴミを再生処理する技術は、工業技術院が大型プロジェクトとして研究を進めており、東京・横浜のパイロットプラントを中心に十年間の運転研究を終っている。ここではゴミはたい肥、トイレットペーパー、メタンガス、油、軽量骨材などに再生される。さて焼いてしまうか、物をとりだすか。省資源時代のウデ比べが、けだし見ものだ。

生体エンジン

液体の中にひたされている六枚の羽根がゆっくり回転する。時計の長針よりやや遅い速度。清水東大教授らが作った画期的な〝生体エンジン〟だ。水溶液は、ウサギの筋肉からとった二種類のタンパク分子と生体エネルギー物質からできており。これが筋肉の収縮と同じ働きをして羽根をまわした。清水教授のグループは、その後さらにこの実験を高度化している。二つのプラスチック製のリングを組み合わせ、その間に二種類のタンパク分子を塗り、生体エネルギー物質を流しこんで、細胞内の「流動」と同じ現象を再現することに成功している。これも、一種のエンジンとみることができるわけで、現在のエンジンが化学エネルギーを一たん、熱にかえてから機械エネルギーとしていたのに比べ、化学エネルギーを直接機械エネルギーに変換しているだけに、すこぶる効率がよい。この原理を使えば、極微小なエンジンをつくるのも夢ではない。生物が持つ能力は奥が深い。小さな遺伝子は親に似た子供をつくる情報を伝えるし、牛はワラを食べて完全栄養の牛乳をつくり出す。生命の不思議は、技術革新への、無限の種子を提供する。現に外電は、米社が生物化学素子を五年以内に開発することをめざす、と報じた。遺伝子工学によって〇・一ミクロン（一ミリの千分の一）の大きさで、六四キロビットのチップの一億倍の演算速度を持ち、シリコンチップより十億倍もの情報をつめこむ素子を生みだすというのだ。

〈長谷正人〉

特集 バベルの塔 PART II



特集対談

我々は何を創ろうとしているのか

色川大吉　歴史家
伊東俊太郎　東京大学教養学部教授

このままの速度で21世紀までもつか

色川　明治時代にもSF作家みたいのが居まして、日露戦争前に五十年後の人類の姿などを予測した本がある。最近のSFと違って何も当たっていませんが、ただ一つ機械文明の到来だけは当たっていた。最近も二十一世紀が近づいたというので、二十一世紀はどうなるかと岩波があんな大きな本を出し、私もアンケートを求められたりしました。ま、歴史家の突っ放した見方をすれば、激流に流される船があと十キロほどで巨大な滝の滝壺に落ちかかっている。皆が一生懸命に戻ろうとしているのに、指導者だけが滝へ向かって進め、進めと言っている感じです。このままのスピードで行ったら二十一世紀まではもたないんじゃないかという気が私なんかはするんです。ですから、何を創ろうとしているのか何が創れるのか、現実性があまり考えられない時代じゃないでしょうか。

伊東　アーサー・ケストラーが自殺しましたね。遺書にもあたる最後の著作『ホロン革命』を読みましたが、非常にペシミスティックです。原爆の生み出された一九四五年は人類の全く新しい時代区分になるとして、ポスト広島の新紀元をつくろうというのですが、とにかくそれ以後、人類は秒刻みで破滅に向かっているというのです。その最大の問題が核軍備の増大。地球全体を六回も破壊し、なお余りある兵器が蓄積されているにもかかわらず、それに対する現実的な縮少とか制限が行なわれていない。それから、人間には他の動物には無い種内殺りくが非常に発達していて、しかもそれに対して鈍感であること。それともう一つ理性と情緒というものが、慢性的に精神分裂的に分離しているわけです。理性が構築するものは幾何級数的に発達するが情緒面はそれに対応しきれないで残されていくといったアンバランスですね。それとも関連して、結局は科学技術と道徳の問題が何ら結びついてない。もし異星人が来て十七世紀以降の人類の進歩をみた場合、知的には素晴しいが、全体的には調和のとれない非常にグロテスクな生物であると判断を下すのではないかと言っている。けれど僕はもう少し楽観的です。ケストラーはあまりにも早く地球に見切りをつけてしまった。いろいろ問題はありますが、まだ、切り抜ける方途も考えられるんじゃないかと思うのです。

色川　僕もこのまま滝壺に落ちるとは思いませんよ。日本史でいえば鎌倉末期とか文化文政以後、皆がペシミスティックで非常に暗

い。そこへ親鸞が出たり明治維新という大転換がくる。ですから、皆が危機意識を強く持てば逆にそれに対するスプリングボードが利くようなことを期待しているのですが……。

強く求められる科学とモラルの調和

伊東　それをどうやったらいいのか非常に問題だと思うんです。現代のバベルの塔は何かといえば、まず先ほどの核兵器の蓄積、それと新しいところでは遺伝子工学、現代の巨大技術もそうでしょう。何か皆一生懸命エネルギーを注いでやっているんだが、全体的な展望を失って、飼いならされ管理化されて、やっていることの意味も意義も判らなくなっている。行先が全く判らないんです。

色川　現代のように管理が巨大化し仕事が専門化して、自己目的化している場合には、その統御する最高の技術が政治に課せられているんでしょうが、政治は情緒で動いてますから、その非常なアンビバレンスが出ている。

伊東　先ほど日本史について言われましたが世界史的に見ても同じことがいえますね。バベルの塔が築かれたBC二千年期のバビロニア、ピラミッドを造ったエジプトなどもそうですが、そこでは文化の蓄積により科学技術、労働力が結集して、巨大建築物が造られた。私はそれを「都市革命」と言ってるんです。

色川　そしてインダス文明のモヘンジョダロなど、ある日突然ではないにしても、忽然として消えてしまい、あれだけの古代都市が何で廃墟になったのかという大きな謎を残してますね。

伊東　そう、まさに、モヘンジョダロ、ハラッパなどもその「都市革命」の一つで、一種のバベルの塔かもしれない。アーリア民族によって亡ぼされたという説もありますが、最近の研究だと都市文明の爛熟の中から、れんがを焼く木材を必要として周囲の森林を伐採して砂漠地が生じたことなど、都市の乱費が生態学的な危機を招いて滅びたといいますね。ですから我々も確かに危機感を持つべきだし、また持たなければ回復できない。今の状態をずっと延長していけばいいと言うものではないと思う。そして今度はその爛熟の中から、文明の危機といったものを意識する時代が、BC八百年から四百年ぐらいの間に世界的に生じたと思うのです。たとえばソドムとゴモラに象徴されるイスラエルの都市国家の退廃――今日の東京、ニューヨークにも似通っているんですが――に対してイスラエルの予言者たちが批判の眼を向け、やがてキリストの愛という精神原理につながっていく。ギリシャのポリスにもペロポソネス戦争後、ソクラテスが出て、プラトン、アリストテレスと変革が起こる。東では春秋戦国の都市国家の爛熟の中から、新しい精神原理を孔子らが説く。ガンジスのほとりの都市国家の繁栄を横から批判したのが仏陀です。僕はこれを都市革命に続く「精神革命」と言うんです。

十七世紀の「科学革命」後、物質開発のみが進み、自己の内部を見ないで外的に拡張していくのみだったわけです。先ほど述べたケストラーのいう理性と情緒、科学技術と道徳倫理のアンバランスとかは、みんなそこへかかわってくる。今、第二のバベルの塔は確かに築かれつつある。ですからここでかつての精神革命のようなものが、科学技術の先端からそれへのアンチテーゼとして出てきて、科学を人間のモラルと調和させていくことが本当に必要になっているんじゃないかと思う。

注目される文明の辺境からの波動

色川　おっしゃられた通りですね。私ども歴史の世界でも、歴史哲学をもう一度構築し直さないといけないという声がだいぶ出てきました。つまり、今まで自明なものにしていた歴史の進歩とは何か、いったい人間は何に向かって、何のために努力しているのかという意義を、根本的に反省しなければならない。本来、哲学・思想・政治といったものは、人間諸科学のそれぞれのパート、パートで孤立していく傾向のあるものを、全体的に総合し統御して、人間の生きている大きな意味づけをしていく性格を持っているものであったのですが、それが今、全く二次的、三次的なものになっている。ですから、そうしたもののルネッサンスみたいなものが本当にこれからの基本だという声が高くなっている。

三笠宮は伊東さんのいったように、生態学的に古代都市が崩壊したのではないかという見方をするオリエント史家ですが、以前お会いしたら「色川さん、モヘンジョダロを見ていたら、私はフーッと悲しくなって、東京の未来というものを思いましたね」と言う。今の東京とモヘンジョダロの廃墟とが二重写しになってくる。何かしなければいけないのではないかという訳です。人間は数十万年の生活の中で、地球という生き物の共同体に対して何をしただろうか、どんどん消耗し、資源を掘り返し、作り直したりしたけれども、他の動植物よりも何も残さないで終わるのではないかという不安感を持ったというんです。

自然を拷問にかけた近代科学の精神

これは私どものやっている社会科学でも痛切に感じますね。

私はこの十年ほど、例の水俣病の研究で不知火海の汚染調査をやってきましたが、そこで痛感したのは、日本の近代科学のトップ技術を持つ大化学会社が、もっとも後進的な漁村地帯に入りこんでラジカルに地域を支配し非常に高能率高収益の生産関係を作り上げた。その結果が歯止めの利かない公害を生み出すわけです。これが東京とか瀬戸内ならば七、八年で歯止めが利いたと思います。ところが牧歌的な田園世界の中でやったために二十年も続き、百人で済んだ被害が一万人にもなってしまった。これは現代文明に対する痛烈なイロニーを示している。それで被害民には近代化、文明、生活の向上とかいうものに対する根深い不信感が生まれたわけです。そしてその中から、新しい信仰運動に近いものが生まれているんです。共同体に対する考え方でも、今までの地域の利害を守る、ある意味では抑圧的、自己防衛的なものではない。自然と一緒に暮し、同じように近代化の公害で苦しんでいる人々と気持ちを分かち合う。カナダ、アフリカ、最近ではスウェーデン、中国などにも出かけ、また水俣に招くといった精神状況を切り拓いている。近代文明に対する強力なアンチテーゼが、一番ナイーブで犠牲を強いられた辺境という地域から生じたのは示唆的ですね。もし現代に親鸞とかキリストが蘇生するならば、こうした所も一つの原点として出現するんじゃないでしょうか。またもう一つ、まったく盲目的にアトマイズされていた先端科学の従事者の中から、自分たちのなしている巨大な犯罪にがく然として、回心というか新たなイエスが出る可能性もある。

伊東　十七世紀にフランシス・ベーコンが〝知は力だ〟と言った。自然を支配し利用し、まだ貧しかった人類のための福祉を増大するのだというふうに、彼はバラ色の未来を描いたんです。確かにその頃と比べて人類の生活は快適になった。が、しかし、バラにはやはり大きなトゲがありましたね。自然征服のイデオロギーは人間の生存条件を改善すると同時に、生態系を破壊し、やがては人間も滅すようなヤヌス的両面を持っていたと思うんです。最近、『自然の死』という本をマーチャントという女性の科学者が出しましたが、そこではこのベーコンの自然支配の用語法をみると、魔女裁判と同じ言葉を使っているということです。「自然を拷問にかける」とかなんとか。新しい地平の開けゆく十七世紀は、一方において魔女裁判のような残酷で非合理なことがなされていた。ベーコンのみならず血液循環説の樹立者ハーヴィも魔女の身体検査をしていた。そういう人々のイデオロギーだから、そのインプリケーションを拡大していくと、結局、母なる大地を滅ぼしてしまうかもしれない。

確かに近代科学は自然と協調するというよりはそれを征服するといった暴力性を持っている。これをもっと人間の生活世界と調和したものに飼いならさなければいけない。とくに日本の場合など、科学技術が軍事化とは結びつかないわけだし、地理的条件からいっても巨大科学は適さない。ですから、軍事化、巨大化に結び付くものはやめて、人間的価値と結びついた科学技術のあり方という方向にイニシアチブをとるべきだと思うんです。

色川　経済学の世界でも、これまで遅れた近代以前のものとして軽蔑されてきた、自然経済時代の巧みな生産と消費とのリサイクル（自給構造）のメカニズムが注目されてきた。廃棄物を何一つ無駄にせず海や土壌に返し、再び少し多くのものを取っていくという自給経済的なリサイクルの知恵を、長い間の農漁業を通じて人類は学んできたのですが、機械を導入した近代産業で否定してしまった。一次産業などという言い方で軽蔑し、二次、三次と移行することが歴史の進歩、文明の発展と思っていたんです。しかし、三次、四次産業とはサービスであり情報であり、最近はセックス産業という妙なものも出ている（笑い）。結局は消費し尽す発展のないものです。で最近では、その自給構造時代の人間の知恵に、

■伊東俊太郎

近代科学技術の成果を導入して、より大規模な自給構造の知恵として再生しなければ駄目だというように学問の方向も少しずつ変わっている。

また私は今、三多摩のほうで自然保護運動と関連する住民運動をやっていますが、こうした動きも最近では、ビルも道路もいらないという反近代的なセンチメンタルなものではなくなっている。現在三多摩地区では都心再開発の建設資材として緑の山が次々と崩されて生態系の破壊が進んでいます。再開発というからには壊したものがあるのですから、それをも一度道路なり建物なりに使えないかという再生技術に、住民運動自体が目を向けてきた。出来るんですね。横浜が市営で再生工場を造っている。これまで海に捨てていたはがしたアスファルトや鉱滓などで立派な舗装素材や建築材料などが出来るんです。人間の食べ残しを豚にやり、豚の糞を肥料にすると

地球的に生かせる日本の繊細な英知

伊東　それは面白い例ですね。いまの巨大科学技術の方法というのはアメリカというような資源があり広いフロンティアがあったからこそ出来た。今、地球は狭くなり資源も有限であるとなると、小さな土地にかなりの人口が何とかリサイクルをやって生きてきた江戸時代の日本と非常に類比的だと思う。米国が典型的に実現した自然征服の巨大科学、つまり「ラフ」な科学に対し、日本人は「デリケート」な科学、人間的な価値や生活とのバランスをキメ細かにチェックする職人的な英知を持っていたと思う。これは現在、地球的に生かせるんじゃないでしょうか。

いった自給構造が、巨大科学技術の大きなスケールの中でも可能であるということです。

と同時に、人間的価値を忘れないようにすれば、人間化された科学が日本に育ち得ると思う。現代の日本人は非常に無雑作にブルドーザーで山を削っているが、元来はそうじゃない。明治以降、列強に対抗するための近代化を急ぎ、西欧の真似をした。キリスト教というのは「人間は自然を支配する権利を神から受け取っている」とベーコンが言うように、自然を破壊しても心は傷まない。日本人には異質ですね。アニミズム的というか、自然を人間と同じように考えていて大切にしなければというのが意識の低層に残っていて、どこかで傷みを感じながらやっているというところがあります。そうした感覚を大切にして人間的な科学を育てることです。また、さすがの欧米人も最近では、個人主義だけではいけないことが判ってきて、リースマンなどがグループ・オリエンテッドなどと言って、日本人の集団的な生き方を見直しています。これも日本人が狭い所で生き合ってきて自然に身についた方法であって、別に意識してやったわけではない。これは国際政治レベルでもいえる。核の競争などは完全に国家のエゴイズムで、地球の富を空費しているという罪の意識が無い。それは非常に低いレベルの十九世紀的国家主義の域を出ていないので今日の地球時代ではもっと発想の転換をしなくてはいけない。ですから日本人はそうした古いナショナリズムを超えた新しい原理を日本の中から創らねばいけない。日本の政治家もそうした方向で世界のリーダーシップをとるべきだし、科学技術者も実業家も、一般市民もそうでなければならない。そして科学技術を人間化する方向へ積極的に参加していくことです。そうなれば日本の中から、かなりいい芽が出る可能性がある。

色川　確かにそうしたものが日本人の素質の中にもあるし、歴史的な条件にはずい分恵まれている。おっしゃるように自然を壊す時には西欧人と違う意識を感じながらやっています。僕は自然破壊をやってる業者へ説得に行って言うんです。この三多摩の丘陵は噴火の火山灰を浴びたハゲ山ですから一メートルの黒土を作るのに何百年もの歳月と何万人もの血と汗がにじんでいる。それをブルで一夜にしてハギ取って赤土を出してしまう。そのため雨が降れば鉄砲水が出て下の町の下水を埋め皆が困っているのだと。業者もすごく心が傷むわけです。命令でやむを得ず取っているのだと言う。「いや、そんな考えは前近代的

です。我々は神から……」なんて言う人はいない。日本の場合、止めさせようとする人とやっている人との間に通底する気持、メンタリティーがある。これは非常に大切なことです。そのこれまで遅れた間違っていたとした価値観に自信を持てば、伊東さんがおっしゃる可能性がある。

ただ僕ら素人が一番恐れるのはロボットの発達ですね。ロボットが非常に精密な専門的領域にも進出すると、人間の労働することの喜びを奪ってしまうかもしれない。どこかでブレーキが必要ですが、今の効率至上的な企業原理では歯止めが利かない。やはり企業者、財界人、市民、労働者に価値の転換がないと、気付いたら道具のために使われていたということになりかねない。もう一つ怖いのはコンピューターの普及です。巨大政治権力の非常に精密な個人個人に対する管理の技術として利用され、憲法などは絵に描いたモチで一般市民は意識から家の隅々まで管理されてしまう。そうなると民主主義、個人主義といっても全く意味がなくなる。民衆がコンピューターを使って国家を管理する。逆にいえば民衆が権力に管理されない技術のほうも同時にやっておかないと、ある意味で人類の滅亡を招くことになってしまう。

反省さるべき近代科学のパラダイム

伊東　そうですね。私もそうした危険性には十分注意しなければいけないと思う。しかし一方では次のようなことも言えるのではないでしょうか。キリストや孔子の「精神革命」の時代は物質的にはひどく貧しかった。精神だけを張りつめるのは、やはり人間としてアンバランスです。その後の「科学革命」はある程度地球的規模で、経済的物質的に人間の尊厳が守れるレベルまで到達させることには貢献があったと思う。問題はそれが行き過ぎて「物質主義」になってしまった点です。それで金さえあれば何でもいいという、悪い意味での個人主義になってしまった。今日の非行問題、精神の病い、管理社会での疎外、効率利益一点張り、すべて物質主義の産物です。物質中毒、快楽中毒で、エスカレートする一方です。もっと人間的価値に目覚めて、近代科学技術のパラダイムを根本的に反省しなければいけない。確かにロボットは危険な方向を持っていますが、別の考え方によれば、人間を必要悪労働から開放し、人間が創造的に真にやりたいことがやれる、人間が本当に人間になれる時代にもなり得ると思うのです。

やはり必要な「新しい人間学」の確立

色川　何を我々は創ろうとしているかと言う時、一番基本になるのはこれからの人間、子供です。これがおかしくなっていると、よく言われますね。これの最大の問題点は、保育園から中学の先生まで、人間形成に対する考え方がペスタロッチ段階というか、非常に古い十九世紀的教育学の考え方に立っていることなんです。子供の成長は胎内、家庭、地域共同体と訓練されていって学校が仕上げをするというシステムで教育学、保育学が出来上がっている。現実を見ればそうではないのは明らかです。マスメディアを通じたり友人との会話から社会全体の雰囲気を音感で、映像で、肌で感じて人間形成されているほうが大きいんです。その部分の教育学が欠落している。情報心理学みたいなものもないし、情報社会下における新しい育児学も人間形成も無い。したがって学校内、家庭内で垣根を作っていい子に育てようとしたって外から侵入してくるメディアに太刀打ち出来ない。子供が外に出れば、友達同士の世界はもう大衆社会、情報社会であり、暴力、セックス、非行などあらゆるものが入っている。新しい人間を本当に作ろうとするならば、総合的な新しい教育学が必要ですね。中曽根さんが、家庭内しつけとか学校での厳しい修身教育が大事ですとかいうのは問題にならない。もう、そんな大昔の教育学のレベルじゃないと思います。

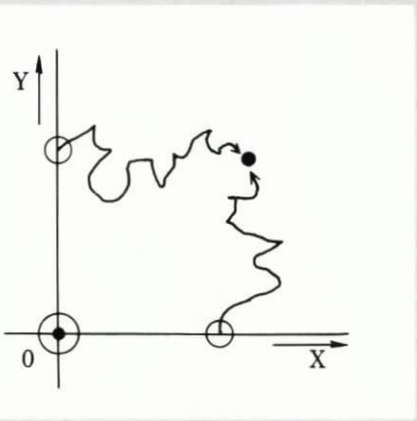
伊東　その通りで、私も最後はやはり教育の問題になると思う。現在の教育は物質主義、経済主義、効率主義ですね。一般社会の風潮に先生たちの意識が右へならえしている。いい大学に入るための効率ばかり考え、その人の持っている人間的価値をつくり上げるなどは全く考えない。非常に外的なものだけで人間を見ることになっているわけです。学校も家庭もそうなんです。ですから今の子供は非常に可哀そうでもある。理想が持てないのは大きな不幸ですね。自分の中から湧き出る情熱によって何かやるという理想が持てない。その理想を育てることが教育の最大の目的であるはずだ。バベルの塔をどう切り崩していくかは、結局そこへきますね。

色川　そうです。新しい人間学をつくらなくてはいけないという所にいきますね。

科学について

伏見康治

名古屋大学・大阪大学名誉教授
＝茅誠司部会



前からわかりきっていることであったが、いざとなるとそれを忘れ、また同じ種類の誤ちを冒す。科学が「分科した学問」の意味で、恐らくドイツ語のファッハビッセンシャフトの訳語だろうとは、しばしば人に言う語り出しの言葉である。自然科学の驚くべき進歩あるいは深化は、全くこの分科した学問の性格によるものだと思われる。木を見て森を見ずとはいうが、まず木を見なければ科学にはならない、森全体をただぼんやり眺めていたのでは、せいぜい駄句が一句か二句ひねり出せるだけのことである。細かく物事を分けて、分析的に調べていくというのが、近代科学の基本的姿勢であった。デカルトの『方法序説』ではそのことが明らかに強調されている。

それで科学者たちは、それぞれの専門分科という限定された研究対象を持ち、それに打ちこみ、深く掘り下げることによって、「しろうと」の手の届かない深みに達することができたのであった——であるから、違った分科の科学者の間では話が通じない。「バベルの塔」になるのは始めから明らかなことであった。

日本学術会議という組織がある（があった）。第一部から第七部まで、哲学、心理学、史学、経済学、法学、物理学、化学、数学、動物学、植物学（これが生物学にまとまっていないところがおもしろい）、医学、衛生学……あらゆる専門分野から二百十人の会員が選ばれて、共通の場で議論する。科学者という共通項で、互いに理解しあえるものという前提の下にこの会議が作られている。確かに「一芸に秀でる者は百芸に通じる」という言葉があって、一つの専門を極めたものは、よその分野のことも理解できるという面もあるにはあるに違いない。

しかし、その共通項というのは何なのであろう。

近頃、科学技術会議が面白い実験をした。それはわが国の科学技術者があまり独創性を持たないのは、それぞれがその専門の領域の中に閉じこもってしまって、外側の人と接触しないからであろう。幾何学的に言うと、同じX成分だけを持つ人間がいくら集ってみても、X軸の上の点であることに変わりがない。ところがもし別の専門分野の二人が、例えばX軸上の一人とY軸上の一人が協同すれば、話は一次元ではなく二次元になる。X成分とY成分を同時に備えた、より高い次元の話が出てくるはずである。それで、創造性を発揮させるには異分野間の専門家の接触を計るのがよいということで、科学技術会議が二泊三日の大討論会を開催した。三つの専門分野からそれぞれ二十人の現役的科学者を選び出して、合計六十人の会合を色々な形で催し、互いに討論させる、（一九六二年二月の第一回の際には、専門というのは、①生命科学、②材料科学——半分は金属で半分はセラミックス、③エレクトロニクスの三分野であった）。この実験の結果はどうであったか？　全く不成功であったとは言えない。それなりの成果はあったとは言えよう。しかし、事実として、異分野科学者が集って共通の話題となったのは、研究費が不自由だという不平であったことは否めない。先のグラフで言えば、共通点はなるほど原点0だけあって、話は二次元どころか0次元になっていたのである。

日本学術会議のしたことをふり返ってみると、同じことの言える場面が多い。研究費をもっと出せ、研究者の生活を擁護せよ、等の組合的要求は、正に右で述べた0次元の主張であった。しかしそれよりましな一次元的主張もある。色々な研究所をそれぞれ新しく設置せよという要求がそれだ。これはX方向の伸展をY方向の連中が邪魔をしないという姿勢がとれるからである。学術会議の討論のなかで、色々な異分野の科学者が同じ席で議論したが故に、真に次元の高い成果が出てきたということは遂になかった。ということは、科学の塔というのは遂にはバベルの塔に過ぎないということか。

楫とりの下で

三木　卓
詩人

世の中の発展速度、というとわたしはまず戦後のスポーツ記録の躍進を思いうかべる。わたしは一九四八年に中学生となったが、その頃、フジヤマのトビウオと呼ばれた水泳の古橋広之進選手が次々と世界記録を更新していた。しかしそのときのかれの記録は、今となっては牧歌的とでもいうよりない。たとえばかれの得意種目だった四百メートル自由型で考えると、もし今、現在の女子選手と一緒に泳ぐとしても、世界記録を保持する選手がゴールインするときにかれはまだ三百五十メートルのターンをしているぐらいの差になる。

こうした、大幅な進歩は、まがりなりにも平和が維持されてきた結果にちがいない。女子マラソンなどというものも平和の持続の上にあらわれてきたものだろうし、平和の力というものは大きいといまさらのように思う。

スポーツの大幅な記録の躍進は、したがってスポーツだけではなく、現代の世界、とくに先進国におけるさまざまな人間活動の躍進をも象徴しているといっていいだろう。各方面における人間の活動は、かつてないほどの規模と深さと速度をもって進んでいるが、それはおそらく平和のおかげである。わたしは一九五一年に高校で生物を学んだが、当然その教科書にはクリックとワトソンの二重らせんなど出ていなかった。天文学だって驚異的な発展をとげて、啓蒙の本などを読むと気味のわるくなるような宇宙の姿が示されている。今のこどもたちは、わたしの使った教科書などとはかなり異った教科書を学んでいるにちがいない。

テレビや新聞を見ていると、人間にとって本当にすさまじい時代にわたしは出会っているのだ、という思いを禁じ得ない。それは微視的にみれば、やはり平和の持続の結果というようなことがまずいえるだろう。あるときわたしは新宿の高いビルの窓から外を見ていて、いまここにはりめぐらされているさまざまな情報のネットワークひとつとってみても、それは戦後という時間の堆積であり、もしこれをいったんズタズタにしてしまうようなことになったらどうなるのだろう、と思った。そしてそんなことはしようと思えばわけない。この社会が平和に守られて蓄積してきた有形無形のもの——それが未来をまた決めていくということになるのだが、それはこの厖大な繊細さの上になりたっていて、まともな人間だったら、だれも戦争など、この一事をもってしてもねがうわけがない、とわたしは思ったものだった。

平和は先進諸国において文明の発展をいっそう促進し加速しているということができると思うけれども、それだけではないだろう。いや、もとはといえば、やはり今が人類の飛躍期ということにあるせいではあるまいか。いや、人類のというより、地球の生きものの歴史全体における飛躍期がこの二〇世紀であり、人類はその代表種といった方がいいのではないか。平和はその飛躍期のなかでの、戦争という阻害された状態からの解放というひとつの状態、ということだろうと思われる。そしてそう思ってみると耳もとに切迫してくるような人類の息づかいに気持のわるいところがある。〈そんなに急いでどこへ行く〉と思うのである。

いまわたしは、三浦半島の相模湾側の海辺に仕事場をおいているが、暴走族のオートバイの爆音にしばしば悩まされている。これか

ら夏に向かって、さらにはげしくなるだろうと思う。

その爆音を聞いていて何時も思うことは、〈人間はオートバイに乗ることを予想してつくられているだろうか〉ということである。まあ爆音をあげることはともかくとして、あのような速度で移動することをあらかじめ予期してプログラムされているのだろうかということである。

世界一のスプリンターは百メートルを十秒以内で走ることもある。これは器具を何も使わないから一応は予期された力だと考えてもいいと思う。けれども、オートバイによるスピードは、考えようによっては、そこまで予期されていたといえないことはない、としても、少なくとも、それが出来上って体験したときには、人間の感覚器は、人類はじまって以来はじめてという速度を体験した。これはライト兄弟ももちろん同じことだ。そして、個々の人間は、オートバイに乗り、飛行機に乗ることによって、はじめてその、クロマニヨン人が体験したことのない速度感覚を味わうのである。

しかし、暴走族といわれる諸君は、クロマニヨン人以上の速度感覚を体験した、ということで満足はしない。もっともっとスピードを出したい、スリリングな感覚を味わいたいという欲求を飽くことなく持っている。だせるものなら二百キロもおそれない、というようなところがある。わたしには、ここに人間の——あるいは生命というものの本性があるような気がする。

しかし、オートバイの速度には自らなる限界があるだろう。コンピューターがどこまでカバーできるかどうかわからないけれども、人間の知識や体験の集積、能力の発揮には寿命という制限がある。やがて力つきて、人類はここまでです、アーつかれた、キューバタン、という時がくるかもしれない。それは大いに困るはなしであるけれども、もし、地球の生きものの歴史の飛躍期を人類がうけもっているのだとすると、人類の歴史がダメになるということは、生きものの歴史もまたダメになるということになる。

もしここで人類にとって代わるもっとすごい生きものがあらわれてバトンをもぎとって走り出す、そういうようなことがあれば、歴史は挫折をまぬがれるだろう。けれども、そんなことが果してあり得るか。

なんだかはなしは、詩や小説を書いているシロウトのわたしにはどうしようもないようなところにきてしまったけれども、それを承知でつづければ、どうもそんなことはありそうにない。なぜなら人類というものは、意識というものをはじめて意識によって対象化することが許された生きものであるからである。

そういう人類は、超人類に素直にバトンをわたすだろうか。

そういうことはありそうもないし、それにそもそも意識を対象化し得る、などという呪われた能力を許された生きものは、物質の組み合わせとしてはもっと精緻なものが出現することが可能性としては考えられるとしても、つまるところ現実にはこれが究極生物なのではあるまいか。そういう生きものが出てきたということは、生きものの、それまでの歴史を駆動してきた自然の力とはまったく異質の、意識の結果としての力が歴史にこれから以後は及んでくる、ということである。たとえば、古くは焼畑農業などというものはその目立つ例だろうし、現代の遺伝子工学に至っては典型ともいうべきで、事態は決定的に変わったのである。とすると、やはり人類は生きものの歴史のすべてに責任がある、ということになる。

はなしが先走るのはひとまず停めて、このことと現在の状況とのかかわりを見てみよう。地球上には、アメリカや日本やヨーロッパのように活発な活動をつづけている地域ばかりではなく、開発途上国、後発開発途上国のような国々もあって、均質な発展をしてきたわけではもちろんなかった。そして各国間のちがいやひらきというものは、さまざまなかけ声によって是正されようとしてきたにもかかわらず大きくなっていくばかり、というのが実情ではないだろうか。

日本なら日本という国ひとつとってみても、全体の流れと、個々の人間というものは、当然のことながら一致しない。現代の教育がうちあたっている問題の根の大きなもののひとつは、実はここにあるとわたしは思う。

あらゆる分野で新しい事態、未知の壁に頭をぶつけていて、だれでもが一歩でも前へ出よう、事態に即応した処置を見出していこうという努力を怠ることが許されない。これは人間的性質というのか地球型生命的性質というのか、物質的性質というのかよくわからないけれども、ひとつの発展の方向が目指されているとき、それはその方向に向かっていかないと亡びてしまう、というようなことがあって、生長の速度をおとすことが出来てもあともどりは出来ない。これもまたきびしい、呪われた性質であるが、そのため、各分野の先端は、つねによりすぐれた後継者を必要としている。そうしないと、いままでの到達水準を維持し発展させることができない。その水準は年々あがっていく。

後継者となるべき者は、したがって高度な学習の水準、それも年々たかまっていく水準にまず到達しなければならないが、しかし、そこに達するまでの時間は、大学を卒業する、という時点で区切られている。したがってきびしい能力が要求されるし、また、選抜のしかたというものが大きく意味を持ってくる。

日本の入試選抜のきびしさの主たる一因はここにあるだろう。最良・最適の能力を持っ

たものをえらびだし、それをすえる。いわれているように、日本の近代社会は、制度としての階級の壁はつくらなかった。貧乏人の子でも能力さえあれば社会をうごかすポジションにつくことができた。能力ある者を吸いあげて役に立てる、ということにおいて徹底した態度を日本はとってきたし今もそうである。そして日本の入試選抜制度のネットワークは、この原理をつらぬいている。

国家や社会にとってそれは、合理的なやりかたであるだろう。また能力のあるものがふさわしい仕事を得られるということは、フェアなことであるということもできるだろう。だが、実力主義は、より能力において劣るものにとっては、きびしい現実であることもまた事実である。わたしたちは私立大学の入試の不正を怒り、学歴主義の社会を批判するけれども、もし、そういう批判など起こりようもない公正な自由競争原理が完全につらぬかれている社会に住むことになったら、わたしたちの大半は生気を失うかもしれない。

人間の能力は、どこまで予定されたものなのか、ということを考えずにはすまないような先端的な場にいて努力をつみ重ねている人々は、加速度的な自己開発活動の渦にまきこまれている。その後継者はまたその渦をもひきついで自己開発していく。そのような場にあるものは、人間の極限へ向かって生きることになるが、他方、そうでない者も、また圧倒的な数として存在している。個人としての人間の能力はまた多様であり、超現代人から未開人にひとしい者までが雑多で生きている、というのが事実としての現状である。そしてその差はいっそう烈しくひらいていっている。若い世代の反抗現象も、このような事態に対するものと、つまるところ見ることが出来ると思う。つまり、われわれの日本の社会は、知的階級社会なのである。民主主義の社会といっても、古代の民主主義のような素朴なものではなく、むしろ民衆を納得させるための手続きになっているといった方がいい。

月へ宇宙飛行士が行って、地球へもどって来たとき、わたしはまったく不安がなかったといったら嘘になる。もしかして月に有害な微生物がいて、かれらが持ちかえって来たらどうなるか。もちろんアメリカの科学はそういうことの起こらないよう、あらゆる対策をとっていた。それを信じないわけではないが、しかし相手はETである。どういう意表のつきかたをするやもしれない。

確率からいえばなきにひとしいことである。しかし、もしかすると地球が亡びるかもしれないようなことを行なう権利を、だれがかれらにあたえたのか。いかにしてかれらはそれをする根拠を得たのか。そして、どうしてわたしたちは、無断でそういうことをすることを許しているのか。チャイナ・シンドロームなどということも、あるいは遺伝子工学に不安をおぼえるのも、みな理由は、この列の先頭の異常な疾走についていけないことにある。そして事実としてわたしたちは、ブラックボックスに向かって「本当に大丈夫なんですか」と問うぐらいのことしか出来ない。

しかし、そういう枠組みをはなれて、人間のありようということから見れば、問題はおのずと別であろう。われわれは生きることを愛し、自分の仕事を自分の力に沿ってやりとげながら、自分を豊かなものに仕上げつつ生きていく。日本の国家は、わるくいえば一握りの後継者のために知的棄民政策をとってきたといってもいいかもしれない。つねに〈お国のため〉に収斂する一元的な価値観が支配してきたし、今もなおそうだ。問題は一人一人の人間が、そういう価値観から脱却できないでいて、あれは高校しか出ていないとか、おれはたいしたことのない大学の出身だが、あいつはもっとたいしたことのない大学だとか、そういう式の人の見方に支配されていて、なかなか相手を尊敬・尊重するための契機でとらえることができないでいることである。なぜ治める者の視点からばかり、そんなことが不必要な場でも見るのか。

われわれの社会の豊かさというものは何によるか、といえばそれは、決して単に社会の進歩のスピードによるわけではない。わたしたち一人一人の、この世界を感じ、考え、愛する能力の総和であり、それは、落ちつきのある、時がかかってゆっくりと熟成していくようなものであるはずである。多様な人間がそれぞれのありように沿って成熟していくことを努力し、またそれを許す社会であるはずである。

知的エリートたちが実権を握り、社会と歴史の梶とりになる、ということは認めざるを得ないだろう。かれらが梶とりとしてこの世界への愛を、かれらなりに注ぎ、努力しているということもまた事実である。そしてこれも、多様な人間がそれぞれのありように沿って成熟していくということの一つの場合である。梶とりの仕事はとくに重要だから、わたしたちはつねに不安を抱いて注視していく必要がある。ときには修正する勇気も必要だろう（それがわたしたちの世界への責任のとりかただろう。少なくとも全部がダメになったとき、これが人類の限界だったと自分をふくめて納得できることは必要である）。しかし同時にかれらが梶をとったあとの世界を充実したものにするのは、もはやかれらの仕事ではない。わたしたちの仕事である。

家庭の混乱

五代利矢子
評論家＝茅誠司部会

このところ「高速度社会」という言葉通り世の中の変わりようはすさまじく、十年一昔どころか一年一昔の観がある。そしてそれらの変化はめざましい技術革新に支えられている。

産業面での変化が家庭にも及んできて、これまでは十年一日の如くみえた暮らしも様変りしはじめている。核家族は更に個人化し、そうでなくても数少ないメンバーがそれぞれのスケジュールで忙がしく動き廻るようになった。四、五年前までは、一家の団らんに参加出来ないトップはモーレツ社員の父親だったのが、最近見たアンケートによれば中学生に移ったという。

必然的に食事などもスケジュールの異る家族がバラバラにひとりで食べる機会が多くなり、大型冷蔵庫の普及はそのことを可能にした。デパートの食品売場なども個食の時代に備えて模様変えをはじめた。おままごとのような小型パック入りの一人分のお惣菜や刺身・納豆が並んでいる。

同様に電化製品等も家族共有からパーソナル指向になり、とりわけ若い世代はオーディオ製品からヘヤードライヤーに至るまで自分用を持ちたがるし、それを個室にとりこみがちだ。

個室・個電・個食時代の家庭では、家族で力を合わせてやる作業もあまりないから、一家の団らんなどもかなり意識して演出しないとまとまらなくなってきた。

これから先、エレクトロニクス時代を迎えれば、これまでは多少ともお互いの配慮で機能させていた家事のやりくりも、オフィスオートメイション並みにコントロールされるだろう。パソコンのメインコンソールが居間の中心に置かれ、各室にはセンサーが設置され、情報はコンピューターに伝えられる。陽が差せばカーテンが開き、外出先からも電気釜のスイッチが入れられ、献立もコンピューターに作らせる。防災防犯のチェックも機械がしてくれる。又、居ながらにしてツーウェイコミュニケイションが可能な情報システムも開発され、買物も、語学の勉強も、趣味のお稽古も端末器の前に座ってマイペースでやることが出来るし、書類や手紙をワープロで印刷物のように仕上げることも可能である。

いきおい運動不足にでもなれば、多様な健康食品や各種のビタミン剤で身体の方もコントロールし、体操も画面から送られてくる映像を自分のリズムに調整してやるという風になるのかも知れない。

快適さと便利さのあくなき追求、しかもそれが産業ベースで怒濤の如く家庭に入って来る光景を想像するとまさに壮観である。確かに私たちの暮らしは、以前では考えられぬ程楽にも便利にもなったし、これからやって来る高齢化社会では、機器に頼って暮らす部分が確実に増えていくだろうことも充分予想がつく。

文明の進歩が人々の暮らしにもたらしたものははかり知れないが、しかしそれらを上手に使いこなし、機器にふり廻されることなくあくまで人間が主役でいるためには、それらを上廻るだけの叡知が必要である。たとえ、映画『二〇〇一年宇宙の旅』に出て来るハル・のような頭脳コンピューターが出現したところで、その指示通りにあやつられることで人々が果して幸福かどうかは疑問である。

機器の開発ペースにあわせて、人々が何とかそれに適応しようと必死になって暮らすようであれば、それは一種の家庭内混乱である。

バベルはヘブライ語で混乱という意味だそうで、神は天まで届くような塔を建てようとした人間の愚かな試みを打ちくだこうとして彼等の言語を乱し、互に意志を通じなくさせたという。快適さと便利さだけを至上の幸福と信じて、他の価値をかえりみることを忘れた場合、家庭といえどもバベルの塔の故事の如く、お互いの意志が通じなくなり、散り散りにならぬとも限らない。

学問における拡大と集中

村上陽一郎
東京大学教養学部助教授

ごくありふれたデータを一つ二つ。実験動物、マウスでもハムスターでも何でもよい。をある程度以上の個体数密度（ポピュレーション）で生活させると、これを解消する方向にさまざまな現象が起る。攻撃性が強くなって、同僚を殺したり、体調が悪くなって自らが死んだり、といった具合だ。蜜蜂、アリの社会、あるいは細菌のコロニーでも、内部の個体数がある程度閾値を超えると、その社会は一挙に滅亡するか、分割する。

トビバッタ、ヤスデなど昆虫のたぐいも、また魚やプランクトンも、時に異常発生する。多くの場合に、破局（カタストロフ）が訪れて、その状態は終りを迎えることになる。

個体の拡大でも事情は同じだ。ガリレオが、長さと体積との関係を計算して、言ってみれば現在の身長の三倍の身の丈をもつ巨人が存在し得ないことを立証しようとしたのは有名な話だ。もっともこれは宇宙の無重量空間では、少し事情も違ってくるが……。

こんな風な話は、書いていればキリがないが、どうも自然界には、密度の上での集中や、規模の拡大に関して、一種ゆるやかな制御機構があって、自律的にコントロールしていることだけは確かなようだ。しかも大切なことは、もし神が自然をつくるに当って、そうした制御機構が必要だと思ったのだとすれば、それは、神がすでに、自然界のなかに集中や拡大に向う傾向があることを知っていた（というよりは、そういう傾向をもつように自然を造った、と言った方がよいかもしれない）ということを示している。

ある生物学者の語った言葉が、大変印象的だった。卵が発生するとき、二細胞、四細胞、八細胞……と分割していく。分裂が済んで暫くは一つ一つの細胞は、胚全体のなかでそれが占めている場所に相応しい姿形を保っている。胚全体が発生初期には球形をしているので、それを構成する各細胞は、いびつになって集り合っていることになる。ところが、分裂期が訪れると、それぞれの細胞は、自分が胚全体を構成する一要素に過ぎないことを忘れたかのように、自ら球形になろうとする。隣り合った細胞からも別れて、独立の球形を保った上で、二分される。やがて新しい胚の形に馴染んで、またいびつになって行くのだ、とその生物学者は言われた。

生きものの不思議さに打たれると同時に、部分と全体との間の微妙な均衡を、まことに見事に感じとらせてくれる話である。先頃亡くなったケストラーなら、それがまさしく「全体子」（holon）だと叫ぶに違いない。

集中にせよ拡大にせよ、このような部分と全体の均衡が、さまざまなレヴェルで重層的に成立しているのが自然界であり、他方、そうした均衡は、物理的に厳密な因果性の世界よりははるかに緩かな「状況論理」とでも呼ぶべき関係のなかに支配されているために、

ときに、それが失われて、ある種の破局が現われる、ということもあり得るのであろう。

ところで、こうした自然の緩かな制御装置は、学問のような明確に人為的な構築物についても成り立っているように思われる。例えば、新しい学問領域の誕生という場面を考えてみよう。「新しい」という以上、その領域はこれまで存在していなかったのであるから、そこに参画しようとする人びとは、当然、本来別の領域に属しているはずである。そうしたさまざまな領域を出身母体としつつある新しい領域の創設を試みようとする人びとは、その段階では、必要以上に、創り出されようとしている領域が、自分の出身領域とは異っている、ということを意識し、外に向ってもそのことを強く主張しようとする傾向にある。

そうした意識とそうした主張がなければ、新しい領域は生れないし、また生れても存続し得ないというのは、確かなことだろう。けれども、時が経つにつれて、そのような傾向が緩徐になり、薄れて行くのも確かである。場合によっては、旧来の学問領域に、再び吸収されてしまったり、境界がぼやけてしまったりするものである。古来、学問というものも、そのような消長を繰り返してきた、と言うこともできる。

例えば、日本が本格的にヨーロッパの学問に接し、吸収しようとした十九世紀の、ヨーロッパの状況は、まさに、そうした分化意識の極めて強い時代であった。日本人が、ヨーロッパの学問（seiences）を、「分科の学問」と理解したのも、むべなるかな、である。

しかし、十九世紀も末になると、早くも、そうした分化が一体何であったか、という反省的な問が登場する。やがて科学哲学のような多くの学問領域（トランス・ディシプリナリ）を横断する発想が現われ、O・ノイラートを中心とする「統一科学運動」も生れてくる。

確かに、C・P・スノーも嘆いたように、今日、学問の、あるいはとりわけ自然科学内部の専門分化は著しく、厳しいタコツボ化にさらされている。それは恐らく、一種の必然のなせる業であろう。しかし、もう一方の必然も存在する。分化が起れば必ず統一の方向もあり得るからである。過度に楽観的である必要も可能性も、われわれは持ち合せないが、そうかと言って、専門分化をただ嘆いていれば済むというものでもあるまい。

むしろ、従前の学問領域に対して、その間隙を縫うような境界領域（Grenzgebiet）が、次々に分化独立しようとする傾向は、結局はやがて、ある程度の整理を受け、伝統的な既成領域に吸収されたり、立ち戻ったりすることがあったとしてさえ、学問の前線を活性化し、既成の体制に穴を穿ち、揺さぶりをかけるという意味で、歓迎すべきことである、という考え方も成り立つだろう。この意味では、「分化」は必ずしも否定すべきことではあるまい。

否定すべきなのは、確立された専門領域が固定化することである。聖書のバベルの塔の故事は、文字通りの意味で、固定化した専門領域に見事に当てはまる。

第一には、その領域に固有の仲間内言語（シャーゴン）の問題がある。別の機会にも書いたことだが、固定化した専門領域では、仲間内言語も固定化する。それは、仲間内に対しては、結束の象徴であり、外部に対しては差別と排他性の宣言である。

医師仲間の「隠語」（昔はドイツ語をもじった「ステる」とか「へモる」などが代表的だった）は、元来は、患者に聞かれない方がよいという理由にも支えられていたものだろうが、仲間内には親密な一体感を、外部には自己の領域の「秘教性」を誇示するための道具になっており、ヤクザの隠語とかわるところはない。一部の患者たちも、長い入院などを通じて、次第にそうした隠語を操ることができるようになると、自分も医学という秘教集団の仲間入りをしたように感じて、周囲からのヒンシュクを買ったりする。生半可な隠語をカウンターの向うで頻発して板前を苦笑させている寿司屋の客さながらである。

しかしこうした純然たる「隠語」の場合は、まだ罪は軽いと言えるかもしれない。大人気

ない、と笑って済ませられる側面もあるからだ。問題はむしろ、ある専門領域の用語そのものが、「隠語」であるという意識全くぬきに真面目に用いられ、しかも、それが完全な「隠語」として機能しているという事態、さらにそのことに気付かれていないという事態が起っていることである。

じっさいのところ、今日の自然科学の各専門領域で用いられている専門的言語系は、それ自体閉鎖的に完結しており、とくに、その傾向は、確立されたと自他ともに許す領域ほど激しい。それは、おいそれとその領域の専門家にはなれない、ということを内外に知らしめる働きをもち、その習得には、それ相応の時間と経済的投資とが必要であることを宣言している。

そしてこの点は、固定化した専門領域のもつ第二の問題に直ちに繋がる。というのも、ある領域の習得に相当の時間と経済的投資が要求される、ということは、とりも直さず、そこに、さまざまな社会経済的な「制度」が確立し、その制度にぶら下る人びとが数多く存在するようになることを意味しているからである。じっさい、今日の自然科学では、専門家になるためには、小学校から連綿と連る教育制度のなかで、相応の成績を上げなければならない。それは、科学者の「仲間内言語」の習得過程であり、できる限り、現在確立している（と思われている）言語系を忠実になぞれるように、専門家予備軍を「教育」するように造り上げられた能率的、効率的な制度なのである。

その頂点には、専門家中の専門家たちがいて（英語ではしばしば「上院」という言葉が使われるが、なるほど言い得て妙である）、そこまでの昇階を果そうとする人びとの言語指導をしている。言葉遣いが厳密に決められ、僅かな逸脱もチェックされる。発音練習があり、そっくりの口真似が要求される。下卑た言葉（日常的概念）は禁止され、高度に洗練された言葉（理論的概念）のみが使用を許される。その使用規定は、「上院」によって制定される。

しかも大切なのは、先にも書いた通り、現実に起っている状況が、ここで述べたような性格のものだ、ということに、当事者がほとんど気付いていないことである。むしろ、自分たちのやっていることは、いつどこで誰に、という制約なく、すべての人びとに普遍共通に成り立つ言語を操っている、という思い込みが、当のその仲間たちだけでなく、一般にも支配しているように思われる。それは自然言語に「普遍言語」などというものがないのと同様に、人工言語にもそんなものはあり得ないのだ。

「専門分化」ということに罪ありとすれば、恐らくこの点に如くものはあるまい。まさにそれはバベルの塔の具現にほかならないからだ。もちろんここにも、最初に述べたような、自然の機構は働く。ある専門領域が固定化し、過度に集中が始まれば、自ら、再び分化が起ろうとするだろう。その意味では、自然がつねに適切な規模の大きさと、適切な程度の密度とを保つ自律性を備えていることに期待をかけて、放って置くというのも一案かもしれない。

このことは、本稿では全く触れなかった学問以外の領域での拡大と集中の問題（例えば現代の都市問題）にもそっくり当てはまるのかもしれない。個人的には私も、どちらかというと「なるようになる」主義の方が好みに合う。

しかし、爆発的に大発生し、一挙にその大部分が潰滅してしまうトビバッタの例で言えば、やはりなるべくなら自分は「生き残る」側にいたい、という虫の良さもないわけではない。もしそうだとすれば、われわれは、人為に関する限りは、人為によって、何ごとによらず、適切な規模と密度とを保つような制御機構をもつべきである。それは、根本的には、固定化されない開かれた構造を実現することにある、という点は、学問にことよせて語った通りだが、むしろわれわれはかつてもっていたそうした構造を近代化とともに忘れ去ってきたとも言える。その意味で、文化人類学と歴史とは、共に「忘れられた」制御機構の回復に資するところがあると思われる。

個と全体

川喜田二郎

筑波大学教授／川喜田研究所
名誉顧問＝
加藤秀俊部会／松本重治部会

「お国のために生きよ」と強制された時代は、終戦と共に去った。代わって、「ふたりのために世界はあるの」という歌が、はやらされる時代がやってきた。実のところ、どちらも問題の核心に迫っていない。どこかに誇張や嘘がある。そして大多数の人たちは、それを知っている。たとえ頭の中では個が本物か全体が本物か、どちらかの意見を信奉しているとしても、心の奥底の深いところでは、どちらをも信じていないのである。

「世のため人のため」などというおためごかしの欺瞞性に、若い層はすっかり嫌気がさしている。そこでアテコスリに、「結局は自分のための慾と色が本音なのさ」といってみたくなる。無理もない。金権やドス黒い権力慾・支配慾といったものの実例を、あまりにも見せつけられるからだ。こういう反動的な気分をまた商売にして「必殺仕置人」的ムードを売る向きもある。

職場での鬱積する不満を晴らすものに赤提灯がある。赤提灯の飲み屋を政府が取り締ったら、日本には忽ち革命がおこるだろうと語った人がいる。私もそう思う。革命を恐れる体制派たるもの、必殺仕置人的興業や赤提灯を、むしろ奨励すべきであろう。

しかもなお今日、「会社のためにおれがあるのか、おれのため会社があるのか？」と、本気で悩むビジネスマンは、意外に多いのだ。実は正解は、「明日の昼までに課長にこういう書類を作って提出しなければならない」という点にあるのだ。私は冗談めいてこのようにからかったことがある。しかしこれは、冗談に托して、かなり本音のことをいったつもりである。

問題のひとつの本質は次の点にあると思う。つまり、「会社のためか、自分のためか」というのは、静止的で概念的な図式にすぎないのである。それは「全が先か個が先か」というのと同じであり、また「ＡかＢか」という分析知の二値論理にすぎないのである。こういう生活価値観をさも高級なもののように撒き散らしたところに、デカルト的生活感情の論理の陥穽があり、その欺瞞性がある。

ほんとうに生きるということの実体は、こういう概念的図式の中にありはしない。それは独自な「今」、独自な「ここ」で、独自に「しかるべくふるまう」ことの中にこそある。つまり一期一会の生きざまの中にこそあるのだと思う。こういう独自性という実体があった上で概念的図式を道具として使うというのなら話は判る。しかし当今は、この点で主客転倒が多すぎるのだ。そこに空しさのひとつの根源がある。

さて私は自分の仕事のため、ＫＪ法という方法を創りだした。これは情報を定性的データとしてラベルに書きだすところから始まる。そしてそれらをまとめると全体としての判断に到達できる。つまり個としてのラベルが集まり、全としての作品ができるのである。

この作業の本質は、渾沌をして語らしめておのずからなる秩序に到達する点にある。何らかの既成概念や希望的観測にあてはめてまとめたのでは、完全な失敗となる。

この創造的作業を通じて、ＫＪ法の実践者が常に痛感する一事がある。それは、個々のラベルが先にあるのでもなく、まとまった全体が先にあるのでもないということである。第一、ラベルに取材するためには、自分たちの問題意識といった、何らかの全がないと始まらない。しかしまた、個々のラベルがないと、全体は生まれないのだ。西田哲学流にいうと、「個即全、全即個」にほかならない。

これは単に全体と個との調和が大切だといったことではすまないのである。時には個が先行し、時には全が先行する。時には個と全が同時に見合わされる。個と全とは、半面であくまで葛藤しつつ、半面ではあくまで協調的となる。そしてこの作業全体は静止的でなく動的である。作業する人は、ウンウンいって生みの苦しみと喜びを得る。

つまりは創造の中においてのみ、個と全とは調和を得るのである。

特集対談

人間はそれにどれだけ適応できるか

奈良本辰也 歴史家
河合雅雄 京都大学霊長類研究所教授

人間の適応力が失われる文明の爛熟

河合　私ども、生物学の立場では、進化、つまり、何千万年、何億年という時間の流れの中での生命の環境に対する適応を考えるわけです。奈良本さんは、現在を中心として過去と未来、つまり人間の歴史の中の適応の問題……。この辺をうまく噛み合わせて話を進めてみたいんですが。

奈良本　そうですね。たとえば文明の進歩を考えてみると、結局、文明がある程度の爛熟期に達すると人間が駄目になってしまう、といえるのではないでしょうか。ある意味では適応能力を失ってしまうんです。ですから、もっと野蛮な血、自然的なバイタリティといったものが甦ってこないと滅びていく。古代ローマ帝国、ルイ王朝、徳川幕府いずれもそうです。このバイタリティを失うということでは、現代の子供たちがそうなんですね。先日テレビを見ていたんですが木登りが出来ない。ジャンプも懸垂もようやらん。僕らの子供のころより、知識的にはたしかに秀れているが、しかし肉体的には全然駄目になっている。

文明の爛熟期というのは、普段の状態が前提とされ、その上に安心して乗っているんです。しかし、天変地異は必ず来るということを考えなければいけませんよね。文明の爛熟により人間が腐敗し、天変地異に耐えられずにその文明が滅びていくというのが、これまでの歴史ではないかと私は思っているんです。

河合　たしかに現在の子供の非力化と文明の爛熟とは共通点がある。それは危険とか危機に対する認識と対処方法の欠如なんです。今の子供は過保護だといわれますが、とにかく母親が頑張っている。母親というのは、結局自分の子供を出来るだけ安全に、健康に、また他のどの子よりも優れてと、ものすごく欲張ったことを考えますから、危険を排除する性向が非常に強い。ナイフは危険だからと鉛筆も削らさないし、川で泳ぐのは危険だからと、いまではどんな田舎にもプールがある。しかしいま一番の問題は、危険をどう排除するかではなく、危険にどう対処するかということですね。文明の爛熟にもそうした問題があると思うんです。爛熟した文明というのは非常に完結度が高く、その中におれば、たし

かに安全ですし、何事も充足されて非常に高度な文化を享受できますが、そこへ全然知らない外圧がガッと来ると、どう対処するか判らないで、一気に崩壊する恐れがあるような気がします。

奈良本　たとえば文化・文政という江戸時代一番の爛熟期の後、天候異変が続き天保の大飢饉があり、大塩平八郎が乱を起こすまでになりますが、天候異変は何も天保に限ったことではない。しかし、社会の上昇期には問題にならないで、一番極限に達したときに問題になってくる。つまりそれは天変地異に対応する力を、社会あるいは人間が失っているからではないでしょうか。

環境変化に対応した哺乳類の繁栄

河合　奈良本さんの本を拝見してますと、そうした極限に追い詰められたときに、それをはね返す力を持った連中が、中央の江戸ではなく、長州、薩摩といった地方から出てくるところが面白いですね。しかも、いきなり天才的な人間がポンと出てくるのではなく、出てくる母体が徐々に作られてくるところがとても大事だと思うんですが。

奈良本　もうちょっと単純なことを言いますと、江戸の旗本というのは畠も耕さない、何もしない。ところが長州薩摩の連中は半分百姓ですよ。鍬鎌持って野良へ出て働いている。ところが旗本などは言ってみれば、近頃のひ弱な子供みたいなもので木登りもできなければ、ジャンプもできん。刀を差していばっているだけ……。地方の武士は皆働いてますよね。だからバイタリティを持っている。それが自然に適応するひとつの力だったんじゃないだろうか。

河合　それから、危機を乗り越えるための有用な人材の発掘と登用がやはり必要になる。その点やはり爛熟すると、ある種の体制化が進んでしまって、上のものが何かやればいいだろうという気配があるんですね。

奈良本　そうなんです。西郷隆盛なども第一次長州征伐前は、徳川幕府がたちなおればそれで日本の国は立派にいくと思っていた。それで勝海舟に、幕府中心の日本の再建案を述べるんですが、勝は幕府はもう駄目だと言う。結局、その体質が腐っていて、有用な人材は全部足を引っ張られて何も出来ないと切歯扼腕しています。おっしゃるように、組織が優先して人材登用が全然出来ない。

河合　大きな進化の歴史をみても似たものがあると思うんです。たとえば数億年前、両棲類の時代、爬虫類の時代ときて、体長三十メートル、重さ百トンといった巨大爬虫類の黄金時代があった。当時哺乳類は出始めでネズミぐらいの大きさのがコチョコチョしてただけです。まさに爬虫類の爛熟期。彼らがなぜ滅びたのかはいろいろ説がありますが、ひとつは、あまりにも巨大化して環境の変化に適応できなかったことがある。哺乳類は弱小ではあったが、非常に強い適応力を持っていて新しい環境に対処していった。マクロに見た生物の歴史というのは、人間の歴史と何か似てますね。

どこか病的でイラだたしい現代文明

奈良本　もう一つ、文明というのは自然を征服して、自然から離れていくことなんでしょうが、しかしそうなったと思った途端に、自然からものすごいしっぺ返しを喰う。天変地異などは自然のしっぺ返しですね。

河合　天変地異を自分で作り出す能力を人間が持ってしまったことが、すごく大きな問題ですね。一般に生物の場合は、厳然としてある自然環境に自分を適応させていくんですが、人間の場合は、社会環境、文化環境といった自分の作り出した環境に自分を適応させていくという作業をずっと繰り返してきているんだが、それが、うまくいかなくなってきたらしい。ですからこれまでは、進歩とは良いものだ、物質的に豊かになればなるほど幸福になるものだとして人類は進んできましたが、もう人間の持っている適応能力としては限界に近いのではないか。それを越えた何か危険な所に足を突き込みかけている。この辺で、本当の進歩とか幸福について本気に考える必要がある。

奈良本　本当にそうですね。人類驕るなかれと僕は思うんです。たとえば現在、新幹線で東京、大阪を三時間ですが、これを一時間にしようと考えている。一体その必要があるのだろうか……。三時間でも結構、四時間でもいい。これで十分用は達せられる。一時間になってごらんなさい。我々は忙しくてつぶされてしまいます。結局自分の生命を削って、時間を短縮したがっているという気がするんです。

河合　慣れというのは恐しいもので、日本にいると忙しい忙しいと言いながらも、結構その忙しさを楽しんだりしている。私は毎年アフリカに出かけますが、大ジャングルの中で現地人と暮してますと、彼らは実に悠久の時の中に生きていると感じます。あまり働きませんし、暇があったらボケッとしているかおしゃべりをしている。日本に帰ってくるた

河合雅雄

びに、何とせせこましいストレスの多いところに生きているのかと思い、自分はもっと優雅に暮してやろうと決心するんですが、三日と持ちませんね。何かすごい歯車が動いていて、それに組み込まれてしまう。もうあきらめました。どうにもならない。しかし、これだけ豊かで、めちゃめちゃに過剰な情報があり、欲しいものは大方手に入るような世の中ですが、このガサガサしたいらだたしさというのはやはり本物ではない、どこか病的なものを感じます。

奈良本　今日この席へ来るのに車で一時間掛りましたよ。普通なら十分間なんです。京都の町ではもう車は限界ですね。我々は歩くよりも速くいくために車を作ったが、これでは歩いた方が速い。これは大変な時代です。一つの病気が出てきている。

文明相手の精神活動は無限ではない

河合　私たちは戦前からの流れを知ってますから、文明のスピードとそれによる心の侵食というのが判るんですが、いまの子供たちにはそれが全然判らない。現状が当たり前なんです。また、ほとんど物相手に育っていて対人関係はどこかに消えていく。そこで不適応がいっぱい起こっていると思うんです……。よく精神活動は無限であると言われますね。芸術とか文学などの世界ではそうかもしれないが、文明というものを相手にして無限にうまく対応できるかというと、これは難しい。むしろ創り出したものが逆に人間を使うことになっている。そのギャップが登校拒否とか自閉症とかになって現れている。あんなの戦前はあまりなかった。学校嫌いというのは沢山おりましたが（笑い）。

奈良本　昔の子供の学校の嫌い方は、いまのと違いますね。今の教育システムでは、ついて行けない人間を、駄目な人間であるとか劣等生であるからとか合理化してしまい。次から次へと無数に駄目人間を作り出していく。

河合　合理的でないものは駄目だという考え方がものすごく強いですね。昔はあまり合理的な奴は〝屁理屈ばかり言う〟とか嫌われたところがあった。価値の多様化とかいわれますが、人間判定の基準は非常に一元化している。私は大正で戦中派ですから、戦争という一種の罪業を背負って一時は萎縮してましたが、この辺で大正が本気で頑張らないといかんという気がする（笑い）。

奈良本　戦後の日本人というのは史上最低じゃないんでしょうか（笑い）。明治には新渡戸稲造、内村鑑三といった立派な日本人がいたし、外国人の書いた江戸時代の日本人も非常に立派です。礼儀正しく清潔で、決して嘘は言わず、自分の言った事には責任を持つとはっきり書いてある。現在の日本は世界で有数の文明国だが、現在の日本人はとなると……。結局、いま我々が享受しつつある文明というのが、何かの毒を持っているんじゃないだろうか。

河合　本当に毒を流しているという気がする。私は自然科学をやっているので、ある意味では自然の恐しさというか、人間ではどうにもならない巨大さを痛感するのですが、反面、人間ほど驕った動物はいないことも感ずるわけです。何でも出来ると思っているのが一番の迷妄ですよ。何でも出来、何でもやりたいと……。しかし、それがもたらす結果については全然わかっていない。

奈良本　そうですね。自然を完全に征服したような気持になって、どんどん自分を駄目にしている。たとえば電卓なんか大変便利なものだけれども、いまの状態で普及していったら計算能力というのはゼロになってしまう。先日、家に銀行から若い人が来たんですが、電卓を忘れたとウロウロしている。簡単な足し算、引き算ですから紙と鉛筆があれば出来るのに、自分の計算能力に不信感を持ってしまっている。

不可知論の世界に入りつつある人間

河合　いま手足の骨を折る子がすごく多くて、カルシウム不足とかの説がある。しかしアフリカの飢餓状態の子供でも、木から落ちるとか飛び下りて骨を折ることはまず無い。これは栄養の問題ではないんです。私でも机から足を踏み外せば足を折る可能性はあるが、

奈良本辰也

飛び下りようと身構えれば鴨居からでもまず大丈夫です。次に来る危険に対して筋肉、神経系が全部ハッと身構える。これがいまの子供には無いんです。だから低い所からでも踏み外して骨を折る。

奈良本　近頃は自分の子供が溝に落ちた、溜池に落ちたといって訴訟を起こしますよね。つまり自分の責任というのが全部なくなって相手に押しつける。それよりもまず、溜池に落ちても溺れないよう訓練するとか、あるいは溝に落ちないような運動神経を持たせるとか……。僕らは子供のときに身につけられましたよね。

河合　私、教育の根本は子供に生き抜く力を与えることだと思うんです。その点から見ると、アフリカの未開社会の方がよほど優れている。日本など思想的には随分個人主義が進んでますが、個の確立がむしろ肉体の方から崩れかかっている面がありますね。

奈良本　ところで自然の産物である人間が、どこまで自然から離れられるんでしょうね。

河合　生物学者として考えねばならない問題なんですが、本当には判りませんね。ただ、判らないからこそ思うんですが、やはり進歩のスピードを落とすしかないと思うんです。そこで一遍じっくりと、何が起こっているかを見きわめなければいけない。やはり一番の問題は、予測が非常に難しい時代になったにもかかわらず、本当に総合的に考え得る人なり、そうした機構なりが、非常に脆弱であることだと思います。

奈良本　つまり言ってしまえば、今や不可知論の世界じゃないかと思っているんですがね。

河合　そうなんです。どうやら人間は誰も知り得ない世界を作りかけているという認識が非常に大事だと思います。文明の産物を急に与えたら不適応が起こるというのは、先進国から途上国へという図式においてはいろいろな例からも理解でき予測できますが、我々先進国の中に何が起こっているかは予測できない。昔は神が見ていたかもしれないが、今や神さん不在ですからね（笑い）。だから奈良本さんの文明の話のように、先進国は爛熟して崩壊し、途上国からすごい力が出てくるかもしれない。

地方の時代——価値転換の新しい波

奈良本　そういうことですよ。本当にこのままでは自然に対する適応性はなくなってしまう。これまでは山を崩して平地を作ることなど無かった。それがいまでは山を崩し平地を作り、海をつぶして巨大な平野を作り出すことなどが平気で行なわれている。大変なことが可能になったんだが、そのために随分生態系をこわして、どうにも処置できないような現象を生んでいる。この辺で少し人間というのは醒めたらいいんじゃないかと僕は思う。

河合　日本のことを考えてみても、物質的な充足はほぼ満たされている。ですから、物質的な充足による精神的な満足があるならば、精神的にも不満は無いはずだが、これはどうも間違っていたらしい。物質文明というのは、何か精神に対する腐食作用を持ってますね。ですから本当の意味の心の豊かさみたいなものを取戻さなくてはいけない。

奈良本　もう少し、人間の自然に対する適応能力を回復しなければいかん。

河合　人間がどこまで適応能力を持っているか判らないんです。ですから疑わしき場合にはちょっと立ち止まれといいたいですね。人間が改造した自然、あるいは作り出した新しい文化環境が、今度は人間をやっつけにくるところは面白いですね。ところで、奈良本さんの説では、文明の爛熟期における一種の危機状況を乗り越えるために、たとえば明治維新あたりでは、地方から新しい力が出てきますが、現代という文明の爛熟期においてはどうなんでしょうか。

奈良本　まえにもいいましたように、現在は江戸時代の化政期によく似ている。中央に一級と称せられる連中、一番金儲けのうまい連中が集まって、地方にはそれまでの尺度では二流三流の人物しかいない。しかし、価値観の転換というのがここでも起こりはじめる。つまり、地方の時代というのは、これまで二、三流と目されていた人物が、本当は一流の人物であったとして登場してくる。この地方の時代というのはもう始まっていますよ。たと

えば合成洗剤を県条例で追放した滋賀県……。

河合　あそこには琵琶湖研究所という立派な生態学研究所が出来ましたね。

奈良本　政府だって合成洗剤の害は知っているんでしょうが、しかし規制できない。それをやる野蛮な力が地方にあったわけです。神戸なども、政府が空港を作らないなら自分のとこでやるとか言ってる。また宮崎には日本で一番美しい県を作った前の黒木知事がいる。あそこは花一杯で道そのものが公園ですよ。そうした例があちこちで出ている。いつまでも東京の真似をしているところは駄目だ。

不自然さに対応できる新システムを

河合　とにかく財政とかそうしたものばかりが表面に出過ぎる。金では片付けられないことがあるという認識が大切ですね。この考えは金の無い地方でこそ出てくるのかもしれない。巨大恐竜化した東京に対し、地方はものすごく適応的な小さな哺乳類になればいいんだ。

ところで今日は適応についての話なんですが、この適応不適応を超えた恐しい問題が起こっているんじゃないか……。いわゆる公害問題です。以前、人類遺伝学の専門家に聞いたんですが、いわゆる遺伝病というのは四百種類ほどあったそうですが、それが今は二千五、六百あるというんです。勿論、学問の進歩により発見されたものもありますが、環境汚染その他によって起こっているものもある。それを聞いて私はショックでした。たとえば私が変なものを食べて突然変異が起こっても大体は劣性ですから、私の子供は劣性の遺伝子を受けるだけで何も起こらない。しかし、劣性因子をもった者同士が合うと障害が起こる。つまり本格的な害となって問題化するのは五十年か百年後なんです。これは何よりも恐い。未開社会では、こうしたことは起こらない。先進国で起こるわけですから、百年後の先進国の人間は病気だけでもまいってしまう可能性がある。

奈良本　本当に我々はどんな影響を受けているか判らない——。今、ふと考えたんですが、寝たきり老人というのが増えましたね。江戸時代の歴史にはあまり出てこない。ひとつは長生きするようになったからだと思いますが、昔も長生きする人はいたが寝たきり老人にはなっていない。

河合　昔は生きるべき人が生きてきたが、今は生かされているんですよ。

奈良本　これは悲劇じゃないかと思うんだが……。

人間いかに死ぬべきかを考える時代

河合　人間というのは、もともと反自然的な存在だと思うんです。科学技術を手に入れた時から、突如として不自然さの世界に突入していった。未開社会では自然淘汰されて残った強い人間が子孫を残していくんですから、良いものだけが残る。現代の文明社会では、とにかく全部を生かす。このことが悪いと言ってるのではありません。そうした現実にどう対処するかを本気で考えんといかんということですね。自然的適応を破壊して、老人人口をものすごく増やしたんですから、これにどう適応していくかを考えなくてはいけないのだが、その辺が、どうもうまく出来てない。

奈良本　確かにそれを作り出しておいて自分では対処出来ず、人の責任だ、政府の責任だと言ってるんですから問題ですよ。

河合　だから個人個人は、私はこれだけ長生きしたんや、有難いことやと思ってくれんと困る（笑い）。変な言い方をすると、これまではいかに生くべきかばかりが問題になったが、これからはいかに死ぬべきかが、すごく大事になると思います。もう皆さん五十過ぎたら、すべての人がいかに死ぬべきかを考えて欲しいと思っているんです。

奈良本　私は毎朝、新聞の死亡欄に真っ先に目を通します。自分より若い奴が死ぬと、ちょっと惜しいと思う。大体八十から九十ぐらいで死ぬのが人間として幸福なんじゃないかなと思う。それまでは人に迷惑をかけまいというのが僕の考え方です。

河合　私なんか人に迷惑かけて長生きするのは耐えられない。たとえば、大変不穏当な言い方なんですが、自分で自分のいのちをしめくくることや安楽死などについても、本気で考えるべきじゃないかと思います。それが長生き時代に対する、個人個人の適応の仕方じゃないかと思う。

奈良本　人間というのは自然の一部なんだから、人間が作り出した文明に適応するのではなく、まずもっと根源的な自然に適応すべきです。自然を破壊しておいて、まともな生涯を終えようというのは、いささか不遜ではないでしょうか。

教育の塔

木田　宏
国立教育研究所所長＝大来佐武郎部会

神は万物を造り給うたが、その被造物の中で、人間のみは、自らを教育する能力という素晴しい素質を与えられた。この教育の力によって、僅か一万年そこそこの間に、人間はその能力の大幅な増幅を行い、この地上に次々と新たな物を作り出してきた。

わけても人々が、近代国家を形成するようになったとき、そこに近代教育制度という巨大な構築物を組み立て始めたことは注目される。創世紀の人々が、「町と塔を建てて、その頂きを天に届かせよう」（旧約聖書　創世記十一―四）としたごとく、社会的な教育の塔を高く築いて、人々を全体として、神に近づけようとしたのである。

ある国では、「邑に不学の戸なく、家に不学の人なからしめん事を期す」（一八七二年太政官布告）との大方針が立てられ、教育は急速な発展を遂げた。わけても第二次大戦後、国際連合に集った諸国の人々は、決意を新たに、世界人権宣言（一九四八年）、国際人権規約（一九六六年）を定め、それぞれ教育の塔の建設に励むことになった。

世界人権宣言には、「人間は生れながらにして自由であり、尊厳と権威について平等である」との大原則が掲げられ（同一条）、国際人権規約のうち、社会権規約と略称される「経済的、社会的及び文化的権利に関する国際規約」では、教育を「すべての者の権利」として位置づけ、「無償教育」を保証するとの方策が宣明された。

すなわち、義務的な初等教育がすべての者に無償であることのほか、様々な型態の中等教育も「無償教育の漸進的な導入により、……総ての者に対して機会が与えられるものとすること」、さらには高等教育まで、「特に無償教育の漸進的な導入により、……すべての者に対して均等に機会が与えられるものとする」と唱われたのである（社会権規約一三条）。

このように世界の人々は、自由・平等・無償の原則を宣言して、教育の塔の建設にとりかかっている。しかし、この教育の塔が天に届くことを危惧した神は、「能力に応じた教育」、「専門に分れた教育」の二原則を、そこに加えるよう指示されたものと見える。

能力に応じた教育のゆえに、高度の教育は、いつの間にか、能力に応じた長期の教育となり、低い教育に転化して行こうとしている。また専門分化が進むとともに、雑多な教育に分散して行きつつある。

さらに、能力の中味が、知的能力のみならず、経済的能力に拡がって行きつつあることも、明らかに認められるところである。教育の先進国をもって認ずるある国では、私学の占める比率が益々増加し、経済力のあるものほど、高等教育への進学率が高まっていると指摘されている。

さすがにこの国では、中等教育・高等教育における「無償教育の漸進的な導入」を約束することが憚られて、国際人権規約の批准に当っては、この部分に留保をつけ、例外的な国であることを明らかにしたが、国際的にみると、経済力に応じて、教育の格差は拡がりつつあるから、この方が神の計らいに沿っているのかもしれない。開発途上国に無償の教育協力を出し惜しむのも、能力に応じた教育の然らしむるところであろう。

専門分化という計らいも、中々の効果をあげている。専門分化した教育を受ければ受けるほど、人々はお互いに通じ合えなくなるという結果が目についてくるからである。人々もこのことに気付かないわけではない。識者は、教養教育や総合科目が重要であり、また国際理解教育を重視すべしと唱えている。しかし滔々として教育は、専門教育・職業教育に拡散し、また自国中心に進んで、人々の意思疎通は妨げられていくごとくである。

果して今日の人々は、この主の計らいをどのようにかわし、教育の塔を崩壊から救うことができるであろうか。

解体か分裂か

――精神＝身体と「バベルの塔」――

中井久夫
神戸大学医学部精神神経科教授

一、

精神といい、身体といっても、いずれも正体はきわめて保守的なものである。

「保守的」という意味は、同一性、恒常性保持のために全力を尽すという意味である。変化が生じるたびに、変化を打ち消す方向に全体が動く。

つまり「バベルの塔」化を大変嫌うのである。とくに身体が「バベルの塔」化すると、すみやかに身体の解体つまり死に行き着く。

身体のシナリオである例のDNAは、結晶ほど堅固であるばかりか、損傷が起こると修復酵素を作り出す。実にみごとなものである。修復酵素がなければどうなるか。色素性乾皮症という稀な病気がそれである。DNAの敵の一つは紫外線であるから、外光を避けとおさねばならない。それでも全く紫外線に当らないで済むわけにはいかないから、次第に皮膚のDNAは切断されて外見の変化も進む。癌に至る場合もある。私が医学生の時に最初に接した皮膚科患者がこれであった。ずい分むかしだが、以後あれほど悲惨な姿の患者をみたことがない。

顔は全く無くなっていた。かわりにミンチ肉がたっぷり顔に塗りつけられたといおうか。眼も鼻も口も耳介も、癌組織が破壊してしまったのだった。しかも悲惨さは外光にさらされない部分は全く健康だったことで極限に達する。

彼女――うら若い女性だった――の脳は全く健全だった。一寸見には分らないが、どこかが通じていて、そこから呼吸していた。その呼吸音のかすかな変化が、彼女の通信手段だった。亡くなる一ヵ月前の姿だった。亡くなった患者の顔は時々浮かんでくるが、この人だけは私にとって顔の無い患者なのである。

もっと局所的な「バベルの塔」化――ランダム化――はDNAに起こる変異、つまり、細胞レベルの突然変異である。ところが、われわれの身体にはさまざまな清掃機構（スウイーピング・メカニズム）があって、突然変異細胞をキャンセルしてしまう。有名なのは免疫であるが、そればかりではない。たとえば、小腸にはほとんど癌がない。それは小腸の内面は無数の細長い突起が一面に生えていて、柔かい人工芝生のようであるが、この突起の一本一本をみると、その表面の細胞は一ヵ所にとどまっていないで、全体が羊の群のように動いている。その方向は根元から先端へ、である。根元で細胞が湧いて次第に移動し、先端で千切れて捨てられる。先端に近いほど、細胞は「年を取って」いて、それだけ変異細胞も多いわけだが、少し待てば先端からポイである。

結局、われわれの身体には推定一日に百万個くらいの突然変異細胞が発生しているのに、臨床癌が生じるのは人生の後半の、それも全員ではない。これは清掃機構の威力を示すものである。むろん、突然変異細胞が全部癌になる能力を秘めているわけではない。また、そういう能力の細胞でも、能力を発揮せずにじっとしておればよいので、実際、肺癌は二十年くらいそういう状態にあるそうだし、前立腺は年配になると皆といってよい程、〝癌〟細胞が中に埋れているということである。そして、癌になった人でも、その血液をとると癌細胞がみつかることが多いが、計算すると転移になるのはそのごくごく一部である。あ

とは（多分）免疫機構が清掃してしまうのであるから、非常な徹底ぶりである。

もっとも、生体はどうでもいいことには手を抜いているらしく、生後、（特殊な場合を除くと）分裂しない脳神経細胞は、染色体数まで乱れているのがけっこうあるそうである。

こういう話を書いているときりがない。いかに生体が「バベルの塔」化を防ぐようになっているかは驚くほかはない。誰かが設計したとしか思えないという人が出てきてもふしぎではないが、何億年の自然淘汰にきたえぬかれるとこうなるのであろう、というのが今の大体の説明である。そうでなかったものは、単純に生き残れなかったのだ。

二、

もっともDNAより大きな「上のレベル」へいくと規則的に動く機械ではない。完全な規則性と完全な不規則性との中間が、生体の生体たるありようらしい。たえずゆらぎながらもとの形に戻るローソクの焔のようなゆらぎが、心臓の鼓動をはじめ、生体のいたるところに認められる。脳波も知的にすぐれた人ほど規則性から遠ざかる。しかし全くの不規則でもない。この辺は、応用数学でもこれから面白くなる分野らしい。生体は、いわば、カチカチに固くなって身構えているのではない。たえずしなやかに動きながら、周囲からそれこそデタラメにふり注ぐ偶発事の中を通り抜けていくもののようである。

三、

しかし、中枢神経系――というと脳と脊髄だが――は上のほうにいくほど、不確定性が増す。これは百年くらい前にジャクソンというイギリスの神経学者が言ったことだ。つまり、ヒザをハンマーで叩くとポンと大腿があがる。この辺りはボタンを押せばベルが鳴る、というほどの確定性を持っている。しかし、大脳皮質になるとハンマーで叩いても（あまり強く叩くと壊れるが）、叩かれた相手がどう判断しどう反応するかは、百人百様、一人でもその都度違うというわけだ。

しかし不確定性と「バベルの塔」性とは（意味が）全然違う。予測できないのであって、デタラメではないのである。天候は必ずしも予測できないが、デタラメではない。

面白いことに脳――というか精神というか――はデタラメを積極的に発生させることができて――できるだけならコンピューターでも可能だが――できる時ほど精神的に健康らしいのである。戦後日本で発展した、乱数発生テストというものがある。要するに乱数を百個唱えさせて解析するのだが、精神分裂病の急性期などは解析するまでもなく、一二三四五六七八九、一二三四五六七八九、と唱えたりするのだそうで、治るとともに数字のデタラメさが増してゆく。

これは別に病気に限らない。この面白いテストを精神医学の中で発展させたのは日大医学部だが、実はその中の有力な一人に探険家がいる。その川久保先生の話を伺ったことがあるが、ヒマラヤで（たしか、登頂するか否かで）隊が分裂しかかった時は、立派な山男が一二三四五六七八九、一二三……としか言えなくなったそうである。グリーンランドで食糧を持ってくる飛行機が雲のために基地を発見できなくて爆音がついに遠ざかった失望の時も同様だったそうである。デタラメを発生できるのは、まさに「余裕」の客観的指標といえるだろう。ちなみに、この時、総責任者の隊長だけは乱数を発生できたそうである。こういう時にも余裕を失わない人間が隊長に選ばれやすいということだけでなくて、責任感が人間をどれだけ強くひきしめるかということがこの話でも分るように私は感じる。

四、

では、人間の頭の中が「バベルの塔」化、つまり解体を起こすことはないのか。それはある。ひとつは老人性痴呆で、他からはよく分るし、CTスキャンという脳の断層撮影など客観的検査でも分るが、本人はあまり解体を意識しない。脳炎などでは他からも本人も分るが、程度はまちまちである。そこはアルコール酩酊と大変似ている。

急性精神病（とくに分裂症）ではどうか。すくなくとも初期においては、観念の乱舞がある。観念といっても、観念の形をはっきりとるまでに至っていない。化学でいうフリー

・ラディカルのようなものがひしめいている一方では、観念の意味が「せめて相対立する二つであってくれたら助かるのに」というくらい相矛盾する意味が、積みすぎた箱舟のように一つの観念の上に乗っかっている。観念か言葉か。観念と言う時も言葉と言う時もあるが、この場合、観念と言葉とは区別できないくらい近いらしい。そして、むろん、意識は明晰だが、自分で観念を呼び出したという能動感は全然なく、全く受動的に圧倒され、ふりまわされる。本人は、病気と思ってはいなくとも、事態を意識している。時には解体を意識する場合さえある。「バベルの塔」化にもっとも近い状態であろう。他人からみてもただごとでないと分るが、脳の変化を医学的に調べても今のところ（仮説はあるが）何も出てこない。

これは非常に恐ろしい体験であって、落ち着いている病者に思い出させ、話させてはいけない、再発しかねないから、といわれている。もっとも、この解体は、脳波やCTスキャンでは分らない微妙な——あるいはソフトな——解体であって、可逆性がある。急性期の直後のこともあるが、慢性状態になって何十年もしてからでも、大病や臨終の時にポンと戻ることがあって、皆を驚かせる。

五、

この解体を途中で食い止めるものに妄想がある。実際、患者は妄想を持つと急に楽になるのが目に見える。これが妄想の困ったところで、妄想を手放させるのは、溺れる者がすがっている板を放させるのにひとしい。妄想はかさぶたのように自然に要らなくなって落ちるのでなければならない。さもなくば妄想は精神の寄生体のように、いつまでも持主から離れない。

なぜ妄想に解体防止力があるかについては、急性分裂病状態に一見合理的な説明をつけ、自分でない誰かのせいにすることができるからだという説があるが、果してどうであろうか。しかし、これは経験的事実である。

私はこのことから、精神が一般に解体か分裂かの危機にさらされた時に、比較的ましなほうを選ぶために分裂の方向をとる、という精神の戦略がありはしないか、と思っている（といっても、さしあたり証明しようのないことだから手紙に書いたことがあるだけである）。

妄想を分裂という人はいないが、こういう系列を考えてみたらどうだろう。二重人格——憑依——分裂（狭義の）——妄想——固定観念。

二重人格では、二つとも〝頭の先から足の先まで揃った〟人格がある。交代したり共存したり人格AとBがお互いに相手を知らなかったり、一方だけ知っていたり色々だが、それはともかく、新しく現れた人格のほうが一般に派手で〝言いたいことを言う〟。

憑依となると、二重人格と違うところは、まず、もとの人間から離れないこと。離れたら憑依でなくなる。憑依している者は一般に〝頭の先から足の先まで揃って〟はいなくて、どこかぼやけたところがあり、一方、もとの人格との異質性が高い（悪魔、狐、サムライ、カエルなど）。一般に、ふだんは到底ゆるされないようなことを言う。たとえば「われは天理王命（てんりおうのみこと）なるぞ」と宣言して一家に自分を拝むことを要求した中農の嫁中山ミキ。しっかり者の嫁が苦労を重ねたあげく絶対絶命に至って憑依を起こし価値転倒が起こるというパターンは、踊る宗教の北村サヨで終ったようにみえるが、今日でも精神科医は多くの憑依を知っている。治療には憑依したもの、たとえば狐との駆け引きや取り引き（バーゲン）が必要で、憑依された人の要求がある程度生かされうる。

少しはしょるが、狭義の分裂は人格に裂け目が入るが、別人格にはならない。さらに妄想、固定観念となると、人格の断片、あるいはそれ以下になり、内容も小さくなる。頻度は逆で、固定観念がもっとも多く、二重人格は実に少ない。解体を伴わずに分裂することは、成功しにくい難しいことか、幸運な偶然なのであろう。

この点で参考になるのは、日本語人格とある外国語人格とに二重化した例である（貴重な症例と思うが、一応きれいに治ったので発表していない）。この人は交換学生として外国に一年留学し、そこで一個の人格として扱われたのに強烈な感銘を受けたらしい。日本語人格は人形のように従順な中学生のままであるが、外国語人格は成人であり、読書家で議論好き、自分のしたいことがはっきりしていた。外国語は（失礼ながらNHKの日本人講師にもみられる）和臭が全くなく、さらに各地の訛りをみごとに使い分けた。しかし危機はその時にはなかった。危機はある事情の下で緊張がつづいた後、日本語と外国語が混ざった時であった。それは意味の混乱したジャーゴンであり、この人をパニックに陥れ、すぐ私のつとめ先へ救援を求める電話をかけさせた。解体の危険があったが幸い（短期間、強力な薬物のたすけをかりて）回避され、人格の相互認知と統合がなされた。

この一例に私がバベルの塔の故事を思い出す。神は「解体」を狙ったらしいのだが、人間のことばは解体に至らず「分裂」して多くの言語になった。人格の「分裂」は必ずしも健康な現象ではないが、緊急避難的な意味はある。社会における「分裂」も、また、その意味合いはないだろうか。例えば、全体主義的国家はうまく分裂できず、一挙に解体しやすいのではあるまいか。

2001年文庫

『ポツダム会談』

チャールズ・ミー著
大前正臣訳
徳間書店

「戦中の歴史を読もう」と、私はかねがね唱えてきた。日本の、ではない。欧米や中ソの戦中史を読もう、というわけだ。

戦中の日本人は、外の世界に耳目をふさがれていた。諸外国の人びとが、戦争の行方や戦後の方針についての米英や米ソのからみを、毎日のニュースから会得していたのにくらべ戦後はじめて知らされた日本人との知識のギャップは大きかった。

談論風発のなかで、「あのときルーズベルトとスターリンは」とか「トルーマンがチャーチルに」とか聞かされ、ギャップを痛感させられた日本人は少くない。だが伝聞中心の知識には、それなりの欠陥もある。だからこそ、われわれ日本人は読書での知識武装をする必要がある、と私は思う。

戦中史とはいっても、カイロ会談、テヘラン会談のころのことは、読んでみてもかなり〝牧歌的〟に感ずる。なんといっても戦争最後の年、一九四五年（昭和二十年）二月のヤルタ会談、ルーズベルトの死、国連創設会議、原爆実験成功、ポツダム会談、ヒロシマ、ソ連参戦、ナガサキ、日本降伏にいたる半年間のドラマが最高だ。

とりわけ、何度読んでもあきないのはポツダムでの米ソの暗闘だ。戦後の冷戦はもうはじまっていた。それにくらべると、ソ連の対日参戦を求めたルーズベルトのヤルタでの〝大譲歩〟など、あまりの甘さにあきれかえらされる。やはりポツダムである。

ルーズベルトの没後、米国内ではすでに〝ヤルタ見直し論〟や〝ソ連参戦不用論〟が出はじめ、原爆実験成功への目鼻もつきだしていた。ヤルタ譲歩への蔣介石のしぶとい抵抗から、中ソ交渉も難航していた。チャーチルが〝鉄のカーテン〟との新語を用いた電報で、三国巨頭会談の早期再開を提唱した。

場所をベルリン郊外のポツダムに決めたのはスターリンだった。開催時期を担当したトルーマンは時間かせぎをした。原爆実験の七月十六日とポツダム会談の初日を彼はセットした。スターリンの到着は一日おくれ、会談開始は十七日夕となった。トルーマンは最初から〝原爆を武器に芝居〟ができたのである。

二十四日、トルーマンはさり気なく原爆の成功をスターリンにささやくが、彼は目立った反応を見せなかった。翌二十五日、軍首脳の一部に原爆不使用論が出たり、科学者のなかから対日警告後の使用をとの請願が出されていたけれども、トルーマンは無警告の対日投下を命じた。

翌二十六日、トルーマン、チャーチル、蔣介石がポツダム宣言に署名、ただちに放送。だが、①スターリンの同意、②天皇制保持の文言、③原爆対日使用の示唆は、トルーマンによって外された。これが日本の〝黙殺〟声明を呼び、ヒロシマ・ソ連参戦へと発展する。

また八月がくる。オーガスト・ジャーナリズムの季節の到来だ。刊行はすこし古いが、必読書のひとつだと思う。

中村貢＝朝日イブニングニュース社社長／茅誠司部会・大来佐武郎部会

2001年文庫

FORUM'S FORUM

フォーラムズ・インタビュー

FORUMS' FORUM

おじゃまします　中村　元さん

東方学院院長　東京大学名誉教授
松本重治部会

◆元旦にインドから書物小包が六十個届く

――中村先生のご蔵書の数はたいへんなものだと聞いておりますので、まず最初に、本にまつわるお話をうかがえますか。

「家内を呼んできましょうか。本のことでは恨みつらみがずいぶんあるはずですよ（笑い）。お正月、それも元旦にインドから書物小包が約六十個届いたことがあります」

――どうしてそんなことに……。

「私は外国へ行った時には、手当たり次第に本を買うんです。若い頃はお金のこともありますから、高いか安いかを考えながら買っていたんですが、この頃はそれではとても間に合わない。外国に一週間いますと、そのうち一、二日は本屋まわりをします。書店へ行って、私の好きそうな本を出せと言う。それで出してきた本を、パッパッと時間のあるかぎり買い続けるわけです。ことにインドでは、インド政府や団体からの招待の場合が多いので、私が本を買っている間も付き添ってくださる方がいる。でもその人は本に興味がないものですから、いかにも退屈そうな顔をするんですね。ですから、その人の顔色を見ながら、これでリミットだな、というところまで買い続ける。そして、それをまとめて日本に送るので、元旦に六十個……ということになってしまう」

――保管はどうなさっているんですか。

「この家には書庫が四つあるんです。ひとつは車庫の上、ひとつは書斎に接続して、これは木の書棚にただ入れてあるだけです。それから書架を動かせる移動式の書庫、これが体をぶつけるようにしてグーッとやらないとなかなか動かない。土台は特別にコンクリートで固めています。そしてもうひとつ、特別な記念品とか私の原稿をしまってある鉄筋コンクリート製の書庫」

――まるで図書館のようですね。

〈洛子夫人。長女純子さん。孫、朋和君、綾子ちゃんと〉

「特殊なものを集めていますから、大学の図書館にもないものがいろいろあります。これでも間に合わなくて、神田の寺小屋（東方研究会）にも置いてあります」

◆毎月のように海外での国際会議に出席

――本をご執筆になるほうはいかがですか。

「これはもう、続々と考えています。最近は岩波の『古典を読む』という叢書で、『往生要集』という本を出しました。それからやはり岩波から以前出した文庫本のやり直しをしています。それに、毎月の論文連載が四つもあるんですよ。やっぱり追われますね」

――自由な時間はどのように過ごされますか。

「いろいろな方面から雑誌や刊行物を送ってくださるので、そういうものを読むのが楽しみです。それから、機会があれば旅行をするのも楽しみですね。新しい人情や風俗に接して、いろいろ知ることもあれば感銘も受けますし、世間はひとつだとつくづく感じます」

――これからのご旅行の予定は……。

「八月から出かけます。八月はカナダ、九月がスウェーデン、十月が韓国、十一月がインド、年末から正月にかけてはホノルルへ、そのあとは東方学院の希望者とインドネシアのボロブドールへ、それからまた、カナダで講演という予定です」

――ほとんど毎月ですね。お仕事を兼ねていらっしゃるわけですか。

「だいたい国際会議です。もう歳ですので短期間しか行きませんが、発表したものがすべて活字になる、印刷して残してくれる、そういう会議にだけ出席するようにしています」

――全部で何冊くらいあるんでしょうか。

「さあ、何万冊か見当もつきませんね。本は重いから一階に置かざるを得ないので、人間は二階で暮らしているんですよ（笑い）」

◆毎月のように海外での国際会議に出席

――会議の準備だけでも大変ですね。

「仕事と遊びを兼ねて、楽しみながらやっています。ただ、勉強となるとなかなか大変で、この年になって〈日暮れて道遠し〉〈少年老い易く学成り難し〉といった昔の格言をひしひしと感じます」

――専門分野のご研究では、今後どのようなことをお考えですか。

「インド哲学や仏教思想でやり残したことがまだまだありますし、あるいは、やりかけていることをまとめるという仕事もしたいと思います。ただ、これからは、もっとグローバルにものを見るということが必要になってくる。論理や倫理の問題にしても、広くつき合わせてもう一度考え直し、新しい学問の分野に進めたらと思っています。老人が新しいことをやるというのは、年寄りの冷や水のような感もいたしますが（笑い）、これからもどんどんやろうと思っております」

◆講師と聴講者がいれば成り立つ東方学院

――最後に、先生が院長をなさっておられます東方学院についてうかがえますか。

「私が講義をしておりますのは、〈仏教入門〉と〈インドの思想と文化〉というごく一般的なものですが、講義をなさる方が三、四十人おりまして、サンスクリット語、パーリ語、チベット語、ベンガル語、ギリシャ語など、特殊な講義までいろいろございます」

――聴講なさる方も大変に幅広いと……。

「一応面接はしますが、どなたでもお迎えすることにしていますので、非常に年配の方から高校を出たばかりの方もいます。時にはお役人や大学の先生もみえることがあります。つまり、特殊な講義を聴きたいという方です。国立大学などですと制約がありまして、文部省が認めなければ講義ができないんですが、私どもの場合は、講義をしたいという先生と聴講したいという方がおられたら、それで講義が成り立つわけですから」

――大変に自由な組織ですね。

「そうです。場所も、先生の自宅でもどこでもいいんです。形式にこだわらず、人々が本当に希望している講義、研究者が本当に必要としているものを、と思っています」

図書館兼美術館といったようなご自宅を、隅々まで快くご案内くださった中村先生。研究者としての真摯な目差しと、家庭人としての暖かい微笑が、いつまでも印象に残りました。

〈松葉千恵美〉

オバン学生記

木元教子
放送キャスター
茅誠司部会

この三月で、二度めの学生生活も無事終りました。年齢など忘却の彼方。立教大学法学部も、このオバン学生には戸惑われることが多々おありだったと思いますが、私にとっては忙しくも、楽しい四年間でした。記憶力の減退を嘆きつつ、熟骨にムチ打って「お若いの」に負けじと張り切った、テスト、レポート、論文などなど。顔はにっこり笑ってと努めはいたしましたが、やはり正直なところ、かなりのシンドサではありました。

でも、この充足感のなんと素晴らしいこと。

気分転換法

本間長世
東京大学教養学部教授
松本重治部会

昨年の一月から東京大学教養学部長を勤めております。今年四月には駒場のキャンパスに大学院総合文化研究科が設立され、その委員長も兼ねております。家内から、あなたは一見学部長に向いているようで、本当はおよそ適していないのにと言われながら、同僚諸氏に支えられて今まで持ちこたえ、本年末に任期が満ちるのを待っているところです。

学部長になって初めて知るに至ったことが

ワープロ860

ロベール・J・バロン
上智大学比較文化学科教授
大来佐武郎部会

会社の重役の多くが、OA導入には賛成しておられるものの、自ら直接、コンピューターやワードプロセッサーを操作することには、あまり積極的ではないように見受けられます。何故でしょうか。その理由が分りました。

先月、IBM電動タイプライターから、ゼロックスのワードプロセッサー860へと、技術革新をはかりました。大したレベルアップです。万年筆からタイプライターへと移行した頃を、懐しく思い出します。

さてこの革新は——まだほんの片鱗に触れたに過ぎないのですが——いくつかの点で、私の新時代の幕開けといった感じです。まず第一の点。朝、ワープロ860にスイッチを入れると、一日中そのままにしておくわけですが、節約を旨とする古い型のヨーロッパ人の私には、860を離れる際に、スイッチを切らないで

それに、チョットばかりの自慢をお許しいただければ、このオバンは、法学部四八七人中三番という成績でございましたゾ。ただし、この好（？）成績をひっさげて息子の勤務している新聞社の入社試験を受けてみようか、と思いましたら、残念……年齢制限がございました。

今年度の四八七人の法学部卒業生のうち、私をふくめまして二三人がいわゆる社会人の立場から大学に入学したものであったわけですが、自己充実のためのこの四年間は、その人にとってかなりの成果をもたらしたものではあるにせよ、再び社会に復帰し就職する場合、ハンディとなる四年間であったのです。女子の場合、受験資格は殆どが三五歳まで。四年間学ぶうちに、その年齢を越えてしまう仲間もおり、企業側の条件の硬直性を、景気低迷の現実とともに痛感いたしました。

さて私の場合、まがりなりにも仕事を続けながらの勤労学生でありましたので、もとの職場（？）にそのまま復帰、四月の下旬にはフィリピンに行って参りました。中曽根首相ASEAN訪問のプレ取材ですが、『TVスクープ』という一時間番組のメインテーマとして、日本に観光ビザで入国しクラブやキャバレーで違法に働き、しかも売春行為まで行っている東南アジアの女達と、その裏で暗躍する日本の男達の実態をレポートいたしました。ここでは、女が生活のために収入を得る構造の旧態依然のゆがみを、はっきりと、私は見たのです。

いろいろとありますが、知らないで済むならその方がよかったと思うことばかりです。教養課程はどうあるべきか、外国語教育へのさまざまな期待や批判にどう対応すべきか、情報が氾濫する社会にあって、大学でなければ学べないものとして何を提供すべきかなどと考え出すと、むしろ憂鬱になるばかりです。

学部長の仕事から日米関係の問題やアメリカ研究への関心へと頭を切り換えるのは、なかなかに難しく、酒を飲み、雑誌を読み散らしてその夜は終りということになりがちですが、日米教育委員会（フルブライト）の委員としても、日米間の人物交流には、力を入れざるを得ませんし、学際的・総合的研究としてのアメリカ研究をどう発展させるかという課題も、つねに気になっています。東大出版会の雑誌『UP』に「アメリカ研究漫歩」と題する小文を連載しているのも、学際的研究の可能性を信じ続けたいという気持から発していることです。

学部長になってから、ぱったり外国に出なくなり、アメリカの友人からどうしたのかという手紙を貰ったりしました。気晴らしに夕食の食卓でだじゃれをとばすのですが、子供たちから全く評価されなくなりました。目下の楽しみは、おいしいものを食べることです。趣味が共通する友人たちと、世にはびこるいかがわしいもの、いやらしいもの、不愉快な文章、それを書く人などを痛罵することも、気分転換に大いに役立ちます。芝居が見られないのが残念でなりません。

立つことに抵抗があるのです。電気の無駄使いじゃないかと思ってしまいます。亡母は、私が洋服を擦り切らしてしまうと嘆いていました。洋服というものは、一生あるいはそれ以上に長持ちさせるものというのが母の哲学でした。こういう母に感化されて育った私ですから、この新しいシステムに順応するのは大変なことです。

第二に、量的には860にひけをとっても、質的には優位にあると信じていたのですが、少し怪しくなってきました。ものすごい記憶力です。とはいうものの"Garbage in, garbage out"で、どんなくだらないことでも憶えていて、全てスクリーンに写してきます。知能は記憶力ではないと、自分を慰めているところです。

第三の点。これは最も癪にさわることなのですが、860は、私の思うようにではなくて、860の思うようにしか動いてくれません。働いてもらうためにキーを押すわけですが、どれでもいいというわけではなく、正しいキーを押さなければなりません。ところが、私の選んだキーが、必ずしも正しいものであるとは限りません。時には〝エラー〟ですといい返されたり、時にはすねた子供のように、ウンともスンとも返事をしてくれなくなります。しかし、こういったこともあります。ある文章を削除したく、やっと憶えた正しいキーをいくつか押すと、親切にも問い返してくれるのです。〝Are you sure?（確かですか）〟と。

860が、従順かつ有能な部下になってくれる日の近いことを願いつつ、毎日奮戦中です。

日本一の男が去った

松本重治

(財)国際文化会館理事長＝松本重治部会

東畑さんと最初に会ったのはいつかさだかにはおぼえていない。だが新進のすばらしい農政学者だということは、蠟山政道さんから何べんも聞いたことがあって、そのことは知っていた。僕はパリとジュネーブに二年ほど留学していたんだが、タンゴが好きで、ダンスはタンゴばかりしていた。僕が留学から帰ってきた頃、あとから行かれた蠟山さんと、東畑さんも留学先のドイツでダンスしているんじゃないかとうわさして大笑いしたことを覚えている。そんなことがキッカケじゃないだろうか。

東畑さんも僕も大正デモクラシーの中で育って、お互いは知らなくとも、同じ吉野作造とか河上肇とかの本を読んだり、岩波哲学叢書を読んだりした仲間同士です。僕は、ウィスコンシン大学のコモンズを慕って夏期大学だけ教えを受けにいったが、東畑さんも翌年別の考え方からコモンズの所にいった。この話は、あとになって、学問が全然違う分野なのに同じようなことをやったもんだなあと話し合った。

東畑さんがボン大学に留学していたとき、毎週一回、木曜日午後のプロフェッサー・シュムペーターの面会時間をほとんど独占していたのは有名だが、シュムペーター教授が亡くなったあと奥さんが東畑さんに手紙をよこして、シュムペーター教授の最後の遺稿を送るから翻訳してみてくれないかと頼んできた。シュムペーター教授の東畑さんに対する信頼、

東畑さんの思い出

茅　誠司　東京大学名誉教授／日本学士院会員＝茅誠司部会

東畑さんは、私より半年若かった。しかし、それにも拘らず、私には普ゆる点で先輩としてお付き合いして頂いたように思う。亡くなられる丁度十日前に学士会月報の編集会議でお目にかかったが、その時は杖も持たずに来られたので、身体の工合がよくなられたと思って喜んだ位であった。反対に私は、二年ほど前に東畑さんから立派な杖を頂いて爾来、それを愛用させて頂いている。想い出は数々あって、何を書こうかと思って考えて見たが、その場面は実に多方面に渉っている。例えば農学部の教授室、農林省の農業水産技術会議や農業綜合研究所、学士会の理事会等々である。しかしその中で私が忘れられないものの一つに、文部省の国立教育研究所の評議会がある。東畑さんはその会長だった。この会長の司会は実に和やかな空気に包まれていた。時々実に面白い話が出てくる。例えば、この研究所に財団法人を作る必要ができたので、東畑さんは経団連に行ってこの財団の目的を説いたあと「皆さん、この財団に寄附して下さると、必ず極楽に行けますよ」とやったところ、当時の経団連会長の石坂泰三さんが即座に「東畑さん、僕の友達は皆そこには行けそうもないので、そんな淋しい所に私は行きたくないですよ」と応えたので、流石の東畑さんも参られたという。

この東畑さんの今のお宅は、もと石坂さんのお宅だった。この家を受け取りに東畑さんが行ってみると、襖や障子は張り替えてあり、畳は新くなり、また台所口の下水も修理されていて吃驚された。庭に石坂さんの記念の樹木があったのは予め断って持ち去られたが、それとは別の立派なのが植わっていたという。

この庭に東畑さん自慢の楷という木があったそうである。これは中国の孔子の墓の上に植わっている楷の実を蒔いて育てたもので、君の持っている楷とは生れが違うと言っておられたが、残念ながら、植木屋が移植する時のことでも、理事長としての僕の仕事を非常によく考えてくれてたいへん親身にしてくれた。いざというときの大きな問題は、必ず東畑さんにも相談してきた。お互いに信頼しあい、敬愛しあっていた。友達はたくさんいるけれど、あんな友達はもういない。

「この子教うべし」という気持ちが奥さんにもわかったんだろう。活字にして二千五百ページにもなる翻訳を、彼は手紙一本の依頼で引き受けた。彼の俠気がそこに現われている。六年か七年もの間、夜の会合から家に帰って、ちょっと翻訳するんだといっていたが、毎晩寝る前に四、五十分翻訳して、あの『経済分析の歴史』全七巻が出来上がった。一人ではとても出来ないような大著の翻訳をやり遂げた。シュムペーター教授に対する学恩の深さが窺われる。シュムペーター教授も、日本にあれだけの偉い弟子がいたことを地下で喜んでいたに違いない。

僕はこの十五年くらい、日本一の男は東畑精一だと言ってきた。学問はいうに及ばず、ユーモアがたっぷり、しかも隠れた親切がたくさんある人だ。人に親切にしてやって一言もいわない。彼の親切を受けた人から、僕らはあとで聞いてびっくりしている。ゆかしいといったらたとえようがない。国際文化会館

に枯らしてしまったとの事である。私の家のは朝比奈貞一さんが金沢文庫の庭にある楷の実から育てられたもので、まだ実はできない。

東畑さんの囲りは、どこでも、いつでも暖かい雰囲気がとり囲んでいた。そこでは、角突き合せる空気は消え失せるのが普通だった。この稀にみる友人を突然失って、私は茫然としている。

非凡な頭脳の友であった

有澤廣巳

東京大学名誉教授／㈳日本原子力産業会議会長／日本学士院院長＝茅誠司部会

東畑精一君、君はほんとうに文字通り、忽然として逝ってしまった。そのことを聞かされたとき、あまりに突然の悲報に私はアッと言ったまま声も出なかった。ひとり残された私の淋しさが君にわかってもらえるだろうか。孤影悄然と、ひとり荒野に立つ思いなのだ。

終戦とともに、君は一躍「時の人」となった。吉田総理が食糧危機打開の指導者として、君に白羽の矢をたてたからである。君は当時私に、この食糧危機はアメリカの食糧援助がなければ誰がやっても切り抜けられるものではないと語った。結局、君は辞退したが、それでも戦後の時代は君を一農業経済学者としてではなく、時代の警世家として求めてやまなかった。税制調査会会長、行政審議会委員などとして、君は時代の要請に応えた。君の識見と指導力は世の人々を納得させるに十分であった。

また君は稀に見る読書家であった。その読書は広く多方面に及んでいて、しばしばわれわれを驚かせた。終戦直後、われわれが戦後経済復興を論じあって議論が膠着したとき、君は突然、戦後経済の復興は人々の予想を超えてはるかに早いものだ。そうジョン・スチュアート・ミルは書いていると言った。その時、君はミルの書物の名前もあげた。それを私はもうすっかり忘れているが、君のことばは今も記憶に残っている。

中山君は君を評して機略縦横と言ったが、僕はむしろ君を非凡な頭脳の持ち主と言いたい。君はしばしば、われわれ凡庸の徒が思いつきもしない問題を提起したり、考えもしなかった着想を示された。機智に富み、巧まずしてユーモラスな君の談話に、聞く相手の者はみな、清新の気に打たれ、一種の刺激を与えられた。この四月の学士会理事会の食卓で、君は池田元首相との問答を話された。君が税制調査会の会長となったとき、首相が君に税のことがどの程度解っているか知らないがと言うと、君はすかさずあなたは税以外のことがどの程度解っているか知らないがとやりかえしたので、首相も二の句がつげなかったそうである。この話を聞いたときは、眼がまだよくならないのをこぼしてはいたが、君はたいへん元気で盛んに談笑されていた。それからわずか十日後五月六日、君は忽然として逝ってしまったのである。

三年前に中山君が亡くなったとき、二人で長生きしようと話し合ったことを忘れたわけではなかろう。僕は一人ぼっちになってしまった。

暖かい人生の師匠

向坊　隆

原子力委員会委員長代理／前東京大学総長＝21世紀フォーラム発起人

東畑先生の御高名については、かねてからよく承知していたが、専門が全く違うため、お目にかかる折もなく、親しく御教示を仰ぐ機会を得たのはほんの十年程前のことである。

その数年前に設立された財団法人政策科学研究所という小さなシンクタンクの理事長を先生がお引き受け下さり、私も非常勤の理事として時折りお目にかかり、御話を伺うことが出来ることになったのである。

先生の学問的・社会的な御業績の内容については私にはよく分からないが、人生勉強という意味では、いろいろと御教え頂いたことに深く感謝している。先生のお話を伺うと、他の先輩から与えられるのと違った、いわば、先哲の教えを受けている気持になった。

先生は恐らく御専門の学問の問題については、特に門下生に対しては厳しく教えられただろうということは、お話の端々にうかがわれた。また、先生は天下の御意見番といった役割も果しておられたように承っている。しかし、私共がお目にかかったのは、先生が始んどの公職を退かれ、半ば隠居されてからであったためであろう、先生の暖かい人生の師匠といった面にのみ接したことになると思う。

お酒があっても無くても先生の天下一品の座談の中から教えられるところも多かった。若い頃、どの位飲まれたのかは知らないが、酔わない程度にジンやマティーニをちびちびたしなまれながら、人を笑わせる話の中で、社会や人生への警句をとばされるのを伺うのは誠に楽しい勉強であった。

一昨年の正月、何組かの夫妻で川奈にお供した時、口が半分の先生の碁を観戦したり、私共が昼間ゴルフをしている間、レディス・プログラムの隊長と自ら称して得意になっておられたのを懐かしく思い出す。

先生の御冥福を心からお祈りする。

東畑精一先生を偲ぶ

大来佐武郎

内外政策研究会会長／外務省顧問／国際大学学長＝大来佐武郎部会

東畑精一先生との出会いは、終戦直後、外務省の調査局で戦後経済再建問題に取り組み、著名な経済学者をメンバーとする研究会の書記を務めて以来のことである。東畑先生に参加をお願いする橋渡しをしてくれたのは、亡くなった平貞蔵さんである。この会には大内兵衛、有澤廣巳、脇村義太郎、中山伊知郎、東畑精一、近藤康男その他、当時、新進気鋭の学者たちが戦争中の抑圧から解放されて、

この研究会で戦後再建問題を活発に討議した。

終戦間もない頃のこの会合で、東畑先生が遅れて出席し、「三木（清）が死んだよ」と、一言いわれたのは今だに印象に残っている。三木清さんは東畑先生の義弟で、自由な思想の持主であったために囚われの身となり、終戦後間もなく死亡したのである。

そのうちに、農林省が農業総合研究所を設立し、東畑先生が初代の所長に就任した。その時先生から、これからの農業にはエンジニアリングのわかる者が必要だ。私と亡くなった後藤誉之助君が技術の出身であったので、誰か世話をしてほしいというお話があった。そこで、後藤誉之助君が中学同窓の宍戸寛君（当時共同通信社勤務）を通じて、実弟の宍戸寿雄君を総合農研にお世話することになった。彼は、東畑先生のもとで十年間、農村工業の研究に従事した。その頃、後藤君といっしょに東畑先生に会い、宍戸君を経済企画庁のエコノミストとして来てほしいとお願いした。ところが先生は、それはもってのほかだ、逆に、君たちが総合農研に来たまえ、というお話で、両名しっぽを巻いて辞去したこともある。その後、先生のお許しも得て、宍戸君は企画庁のエコノミストの一人に加わった。

昭和三十四年に、経済企画庁の総合計画局長の時に長期展望委員会を設けて、二十年の長期展望作業を行うことになり、東畑先生がその委員長になられた。その後二十年たって、紀元二〇〇〇年までの長期展望作業が企画庁で行われ、私が委員長を務めたのも何かの因縁だと思う。

私の本籍が三重県で、東畑・中山両先生も三重県出身であり、この点からも親近感を覚えていた。三十数年に渡っていろいろな場面で先生から指導・啓発を受けてきた。まことに得がたい大先輩を失ったことは痛恨の限りである。

衣食足りて学問を忘る——東畑精一先生を悼む

村上兵衛　作家＝松本重治部会／国際交流研究部会

私は、東畑精一先生にご面識を得てから、わずか十一年に過ぎない。財団法人日本文化研究所の設立に当って、会長はやはり東畑先生でなければ……と、発起人の声がつよく、中山素平氏をつうじて、お願いした。

その直後、身内の御不幸があり、ご催促もできず、難渋した記憶が今も鮮かである。私は、これも今は亡き宮本常一さんと夕飯を食べながら、「宮本理事長で行きますか」と言ったら、「わしじゃ沢庵石にもならん」と答えられたのも、思い出である。

私には、東畑先生がいわば娘がわりに、私たちの小さな研究所のシャッポを引き受けて下さるだろう——と、不思議な予感があったが、果してその通りになった。そして東畑会長兼理事長の許に、私は専務理事兼編集長として十年つとめた。

発起人会のあと、東畑先生は、私に「財界の連中は、調子はいいが二、三年で忘れる。浮気をするからな」と、言われた。もちろん世には例外も少なくないが、これは至言であった。

研究所が発足した直後、わずか三人の所員の給料支払も怪しく、基本財産に手をつけるかどうか（これには所轄大臣の認可を要する）私が悩んでいると、珍しく先生がふらりと研究所に寄られた。その相談をすると、ジーっ

と耳を傾けられたあと、「うん、（黙って）食っちまえ」と、一言いわれた。責任はオレが引き受ける、との言外の言葉であった。

その〝苦境〟は、食わずに切り抜けたが、それから四、五年して、また珍しく――先生が研究所に現われたのは、二度きりであった――見えられた。そのころ研究所は、研究、出版の面でも、また経済的にも、どうやら軌道に乗りはじめていた。私はニコニコしながら、先生にご報告したにちがいない。報告を聞き終ると、先生はニコリともされず、「衣食足りて礼節を知る、という諺がある。が、衣食足りて学問を忘れる、ということもあるからな」と言われた。

私は、先生が、アジア経済研究所をはじめ、創業のときは、午後五時になると自分で電燈を消して廻り、「もったいない。君らは朝九時にちゃんと来い」と叱って、後進を育てられた話を思い出した。そして、図体が大きくなると、ロクな研究者が育たなくなる……と嘆いておられたことを、ハッと思い出した。

亡くなる二、三年前ごろからは、私はよく虎ノ門の財政研究所や御自宅に伺い、四方山話に時を過すことが多くなった。先生のお話には、いつも皮肉とユーモアがたっぷりとまじり、幼くして父を失った私は、いわば父親の味をたのしむように、勝手な私の経験談や拙い意見を聞いていただいた。

大宅壮一さん亡きあと、私にとっては、このように父とも思い、師とも思える人を、ついに喪ってしまった。悲しいけれど、私は写経の筆を運びながら、色即是空と自分に言いきかせることにしている。合掌。

自ら備わったチェアマンの風格

三枝佐枝子

評論家／商品科学研究所所長＝茅誠司部会

私がまだ『婦人公論』の駈け出し記者のころ、どういうめぐり合わせか、東畑精一先生に原稿をお願いにあがったことがあった。当時、先生はすでに高名な学者だったから、恐る恐る中野のお宅へ伺ったのだが、未熟な編集者のお願いに対して、快く引受けて下さって、本当に感激したことを覚えている。

婦人雑誌と先生とは余りかかわりが無さそうに思われるが、しかし今度調べてみて、終戦直後からしばらくの年月、たびたび登場して下さっていることを思い出した。中でも昭和二十六年に書いて下さった「乳と肉」という論文は思い出深いもので、それはお忙しい先生が、たしか関西にいかれる列車の中で執筆して下さったものであった。

仕事の上でも個人的にも、そう度々接触があったわけでもないのに、先生はよく私を覚えていて下さって、何かの折に私の名前をお出し下さったらしい。政府の税制調査会の委員にご推挙下さったのも、多分、その時会長であられた先生ご自身ではなかったかと思う。税調でも、またNHKの番組審議会の席上でもそうだが、先生が議長でいられると、いかめしい会も何となくなごやかな雰囲気になる。恐らく、おのずからそなわったチェアーマンとしての風格と同時に、先生のたくまざるユーモアが、会の空気をやわらげたものであろう。

税調委員として先輩だった江上フジさんは私に、「東畑先生はガール・フレンドが他にいないから、私たちを推薦なさるのよ。今度一度おごっていただきましょうよ」と、笑いながら話されたことがあった。「それはいい

ことね」と私は答えたが、その江上さんも亡く、東畑先生も亡くなられた今、私は先生にご馳走になるチャンスを永遠に失ってしまった。

お通夜の席には女性の方もたくさん見えておられたから、「自分たちだけ」などと考えたのは江上さんや私の思いあがりであっただろう。だが、接する女性に、自分こそ先生から特別に目をかけていただいていると信じこませるところに、先生の人間としての魅力があったにちがいない、と私は思う。

い出のおなつかしいことでございます。

思い出なつかしい

武原はん＝舞踊家

昭和四十八年のことでした。経済同友会の事で、帝国劇場で舞の会を開かせていただきました。その幕があく前に東畑先生が舞台へ立たれ、御あいさつを「美人のおはんさんにお世話になって」と渋いユーモアのある口調でなさいました。

その後パーティーでお目にかかると「おはんさんには頭があがらんナー」と笑っていられました。舞の会も時々御覧下さいました。楽屋へお花をとどけて下さいましたのも、思

東畑精一先生を偲ぶ

加藤秀俊　学習院大学法学部教授＝加藤秀俊部会

東畑先生にはじめておめにかかったのがいつのことであったか、の記憶はさだかでない。しかし、定期的にご教示をいただくようになったのは、東レ科学振興財団の主催する「人類と環境」研究会がはじまってからであった。これは、東レの会長であられた故田代茂樹氏が、公害問題をはじめ、産業と社会との接点にある諸問題についての研究を援助されることになり、東畑先生がいわばその座長役をつとめられる、という、たいへん意義深い研究会。若輩のわたしは、この研究会の秘書役のような役まわりで碩学たちのお話をうかがう機会にめぐまれたのである。

東畑先生は、あれだけ深い学識と、政府諸機関をはじめとする諸団体へのひろい人脈のなかで重要な位置を占めておられたにもかかわらず、研究会の運営はたいへんくだけた調子で、失礼ないい方かもしれないが、小さな村の村長さんが村の寄りあいをまとめてゆくような感じであった。ユーモアもたっぷりだし、ときどき辛辣な、そして適切な批評もなさる。だから、この研究会はじつにたのしく、みのりゆたかなものだった。その記憶はいまも鮮明にわたしの心に残っている。

小松左京さんとわたしがきき手になって、「碩学にきく」というシリーズが講談社から出版されることになったときにも、東畑先生にご登場ねがった。小松さんのような博覧強記の人といっしょだから、わたしは安心してたのしくお話をうかがったのだが、ここでも先生はお得意のおとぼけ作戦で、わたしたちは煙に巻かれてしまった。ほんとうに、すばらしい先生であった。つたない著書をお送りするたびに、ハガキをいただいた。わたしのような人間にまで、こんなに心をつかっていただいたことも、わたしの人生のなかで永遠に忘れえぬことなのである。

大きな翼

笠井章弘

(財)政策科学研究所理事長＝21世紀フォーラム事務局長

東畑先生には、政策科学研究所の理事長として五年に亘ってご指導を頂いた。ご就任のお願いに上ったとき、「僕は何もしないよ、君が自由にやったらいい」の一言であった。種々とご質問を想定して解答を準備していった小生は唖然として、正に一言もなかった。

ご就任後しばらくの間、先生の教え子の方々に小生はおこごとをしばしば頂いた。というのは、功成り名遂げた大先生に、吹けば飛ぶような小さな研究所の理事長をお願いするとは、お前がいけない。もし万一のことがあったらどうするのか、という叱責であった。

先生との最初の出会いは、昭和二十一年のことであった。一橋大学へ先生が講師におみえになったときである。先生の秘書の女性が、笠井はどんな学生であったか、と問うたのに対して、先生は彼は昼間はおとなしい学生だったが、夜はわたしをこき使った悪いヤツだといわれたそうだ。その頃小生がアルバイトである出版社の編集長をしており、先生に編集顧問をお願いしていたからである。

政府の委員会や民間の研究会の委員にご推薦頂いたことがたびたびあったが、決してご自分が推薦したとはおっしゃらなかった。後日判明してお礼に伺うと、「知らんよ」ととぼけておられた。そのお陰で貴重な人脈をご紹介頂いたわけである。この21世紀フォーラムのメンバーも勿論その例外ではない。

先生の理事長ご就任の披露パーティーのことであった。先生が君は何ドシか、と問われた。イノシシですと答えると、そばにおられた当時財務委員長の故・麻生多賀吉氏が、僕もそうだ（勿論一廻り上）といわれた。先生はそうか、君たち二人がイノシシだと、この研究所はどこへ飛んでいくかわからないぞ、とからかわれた。しかし、しばらくにやにやしてわれわれ二人をからかっておられた先生が、実は僕もそうだ（勿論二廻り上）といわれたとき、周囲の人びとを含めてどっと笑いの渦にまき込まれた。余人にかえ難きこのユーモアは忘れられない。

何もしないよ、といいながら、大きな翼の下に永い間温くご配慮頂いたことを、心から感謝致しております。

〈順不同〉

21世紀フォーラム／部会メンバー

FORUM'S FORUM

発起人

内田　忠夫　東京大学教養学部教授
加藤　秀俊　学習院大学法学部教授
加藤　芳郎　漫画家　漫画家協会理事長
茅　誠司　東京大学名誉教授　日本学士院会員
小松　左京　作家
東畑　精一　（故人）
中山伊知郎　（故人）
松本　重治　（財）国際文化会館理事長
向坊　隆　原子力委員会委員長代理　前東京大学総長

加藤秀俊部会

テーマ＝日本の村の将来

加藤　秀俊　学習院大学法学部教授
川喜田二郎　筑波大学教授　川喜田研究所名誉顧問
神崎　宣武　近畿日本ツーリスト（株）日本観光文化研究所事務局長
佐々木高明　国立民族学博物館教授
舛田　忠雄　山形大学教授
宮田　登　筑波大学教授
宮本　千晴　俐砂漠に緑を
米山　俊直　京都大学教養学部教授

加藤芳郎部会

テーマ＝日本のサーバイバル

加藤　芳郎　漫画家　漫画家協会理事長
青空うれし　テレビタレント
青空はるお　テレビタレント
天地　総子　女優　歌手
大山のぶ代　俳優
大和田　獏　俳優
岡江久美子　俳優
加治　章　NHKアナウンサー
川野　一宇　NHKアナウンサー
久米　昭二　NHKディレクター
黒川　和哉　NHKディレクター
小島　功　漫画家
砂川　啓介　俳優
鈴木　義司　漫画家　漫画集団所属
檀　ふみ　俳優
坪内ミキ子　俳優
冨田　純孝　NHKディレクター
中田　喜子　俳優
蕃目　良　俳優
松平　定知　NHKアナウンサー
水沢　アキ　俳優
三橋　達也　俳優
ロミ　山田　歌手　俳優
渡辺　文雄　俳優

茅　誠司部会

テーマ＝明日のエネルギー

茅　誠司　東京大学名誉教授　日本学士院会員
有澤　廣巳　東京大学名誉教授　（社）日本原子力産業会議会長　日本学士院院長
生田　豊朗　（財）日本エネルギー経済研究所理事長
稲葉　秀三　（財）産業研究所理事長　経済評論家
内田　忠夫　東京大学教養学部教授
大島　恵一　（財）工業開発研究所副理事長
岡村　和夫　NHK解説委員
尾関　通允　著述業　自由学園講師
金森　久雄　（社）日本経済研究センター理事長
木元　教子　放送キャスター
五代利矢子　評論家
斎藤　志郎　日本経済新聞社論説委員
三枝佐枝子　評論家　商品科学研究所所長
高原須美子　評論家
富舘　孝夫　（財）日本エネルギー経済研究所研究部長
中村　貢　朝日イブニングニュース社代表取締役社長
永井陽之助　東京工業大学教授
橋口　收　全国銀行協会連合会特別顧問
深海　博明　慶応義塾大学経済学部教授
伏見　康治　名古屋大学・大阪大学名誉教授
松根　宗一　大同特殊鋼相談役　（社）経済団体連合会常任理事
村田　浩　日本原子力研究所顧問

小松左京部会

テーマ＝大正文化研究

小松　左京　作家
河合　秀和　学習院大学法学部教授
中村　隆英　東京大学教養学部教授

大来佐武郎部会

テーマ＝世界の中の日本

大来佐武郎　内外政策研究会会長　外務省顧問　国際大学学長
江藤　淳　評論家　東京工業大学工学部教授
河合　三良　（財）国際開発センター理事長
北原　秀雄　前駐仏大使　（株）西武百貨店顧問
木田　宏　国立教育研究所所長
小林陽太郎　富士ゼロックス（株）社長
篠原三代平　成蹊大学経済学部教授
滝田　実　アジア社会問題研究所理事長
堤　清二　（株）西武百貨店会長　（株）西友社長
中根　千枝　東京大学教授　国際人類学民族学会副会長
中村　貢　朝日イブニングニュース社代表取締役社長
林　雄二郎　（財）未来工学研究所副理事長　（財）トヨタ財団専務理事
松山　幸雄　朝日新聞社論説委員
ロベール・J・バロン　上智大学比較文化学科教授

松本重治部会

テーマ＝二十一世紀における日本人の生き方

松本　重治　（財）国際文化会館理事長
川喜田二郎　筑波大学教授　川喜田研究所名誉顧問
永井　道雄　朝日新聞社客員論説委員
中村　元　東方学院院長　東京大学名誉教授
本間　長世　東京大学教養学部教授
前田　陽一　（財）国際文化会館専務理事　東京大学名誉教授
槇　文彦　東京大学工学部教授
武者小路公秀　国連大学副学長
村上　兵衛　作家
柳瀬　睦男　上智大学学長

国際交流研究部会

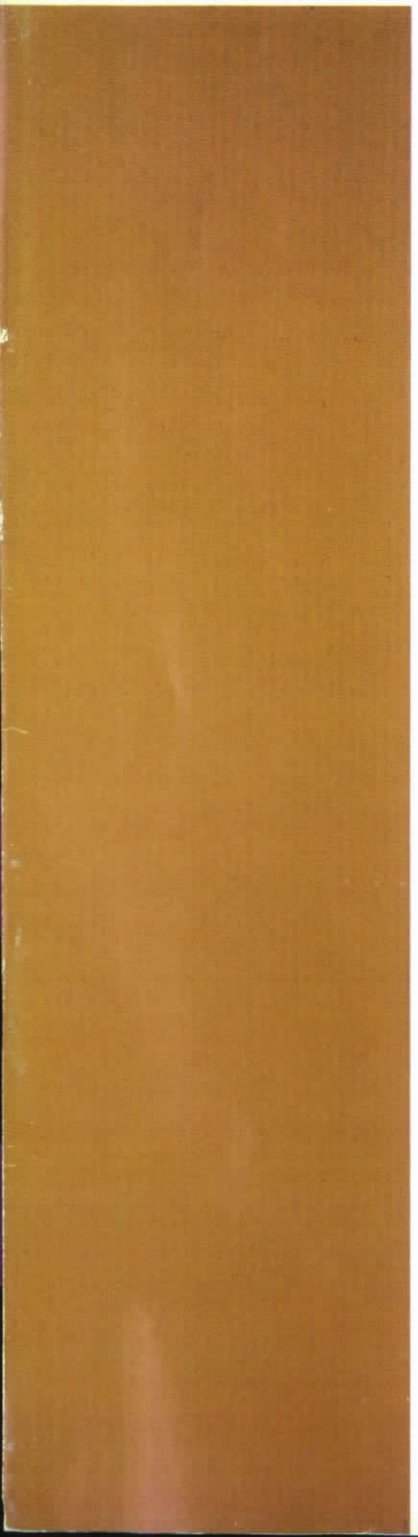
遠山　一　ダーク・ダックス　歌手
喜早　哲　ダーク・ダックス　歌手
佐々木　行　ダーク・ダックス　歌手
高見澤　宏　ダーク・ダックス　歌手
石井　好子　歌手
小林　道夫　チェンバロ奏者
佐賀　和光　建築家
佐々木信也　スポーツ・キャスター
千　宗室　裏千家家元
高平　哲郎　フリーライター
堤　清二　（株）西武百貨店会長　（株）西友社長
冨田　勲　シンセサイザー作曲・演奏家
服部　克久　作・編曲家
松原　秀一　慶応義塾大学文学部教授
三村　忠良　日本国有鉄道中国地方自動車局長
ミルトン・L・ラドミルビッチ　アメリカ公立アメリカンスクールビジネスマネージャー
村上　兵衛　作家
山城　祥二　山城組組頭　筑波大学講師
吉川　光　NHKモスクワ支局長

事務局

笠井　章弘　（財）政策科学研究所理事長
山田　嗣　（財）政策科学研究所理任研究員
小浜　政子　（株）二十一世紀企画
松葉千恵美　（株）二十一世紀企画
村野　京一　（株）二十一世紀企画

〈各部会とも五十音順〉

■21世紀フォーラム第17号■発行／1983年6月30日■発行人／笠井章弘■発行所／21世紀
フォーラム事務局／東京都千代田区永田町2—4—11／フレンドビル6階／㈱二十一世紀
企画内／電話(03)508・2625■編集／21世紀フォーラム事務局■印刷／㈱有朋社

Printed in Japan
©21世紀フォーラム事務局

■クロイワ・カズ